

広島市の文化財 第30集

広島市安佐南区祇園町所在

広島経済大学
構内遺跡群 発掘調査報告

1984.3

広島市教育委員会

3. 長う子遺跡

(1) 調査の概要	-----	5
(2) 検出の遺構	-----	5
(3) 検出の遺物	-----	12
(4) 小 結	-----	14

(1) 調査の概要 (第3図)

本遺跡は、本遺跡群の北側に位置している。西側の武田山から派生した丘陵が標高145mあたりで傾斜がゆるやかとなって平坦面を形成し、標高120mあたりから再び急傾斜となって谷に下る地形となっている。遺跡は、この傾斜がゆるやかとなった平坦部分の、全長約100mの範囲に分布している。試掘調査によって、この尾根の先端部から住居跡と考えられる遺構と土器が出土したため、集落跡の存在を想定して調査を行なった。試掘調査の結果から、遺跡の範囲は尾根先端部の標高125mあたりまでと考えられていたが、立木伐採後の地形観察により、遺跡の範囲はさらに拡大することが予想されたため、当初の予想範囲を大幅に越える調査区を設定した。

本遺跡の地形はほぼ南東へ一直線に延びており、この地形にあわせて調査区を設定した。調査区は、尾根の中心線で南北両側に分割し、さらに傾斜変換点を目途に細分し最終的に南北各9区を設定した。各調査区間は土層観察用のベルトを残して調査を行ない、最終的にベルトを撤去して完掘を行なった。

調査の結果、竪穴式住居跡6軒、掘立柱建物跡7棟、土壇8、壺棺1、溝状遺構2を確認し、遺構内及び周辺から多量の弥生式土器、少量の土師質土器及び陶器類の他、鉄器類、石器類が出土した。

(2) 検出の遺構

調査の結果、調査区全体にわたって遺構が検出された。竪穴式住居は先端部と遺跡中央部の2に分かれて検出され、先端部から番号を付した。掘立柱建物跡は、先端部、中央部、最奥部の3ヵ所から検出され、各部分を先端からA群、B群、C群とし各群内で1～3号建物跡とした。その他の遺構は、大概先端部から順次遺構番号を付した。以下、各遺構について概要を述べていきたい。

第1号住居跡 (第4図)

本遺跡の先端部の緩傾斜面より検出した竪穴式住居である。傾斜面に作っているため、壁は北西部で約60cmを測り、南東部に向けて次第に低くなり、南東部で10cmを測る。平面プランはほぼ正方形を呈し、東西4.2m、南北4.0mを測る。壁溝は壁に接して全体の1/2程度にめぐらされており、幅約20cm、深さ2cm～9cmを測る。柱穴は、平面プランにあわせて、各コーナーより1.0m～1.5m内側の位置に4本が配置されており、径25cm～35cm、深さ40cm～62cmを測る。この内、南東部の柱穴は、そのプラン、断面の形状から2本の重複が考えられ、本住居は少なくとも1回の建て替えがあった可能性がある。床面中央部付近からは、焼土面が検出されたが、炉と考えられる土壇は検出されなかった。

遺物は、床面からは少量の土器片の他に鉄片1、砥石1点が出土したのみである。

本住居南辺外側より、浅い落ち込みが掘り方をわずかに重複して検出された。埋土内からは、少量の土器細片と、角礫、木炭片が出土したが、形状が不整形で明瞭には検出されず、性格については明らかではない。

第2・3・4号住居跡 (第5図)

本住居は、1号住居の西方約10mの尾根先端部斜面から検出された。調査前の地形観察から、斜面の高い方から約1.5m掘り下げた1辺約5mの方形を呈する平坦面が見られた。この地形状態から、何らかの遺構の存在が想定されたため、排土を行なったところ検出された。この方形の平坦面は、遺物が出土していないため明確ではないが、周囲の遺構配置状態から考えて中世の遺構と考えられる。

検出された住居跡は壁を重複することなく同心円状に3軒と考えられる床面が検出され、中央から外側に2号住居、3号住居、4号住居と呼称することとし、各床面から検出された柱穴と考えられる小ピットは、2号住居床面検出の小ピットから順にP1からP13とした。

調査に際しては、重複関係を明らかにするためベルトを残して精査を行ったが、土層観察からは明瞭に確認することはできなかった。埋土内に3号住居床面と同レベルで3号住居埋土上面に固い面が見られたこと、この固い面付近に比較的土器が多く出土したことなどから、3号住居の床面があったと考えられる。このことから3号住居は2号住居より新しいと考えられる。3号住居と4号住居については上記のような面が見られないが、土器が4号住居床面と同レベル付近で少量出土しているところから、4号住居は3号住居より新しい可能性が強いと考えられる。すなわち、2号住居から外側に向けて順次拡張したと考えられる。拡張に際しては、掘り方の重複が見られないことから、古い住居を意識して行ったことが考えられる。

2号住居は中心部に位置し、現地表下約1.6mから床面が検出された。円形プランを呈し、径4.2mを測る。現存する壁は40cm～50cmを測る。南半部の一部を除いてほぼ全体に浅い壁溝がめぐらされ、幅10cm～30cm、深さ1cm～3cmを測る。本住居に伴う柱穴は、P1、P2、P4、P5の4本と考えられる。各柱穴は、壁より約70cm離れて配置され径30cm～35cm、深さ52cm～57cmを測り、柱穴間は2.1mを測る。南側で、壁から外側へ向けて長さ2m、幅20cm～30cm、壁と交差する部分の深さ38cmを測る溝を検出した。底面は外側へ向けて次第に高くなっている。検出状況から、本住居に伴うと考えられるが、性格については明らかにできない。遺物は床面より、土器片、角礫が出土した。土器は土圧によってつぶされたように検出され、3号住居構築の際、埋めたことが首肯されよう。

3号住居は、2号住居をとりまくように検出された。円形プランを呈し、径5.8mを測る。地山が傾斜しているため南側で壁が低くなり、一部では消滅している。現存する壁は最高で36cmを測る。壁溝は、南側の1/4を除いてめぐらされており、幅20cm～30cm、深さ1cm～5cmを測る。柱穴は位置、規模から考えてP3、P6、P9、P10の4本と考えられる。各柱穴は、壁から1.0m～1.2m離れて配置され、径25cm～35cm、深さ43cm～63cmを測る。柱間はP7-P3が2.1m、P3-P6が3.3m、P6-P10が1.5m、P10-P7が2.9mを測り、東西に長い台形を呈している。床面は2号住居掘り方をとりまくように幅20cm～1mに検出された。南側で壁から外側へ向けて長さ約1.0m、幅15cm、深さ12cm～21cmの溝が検出された。この溝は、2号住居検出の溝と類似しているが、2号住居の溝が外側へ向かう程高くなるのに対し、この溝は外側に向かう程低くなっている。従って、排水のための施設かと思われるが明確ではない。遺物は床面から少量の土器片、河原石の他、P9の南側から鈍1点が出土した。なお、埋土内の床面と同レベルから土器片が比較的まとまって出土しており、このあたりの埋土に固い面が一部で見られたことから、この固い面が3号住居の床面と考えられる。

4号住居は、3号住居をとりまくように検出された。地山が傾斜しているため、南半部で掘り方が消滅している。円形プランを呈しており、推定径7.4mを測る。現存する壁は最高で66cmを測る。壁溝は検出した壁に接してほぼ全体に検出され、幅25cm～35cm、深さ1cm～5cmを測る。本住居に伴うと考えられる柱穴は規模から考えてP8、P9、P11、P12、P13が考えられるが、配置から考えて断定しがたい。床面は3号住居をとりまくように幅10cm～50cmを測る。床面からの遺物は壁溝上から1片の土器の他、角礫が出土した。この住居は柱穴が明瞭ではなく、3号住居床面との差が30cm前後しか見られないため、3号住居に伴うテラス状遺構の可能性も残されるが、埋土上層から遺物が出土しているため住居跡とした。

第5号住居跡（第6図）

調査区のほぼ中央部の尾根中心線より若干斜面に寄った位置から検出した。第1号住居の西方約40mの位置にある。斜面にかかる部分に位置しているため、掘り方の東辺は消滅している。平面プランは東西にやや細長い胴張りの隅丸方形を呈しており、南北4.8m、東西は推定5.6mを測る。壁溝は壁に接して全体にめ

ぐらされ、幅30cm～40cm、深さ1cm～5cmを測る。柱穴は4カ所で検出された。壁より1.1m～1.2m離れて配置され、径25cm～50cm、深さ45cm～60cmを測る。床面中央部から、長径1m、短径80cm、深さ15cm～16cmを測る不整形の土壌を検出した。壁面が赤変した部分は見られないが、埋土内に炭化物と黒色土が見られたところから炉跡と考えられる。床面東端の斜面にかかった部分で土壌2を検出した。両土壌の掘り方は一部で重複が見られた。やや大きい西側の土壌は、やや不整形のプランで断面円筒状を呈し、開口部1.3×1.5m、最大径は底部にあり、1.66m×1.48m、深さ82cm～117cmを測る。底面の周縁の3分の1程に、幅8cm～12cm、深さ2cmの浅い溝をめぐらせている。埋土内から少量の上器片が出土した。東側の土壌は、円形プランで断面円筒形を呈し、開口部1.2m×1.26m、底部径1.2m、深さ21cm～57cmを測る。埋土内からは少量の土器片が出土した。両土壌の新旧関係は明らかではないが、本住居に伴う貯蔵穴と考えられる。遺物は、東コーナー部近辺から土器片が出土し、炉跡の北約1.3mあたりから鈍1点が出土した。

第6号住居跡（第7、8図）

本住居は、第5号住居の西側に隣接して検出された。尾根線のほぼ中央に位置している。ゆるやかに傾斜する斜面を掘り込んで床面としており、このため、東半部の壁は消滅して壁溝のみが検出された。平面プランは円形を呈し、径7mを測る。地山を最高で47cm掘り込んで床面としている。壁溝は、東側の約4分の1を除いてほぼ全体にめぐらされ、幅20cm～40cm、深さ5cm～15cmを測る。床面からは、小ピットが17カ所検出された。（P1～P17、計測表参照）この内、主柱穴と考えられるのは、位置と規模からP1、3、5、6、9、13、15の7カ所と考えられ、プランにあわせて壁より1.2m～1.5m離れて配置されている。各柱穴間は、1.6m～2.2mを測る。P9、P15は形状から2本の重複が考えられ、本住居は少なくとも1回

の建て替えがあったことが考えられる。床面中央部からは、ほぼ方形プランを呈する土壌が検出された。長さ1.24m、幅74cm、深さ9cm～21cmを測り、床面は凹凸が著しい。埋土内からは炭化物と黒色土が検出され、壁に赤変した部分は見られなかったが、炉跡と考えられる。

本住居の尾根上側に隣接して、台形状を呈する平坦部を検出した。尾根斜面地山を

No.	径	深さ	備考	No.	径	深さ	備考
1	22×40	45	主、釣針	10	30	30	
2	32×28	44		11	32	31～35	
3	40×42	65～74	主	12	31×32	47～52	
4	38×30	44～47		13	55×56	60～66	主
5	38×32	44～48	主	14	38×42	35～41	
6	36×38	56～60	主	15	36×72	57～66	主
7	22	34～36	土器片	16	34	28～37	
8	36	29～40		17	18	30～31	
9	42×54	65～67	主				

付表1 第6号住居ピット計測表

「へ」の字状に掘り込んで床面としており、検出した掘り方は南北5.2m、東西2m、最高で69cm掘り込んでいる。6号住居床面との比高は約1.3mを測る。平坦面からは、3カ所で小ピットを検出した。この小ピットは形状から柱穴と考えられるが、相互関係に規則性は見られない。遺物は、床面にほぼ接して角礫1点が出土した。この平坦面は住居跡の可能性が考えられるが、明らかにすることはできない。

本住居の北側の壁が消滅するあたりから、長さ約3mの円弧状の掘り方を検出した。この掘り方に接して壁溝と考えられる溝を検出した。この掘り方から約2.5m離れて径25cm～28cm、深さ40cm～50cmの小ピットを検出し、この小ピットの周辺は比較的平坦とされている。このことから、この円弧状の掘り方は住居跡の可能性が考えられるが確認できない。この平坦面が急傾斜となるあたりで壺棺1基を検出した。

遺物は6号住居内及び周辺から多量の土器の外、銅鏃、分銅形土製品、ガラス小玉、磨製石剣が出土した。土器は全て弥生土器で完形品及びそれに近い状態で出土し、6号住居内においては西半部に限定され、壁に近い程地山より浮いて出土し、住居のほぼ中央あたりで地山に接するように出土した。又、尾根北側斜面から多く出土しており、検出状況は6号住居内出土の土器と連続していると考えられ、尾根をとりまくように土器が出土しているといえよう。従って、これら土器群は、6号住居より上部尾根上から流れ込んだものと考えられるが、これに伴う遺構は見られないため、性格は明らかではない。土器のうち、地山に接するものも見られるため、6号住居に伴う土器も含まれることが考えられるが、明確に区別はできない。土器の他、銅鏃、分銅形土製品、ガラス小玉は6号住居内の土器群内から出土しているところから、土器と伴うことが確認できる。土器群からやや離れ6号住居より西側約4mの尾根南側斜面となる部分から磨製石剣1が出土した。(第9図) 出土位置は土器群と接近しておりレベル値も近似しているところから、土器群に伴うものと考えられる。なお、P1の掘り方の肩部から下方へ約8cmの位置から鉄製釣針1点が出土した。

第1号土壙 (第10図)

第1号住居の北側に隣接して検出した方形を呈する土壙である。掘り方の一部を1号住居と重複するが新旧関係については把握できなかった。長さ2.1m、幅1.3mを測り、傾斜面に位置するため、深さは西側で約1.3m、東側で約70cmを測り、底面はほぼ水平を呈する。主軸はN5°Wをとる。埋土内からは多量の土器が出土したが、断面観察によれば、上面から落ち込んだように観察された。又、出土位置は、掘り方北半部に見られる。これらのことから本土壙は墓壙の可能性が強いと思われるが、明確にはしえない。

第2号土壙 (第11図)

第1号土壙の北側に隣接して検出された断面袋状を呈する土壙である。開口部は長円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.25mを測る。斜面に位置するため、深さは西側で1.6m、東側で約1.0mを測る。底面は円形を呈しほぼ水平を保っており、径1.3mを測る。底面周縁に東側の一部を除いて、幅15cm、深さ1cm～3cmの浅い溝がめぐらされている。埋土内からは弥生土器が底面より80cm～90cm浮いた状態で出土した。土器の他、少量の貝殻片が出土した。位置と形状から、本土壙は1号住居に伴う貯蔵穴と考えられる。

第3号土壙 (第12図)

本土壙は、第2～4号住居の北西約3mの急斜面から検出した不整形の土壙である。開口部は80cm×90cm、深さ30cm～60cmを測る。底面は不整形ではあるが水平を保っている。壙内より、底面から約50cm～60cm浮いた位置で、ほぼ水平に土器片がまとまって出土し、土器片の直下に50cm×50cmの範囲から貝殻片が、厚さ最大20cmのレンズ状に推積した状態で出土した。位置から2号～4号住居のいずれかに伴う土壙と考えられ、不用物の廃棄施設ではないかと考えられる。

第4号土壙 (第13図)

2号～4号住居の東側約2mの位置に検出した円形土壙である。開口部径1.4m、底部径1.2m～1.3m、深さ、最大で74cmを測る。底部はほぼ水平を保っている。東側の壁は、中世と考えられる遺構と重複している。断面はわずかに袋状を呈している。埋土内から、弥生土器と考えられる土器細片が出土した。位置と形状から考えて、2号～4号のいずれかに伴う貯蔵穴と考えられる。

第5号土壙 (第14図)

1号土壙の北西約9mの尾根上から検出した円形土壙である。開口部径1.3m、底部径1.1m、深さ24cm～50cmを測る。埋土内から弥生土器片、鉄片が出土した。これら遺物は、底面より10cm～15cm浮いた状態で出土した。性格については明らかでない。

第6号土壙（第15図）

第6号住居上方約10mの尾根上から検出した円形土壙である。開口部径1.3m～1.4m、底部径1.0m、深さ65cm～78cmを測る。底部はほぼ水平を保っている。埋土内からは弥生土器片が出土した。断面はわずかに袋状を呈しており、貯蔵穴と考えられる。

第7号土壙（第16図）

掘立柱建物跡C群1号、2号建物跡の南側約3mのやや斜面となる位置に検出した丸みをもった方形の土壙である。斜面にかかる位置のため、南西コーナあたりで掘り方がみられない。1.1m×1.1m、深さ20cm～32cmを測る。底部は水平を保っている。壙内からは底面より約10cm浮いて土器片が出土した。性格については明らかにできない。

壺 棺（第17図）

第6号住居跡の北側約2mの位置から検出された壺棺である。6号住居周辺の平坦部が斜面にかかるあたりに位置している。地山を、長さ98cm、幅65cm、深さ20cm～68cmの万形に掘り込んで墓壙としている。壙底は、中央部でわずかに凹んでおり、これは棺身の安定をはかるためと考えられる。墓壙の北側に寄せて棺を埋置している。棺は、土圧のためかわずかにひずむとともに、割れているがほぼ原状を保って検出された。棺身は、大形壺形土器の胸部のみを使用している。土器は卵状を呈し、高さ55cm、最大径43cm、底径9cm、を測る。この棺身に、口縁部から胴部上半にかけて、棺身の形状にあわせて打ちわった甕形土器を蓋としてあて、その接合部の下側に打ち割った甕形土器の破片をあてている。蓋として使用した土器は高さ25cm、口径16cm、最大径20cmを測る。棺内からは遺物は出土しなかった。

この壺棺は、その規模から考えて小児用と考えられる。

掘立柱建物跡群

本遺跡群からは、掘立柱建物跡群が検出された。これら建物跡群は、2～3棟づつのまとまりをもって3群が確認された。各群を尾根先端部から順次A群、B群、C群と呼称することとした。

A 群（第18図）

尾根先端部から検出した建物跡群である。尾根先端部の南半部傾斜面をL字状に掘り込んで平坦部として、この平坦面から、掘立柱建物跡2棟、土壙1、溝状遺構を検出した。遺物としては、少量の弥生土器片の他に少量の土師質土器、陶器類、砥石瓦を検出した。

遺構面は傾斜する地山をL字状に削平して造成しており、規模は地山を最高で74cm、掘り込んでおり、長軸で約8m、短軸で4.5m、平坦部最大幅は約7mを測る。長軸の西側寄りで幅約40cm、深さ5cm～6cmの溝が検出された。長軸の東寄りで掘り方を切るように溝状遺構が検出され、この溝状遺構をはさんで狭小な平坦部が見られた。この狭小な平坦部は、掘り方と平坦部レベルの状態から西側が連続しているものと考えられる。この平坦部から、方形の土壙が検出された。この方形の土壙は開口部は長さ1.4m、幅90cmを測り、底面は、ほぼ水平とし、長さ75cm、幅50cmを測る。深さは114cm～122cmを測る。この土壙の東、西、南コーナーから20cm～40cm離れて、小ピット3が検出された。壙内からは弥生土器片が流入した状態で出土し、底面近くで黒色土が検出された。この土壙は、この狭小な平坦面に伴うものと考えられる。平坦面からはピット群が検出された。その配置状態から建物跡2棟が想定された。東側を第1号建物跡、西側を第2号建物跡とした。又この平坦面を分断するように尾根中央部に下方から上ってくる溝状遺構を検出した。（第1号溝状遺構）溝状遺構の検出した長さは約16m、平坦面と重複する部分で上端幅1.7m、深さは検出した部分の最大値で約3.3mを測る。この溝は20°の傾斜をもっており、かなり急傾斜といえる。下端幅は約50cmとしている。この溝状遺構は形状から通路として作られたものと考えられる。溝内からは流入した状態で、

弥生土器片、砥石、瓦片が出土した。この平坦面からは、掘り方近辺から、土師質土器皿、すり鉢の破片が出土した。すり鉢は柱穴内から出土したのも見られ、この平坦面が中世に構築されたものと考えられる。

A-1号建物跡（第19図）

本平坦面から検出した掘立柱建物跡である。第1号竪穴住居跡の西約5mに位置する。2間×1間の建物であり、桁行1.85m、梁行3.65mを測る。柱穴は径30cm～45cm、深さ32cm～66cmを測る。なお、本建物跡の北西側1.8m～2.1mの位置に2カ所の小ピットが検出された。この小ピットは、本建物跡の柱穴よりやや小規模であるが梁行の延長上にあり本建物に伴う可能性がある。この場合、本建物跡は3間×1間と考えられるか、柱穴が小規模なことから2間×1間の建物にひさしのような張り出しを想定することも可能であろう。

A-2号建物跡（第20図）

1号建物跡の西約2mの位置に検出した。柱穴は4本検出され、配置状態から2間×1間の建物と考えられるが、2本が検出できないため断定はできない。桁行1.9m、梁行4.2mを測る。柱穴は径30cm～40cm、深さ41cm～54cmを測る。梁行は、第1号建物跡とほぼ同方向をとる。

B群（第21図）

A群の西約15mの尾根上から検出した。尾根平坦部を11m×10mの範囲を削平して遺構面としている。削平の規模は残存する地山のレベルから推定して少くとも60cm掘り込んだものと思われる。この平坦部の西から北側地山を「L字状」に削り残して土塁としている。土塁の規模は北側で長さ10m、高さ50cm、基底部幅1.5m、西側で長さ8m、高さ50cm、基底部幅約2mを測る。北側の土塁は、2カ所で途切れている。東側の分断部は幅1.2m、土塁頂部からの深さ15cm～32cmを測る。底面は、第1号建物跡床面から同レベルで連続して検出されており、通路かと思われる。西側の分断部は、断面がわずかに袋状を呈する土壙となっており、径1.5m、土塁頂部よりの深さ60cmを測る。壙内からは遺物が出土せず性格については明らかではないが、弥生時代の貯蔵穴の可能性が考えられる。西側の土塁に連続して尾根線と直交するように断面箱葉研を呈する溝を検出した（第2号溝状遺構）。検出状況から、土塁を築造する際に築造したと考えることが妥当であり、B群に伴う遺構と考えられる。

本群からは、土塁に囲まれた平坦面内から3棟の建物跡が確認された、全て掘立柱の建物で、東側の建物跡を1号建物跡西側土塁に近い建物跡を2号建物跡、2号建物跡の東に隣接する建物跡を3号建物跡とした。この他、平坦面の東外側の尾根上で小規模なピットが6カ所で検出された。規模は小規模であるが、平面形は六角形を呈するように検出された。周辺からは遺物は見られず、建物跡とするには疑問は残るが、竪穴式住居の掘り方を失なったものの可能性がある。即ち竪穴式住居の存する尾根を後世大きく削平して平坦面を造成した可能性が想定されよう。

1号建物跡（第22図）

尾根中央部より北側に寄った部分から検出した建物跡である。地山を4.7m×4.7mの範囲に最高で44cm掘り込み、さらに下端から約2mの位置で約15cm掘り込み、遺構面は2段としている。上段掘り方下端に接して、幅30cm～40cm、深さ2cm～7cmの溝が検出され、この溝は土塁の外側まで延びており、排水用の施設と推定される。

建物跡は、2段目の掘り方上に中間の柱を置いて削平した掘り方に対し、ほぼ一ぱいに構築されている。9本の柱穴が検出され、2間×2間の総柱の建物と確認され、桁行3.2m、梁行4.0mを測る。柱間は桁行で1.8m、1.4m、梁行で1.8m、2.2mとやや変則的な配置としている。検出した柱穴の規模は、径30cm～45cm、深さ38cm～72cmを測る。遺物は出土しなかった。

2号建物跡（第23図）

1号建物跡の西側約2mの西側土塁に近接して検出した掘立柱建物跡である。尾根中央線より南斜面側に位置している。8本の柱穴を検出し、その配置から2間×2間の建物と確認され、桁行2.9m、梁行3.85mを測る。柱間は1.5m～2.1mを測る。床面中央よりやや北寄りに径70cm、深さ10cmの円形の土壇を検出した。壇内からは炭化物、黒色土が検出され、火の使用が確認された。この土壇の西半部に馬蹄状を呈する石が検出された。この石は地山の石とも考えられるが、その形状から、かまどのように使用したかもしれない。遺物は出土しなかった。

3号建物跡（第24図）

2号建物跡の東側に隣接して検出した建物跡である。地山を7m×2.8mに掘り込んで遺構面としている。幅約2mの平坦部が検出されこの南側は斜面となっており、この部分からの遺物出土レベルから盛り土としたことが考えられる。従って、本建物跡は、検出された規模より若干大きかったことが推定される。遺構面からは、6本の柱穴が検出された。この配置状態から13間×1間の建物跡と確認され、桁行1.8m、梁行6mを測る。しかし、梁行の中間の2本が見られないこと、上述したように、南側で盛り土が推定されることから、さらに大きな建物となることが考えられる。しかし、地形状態から、それ程遺構面も伸びないと考えられることから、3間×2間の建物と推定されよう。遺物は微量の土師質土器片の他、東端の柱穴直近から、小柄が1点出土した。

2号溝状遺構（第25図）

既に述べたように、西側土塁に連続して検出した。断面箱葉研を呈する溝である。尾根線に対し直交するように掘り込んでおり、尾根中央部で上端幅約3m、下端幅約1.5m、深さ1.4mを測る。底面は尾根中心線あたりで最も高く、両側斜面に向かって下っており、とくに南側には急傾斜で下っている。溝底北端から径1.5m、深さは最高で30mを測る円形の土壇が検出された。

溝内からは、弥生土器が多く出土した。出土状態は、中央より北半部では底面に多く、南半は、土塁側斜面から底部にかけて出土した。遺物は全て、地山より浮いており、流入したものと考えられる。本遺構は、土塁から連続して作られており、B群に伴う遺構とすることが妥当であり、背面防禦用の施設と考えられる。溝内からの弥生土器は、B群を構築する際、弥生時代の遺構を破壊したためではないかと考えられる。

C群建物跡（第26図）

本群は遺構の西端、尾根平坦部の基部にあたる部分で検出された。地山の高い方を尾根線に直交するように2段に掘り込んでおり、上段は三角形を呈しており掘り方の長さ約9m、高さ最大で63cm、平坦面の最大幅3mを測る。下段は長さ10m、高さ最大で51cmに掘り込んでおり、平坦面はゆるやかに下方に下り自然傾斜と一致して下方に向かうている。上段の平坦面からは、遺構、遺物は検出されなかったが下段からは多数の柱穴と少量の遺物が出土した。検出された柱穴から、少なくとも2棟の掘立柱の建物跡を確認することができ、西側から1号、2号とした。下段の北側斜面からは2ヵ所で住居跡状の落ち込みを検出した。西側の掘り方は、L字状を呈し、長辺3.3m、短辺0.8m、壁の高さは最大で35cmを測り、床面は不整形を呈し、最大幅1.3mを測る。東側の落ち込みはL字状を呈し、長辺2.8m、短辺1.8mを測る。壁の高さは最大で52cmを測る。壁に接して壁溝が検出され、幅15cm～20cm、深さ2cm～3cmを測る。床面の最大幅は90cmを測る。この両遺構は形状から、住居跡の可能性が考えられるが、明確にはできない。遺物は、掘り方内から少量の弥生土器片が出土した。

遺物は下段平坦面の掘り方に近い位置から少量の土器片、石斧片1が、住居跡状の落ち込みから、地山か

ら浮いた状態で弥生土器片が出土した。

1号建物跡（第27図）

下段掘り方下端約6mより検出した建物跡である。2間×1間と考えられ、桁行2.0m～2.2m、梁行2.8mを測る。柱穴は径26cm～30cm、深さ33cm～40cmを測る。遺物は検出されなかった。

2号建物跡（第28図）

1号建物跡の北側に隣接して検出した建物跡である。下段平坦面を、さらにL字状に掘り込んで遺構面としており、掘り方の規模は、南北3.8m、東西5.0m、高さは最大で31cmを測る。この遺構面からは多数のピットが検出された。このピットの配置状況から、2間×1間の建物跡を確認した。建物跡は、桁行2.2m、梁行3.2mを測り、柱穴は径30cm～40cm、深さ48cm～60cmを測る。遺物は出土していない。

（3）検出の遺物

調査の結果、遺構及びその周辺から弥生土器、石製品、鉄製品、ガラス製品、銅製品等が出土した外、少量の土師質土器、陶器類、瓦片が出土した。とくに、第6号住居跡内及びその周辺の斜面から多量の弥生土器が出土した。

以下、各遺物について概要を述べることとする。なお、土器の詳細については観察表とした。

弥生土器（第29図～第41図）

本遺跡からは多量の弥生土器が出土した。器種については、壺形土器、甕形土器が大部分を占めており、少量の鉢形土器、高坏が見られる。壺形土器、甕形土器の特徴については、次のことがあげられる。口縁部については、①「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、2～4条の凹線をめぐらせるもの、②「くの字」状に外反する口縁部の端部を平たくおさめるもの、③「くの字」状に外反する口縁部の端部がうすくなりつつ、丸くおさめるものがあげられる。量的には②の形態の土器が多い。底部は、平底で若干凹底となっているものが多く、わずかであるが丸底を呈するものが見られる。技法については、内面はヘラ削りの後ナデ調整を施し、外面はハケ目調整を施すものが多い。鉢形土器については、壺形土器、甕形土器と類似した形態の口縁部であるが、口縁部の端部はうすくなって平たくおさめるものが多い。個別の詳細については観察表とした。

中世関係土器類（第42図1～4）

掘立柱建物跡A・B群から土師質土器、すり鉢が出土した。C群からは中世と考えられる土器は出土しなかった。B群からは土師質土器（皿）が出土したが、細片のため図示できなかった。1・2はすり鉢である。1は産地は不明であり、2は備前焼である。3・4は土師質の皿で、3はススが付着していることから灯明皿と考えられる、詳細については観察表参照。

磨製石剣（第43図）

第6号住居跡の南西約5mの斜面から出土した完形の磨製石剣である。鋒を南に向けて、地山斜面に平行するように、地山より約40cm浮いて出土した。上部からの流入と考えられる。（第9図参照）

石剣は、鉄剣形に分類できるもので、長さ20cm、刃部長15cm、茎部5cmを測る。刃部最大幅は関部にあつて3.4cmを測る。刃部断面は菱形を呈し、最大厚1.5cmを測る。鑄は、片面はほぼ中央にあるが、片面は先端に至る程ずれている。刃部は丸みをもっており、鋭利さに欠ける。石材は 製と考えられる。

石製品（第44図1～5、第45図1～4、第46図）

調査区内からは、少量の石製品が出土した。大部分は砥石で、石斧1、刃器1を含んでいる。第44図1は、1号溝状遺構内から出土した砥石である。9.8cm×6.8cm、最大厚0.75cmを測る板状の砥石である。上下両

面と端面の一部に使用面が見られる。粘板岩製と考えられる。2は、1号土壙から出土した砥石である。4.35 cm×3.7 cm、最大厚1.05 cmを測る。小口の2面を除く全面に使用面が見られる。粘板岩製と考えられる。3は、N7区斜面土器群より出土した砥石である。長さ11.2 cm、最大幅2.3 cm、最大厚2.0 cmを測る。柱状を呈し、4面に使用面が見られ、中央部が凹んでいる。粘板岩製と考えられる。4は、掘立柱建物跡C群内より出土した砥石である。長さ6.4 cm、幅3.5 cm、最大厚1.1 cmを測る。平面三角形を呈し、端面の内の1面を除いて全面に使用面が見られる。粘板岩製と考えられる。5は掘立柱建物跡C群内より出土した石斧残欠である。刃部側の約1/2を欠失している。断面楕円形を呈し、5.7 cm×4.5 cmを測る。太形蛤刃石斧と思われる。第45図1は、3号住居内から出土した砥石である。長さ27 cm、最大幅11 cm、最大厚6.7 cmを測る。広口面の1面と、端面の一部に使用面が見られる。流紋岩製と考えられる。2は、3号住居跡内から出土した砥石である。長さ13.1 cm、幅16.7 cm、厚さ8.7 cmを測る。広口面の2面と端面の1面に使用面が見られる。細粒花崗岩製と考えられる。3は、調査区内から出土した砥石である。長さ14.7 cm、幅13.4 cm、最大厚5.0 cmを測る。長辺の4面に使用面が見られ、若干凹んでいる。半花崩岩製と考えられる。4は、第5号住居跡内から出土した砥石と考えられるものである。長さ24.5 cm、幅15.4 cm、最大厚9.3 cmを測る。広口面の1面のみで使用面が見られ、中央部が凹んでいる。花崗岩製と考えられる。使用面に擦痕が見られないので、作業台の可能性も考えられる。第46図は、S5区表土から出土した刃器である。剥片の1辺を両面から調整を行って刃部としている。長さ7.7 cm、幅5.8 cm、最大厚0.7 cmを測る。安山岩製と考えられる。

鉄製品 (第47図1～8, 第48図1～7)

調査の結果、少量の鉄製品が出土したが、器形をうかがうことができたのは15点である。出土地点、形態から、弥生時代のものと、中世のものに分類できる。第47図は弥生時代のものである。1は、第2号住居跡内から出土した片刃式長頸鎌で腸挟をもつものである。刃部先端と茎尻を欠失している。現存長13.9 cm、刃部幅0.9 cm、厚さ0.3 cm、頸部は中央で幅0.55 cm、厚さ0.4 cm、茎部は幅0.6 cm、厚さ0.2 cmを測る。土圧のためか湾曲している。2は、第6号住居跡土器群内より出土したきり状鉄製品である。両端部が欠失しているため全体は不明であり、用途は明らかにできない。現存長14.0 cmを測る。断面は、両端部は方形を呈するが、中央部はうすくなっている。3は、第1号土壙より出土した刀子又は鉄鎌と考えられるものである。現存長7.2 cmを測る。刃部は断面くきび状を呈し、背部厚さ0.4 cmを測る。関部から先端部へ向けて次第に幅が大きくなる形態をとっている。4は、第6号住居跡柱穴内から出土した釣針である。長さ3.6 cmを測る。断面は円形を呈し径0.3 cmを測る。先端部は逆刺をつけている。5は、第3号住居跡床面から出土した完形の鉋である。全長12.9 cm、刃部長2.3 cm、茎部長10.6 cm、刃部幅0.9 cm、茎部幅0.9 cmを測る。刃部は、先端に向けてわずかに反り、断面は三日月状を呈しており、厚さ0.25 cmを測る。茎部調面方形を呈し、厚さ0.4 cmを測る。茎部両面に木質が残存している。6は、第5号住居跡床面より出土した鋸である。先端部及び茎尻を欠失している。現存長7.5 cm、刃部幅1.6 cmを測る。刃部は反りがなく直線状である。断面は中央で折れ曲がる三日月状を呈し、厚さ0.15 cmを測る。全体に幅広の印象を与える。7は、第6号住居跡土器群から出土した鉋の刃部である。現存長4.8 cm、現存幅2.0 cmを測る。断面は中央でゆるやかに三日月状に曲がり、最大厚0.2 cmを測る。8は、第2号溝状遺構肩部から出土した。鉋の刃部と考えられる。現存長3.7 cm、幅1.2 cmを測る。断面は、中央部でわずかに曲がり、厚さ0.2 cmを測る。

第48図は、中世と考えられる鉄製品である。1は、第5号住居周辺の表土から出土した鉄鎌である。茎尻をわずかに欠失している。全長15.3 cm、刃部長6.0 cm、刃部幅2.65 cmを測る。刃部は断面菱形を呈し、厚さ0.5 cmを測る。2は、3号住居跡埋土内から出土したものである。両端部を欠失しているか鉄釘と考えられる。現存長4.2 cmを測る。断面は方形を呈し、幅0.55 cm、厚さ0.35 cmを測る。3は、第3号住居跡埋

土内から出土したもので、鉄釘と考えられる。現存長4.1 cmを測り、断面方形を呈する。4は、掘立柱建物跡A群内より出土した鉄釘である。先端部をわずかに欠失している。先端部を折り曲げて方形の頭部としている。現存長5.6 cmを測る。5は、掘立柱建物跡B群内より出土した鉄釘である。先端部を欠失している。現存長7.2 cm、方形の頭部幅1.6 cmを測る。6は、掘立柱建物跡C群内より出土した鉄釘である。先端部をわずかに欠失しており、現存長4.9 cmを測る。頭部は折り曲げて作り、幅0.8 cmを測る。7は、掘立柱建物跡B群第3号建物跡内より出土した小柄である。先端部をわずかに欠失している。現存長17.1 cm、刃部現存長8.2 cm、柄部長8.9 cm、刃部の背部で厚さ0.35 cmを測る。柄部は銅巻きである。

銅 鏃 (第49図)

第6号住居跡土器群内から出土した。刃部先端部、逆刺端部、茎尻を欠失している。現存長3.4 cm、刃部最大幅1.3 cmを測る。刃部断面は菱形を呈し、厚さ0.4 cmを測る。鉄心を入れた鑄造製で、鑄上りは不良である。刃部にはヤスリ目が見られる。

分銅形土製品 (第50図)

第6号住居跡埋土より出土した。上半部の、約1/3の破片で、一方の端を欠失している。現存長5.4 cm、現存幅6.0 cm、中央部現存幅2.0 cmで、くり込み部はゆるやかである。厚さは、縁辺部で0.6 cm、中央部で0.95 cmを測る。表面は凸面で、裏面は平坦面で、中央部から縁辺部へうすくなっている。復元すると、長さ8.5 cm、幅7.4 cm前後のものと思われる。表面の模様は、外縁に沿って同心円に似た櫛描重弧文をめぐらせている。文様の配列は粗雑である。背面に文様はない。表面はヘラ研磨で、端面もヘラによって調整しているが、裏面は櫛歯状工具による調整を行っている。胎土は良好であるが、焼成は若干軟調で黒色を呈する。

ガラス小玉 (第51図)

第6号住居内の土器群中より出土した。3点出土したが、1点は割れており実測は不可能であった。1は、径6.5 mm、厚さ5 mm、孔径2 mmを測り、淡青色を呈する。2は、径4 mm、厚さ2.5 mm、孔径1.5 mmを測り、青緑色を呈する。

瓦 (第52図)

第1号溝状遺構とその周辺から、瓦が破片の状態少量出土した。瓦は平瓦のみで、丸瓦は見られない。全て破片で、全形をうかがうことはできなかった。表面はタタキ目調整、裏面は布目圧痕が見られ、端面はヘラ削りである。

(4) 小 結

調査の結果、本遺跡は弥生時代の集落跡と中世遺構が複合する遺跡であることが確認された。

竪穴式住居跡は、既述のように6軒分検出された。第1号住居跡～第4号住居跡は、尾根先端部から検出された。第1号住居跡は一方形プランを呈しており、第1号土壙と重複して検出された。第1号住居跡内からは、少量の土器片が出土したのみであるため、新旧関係については明らかではないが、住居周辺の土器から考えて、住居が後出と考えられる。第2号住居跡～第4号住居跡は全て円形プランを呈し、重複して検出された。掘り方は、同心円状に検出され、切り合い関係は見られない。出土した土器は、形態に変化が見られない。新旧関係については、第2号住居跡→第3号住居跡→第4号住居跡の順に築造されたと考えられる。以上のことから、これらの住居は、居住者が変化することなく、短期間の内に拡張を行って営まれたものと考えられる。この点からすれば、1軒分と見なすことが可能である。第5号住居跡は隅丸方形プランを呈し、東壁が検出されていない。これは、やや斜面にかかる位置のため盛り土としたためと考えられる。この東壁側から2基の土壙がわずかに切り合っで検出された。土壙の新旧関係は明らかでないが、袋状の形状を呈す

るところから貯蔵穴と考えられる。2基のいずれが本住居に伴うかは明らかにすることはできない。第6号住居跡は円形プランを呈し、傾斜面を掘り込んでいるため、掘り方の半ばは壁が見られない。この住居跡内から斜面にかけては多量の土器群が出土した。この土器群は、上方から流れ込んだ状態で検出された。その状態から、6号住居が廃棄され、掘り方がほとんど埋没していない時期に流れ込んだことが推定され、6号住居内の土器と混在したことが考えられた。従って、6号住居に伴う土器との判別は困難である。しかし、これら土器群の縁辺部において、6号住居壁溝上から2点の完形に近い土器が出土しており1この土器が6号住居に伴うと考えられた。

さて、以上の住居跡群は、その位置から2グループに分類することができる。第1グループは第1号住居跡～第4号住居跡である。本グループから出土した土器は、「くの字」状の口縁部の端部を平たくおさめているが、器厚はやや薄くなるものである。各住居内から出土した土器が共通しているところから第1号住居跡～第4号住居跡は同一時期に営まれたものと考えられる。住居の構成数は、既述のように、第2号住居跡～第4号住居跡が1軒と見なしうるところから、第1グループは2軒から成るものと考えられる。第2グループは、第5号住居跡・第6号住居跡である。第5号住居跡から出土した土器は「くの字」状の口縁部の端部は平たくおさめるものである。第6号住居跡内から出土した土器は大量であるが、上述のように本住居に伴うものは壁溝上の土器と考えられる。この土器の特徴は、第5号住居跡内から出土した土器と類似しており、第5号住居跡と第6号住居跡は、同一時期に営まれたものと考えられる。従って、第2グループは2軒から成るものと考えられる。第1グループと第2グループの土器を比較すると第1グループからの土器がやや新しい様相を呈している。従って、第2グループが営まれた後、第1グループが営まれたものと考えられる。時期的には、土器の特徴から第1グループが弥生時代後期後半、第2グループが弥生時代後期中葉に比定できよう。第6号住居跡内及び、その周辺の斜面から多量の土器群が出土した。この土器群は、その出土状態から、上方から流入したものであることが推定された。出土した土器は、壺形土器、甕形土器が主体で、日常生活に使用したものである。又、土器とともに、分銅形土製品、ガラス小玉、銅鏃が、土器群からやや離れて磨製石剣が出土した。磨製石剣は、刃部が鋭利さに欠けており、儀器と考えうるものである。これらの遺物は、土器群の意味を考える上で重要なヒントを与えるものと考えられる。土器以外のこれらの遺物は、いずれも祭祀遺物としての色彩を濃く反映していると考えられる。従って、土器群は、日常生活に使用した土器ではあるが、祭祀に際し使用されたものと考えられ、上方からの流れ込みにもかかわらず、上方尾根上に土器が見出されないことから、祭祀に係わって意識的に廃棄されたことがうかがえよう。出土した土器の特徴は、弥生時代後期全搬にわたる特徴を示しているが、この内の最も新しい特徴をホす遺物が、土器群が廃棄された時期を示していると考えられる。従って、祭祀の行なわれた時期は、弥生時代後期後半に比定でき、第1グループの営まれた時期と一致すると考えられる。

第2グループの直近に尾根を切断するように、第2号溝状遺構が検出された。この溝状遺構内から弥生土器が出土した。この土器の特徴は、口縁部の端部は上下に拡張し、凹線角めぐらし、体部には凹線をめぐらせた後、間にヘラによる刻みをめぐらせている。このような特徴は、県北の中期後半とされる塩町式土器に類似している。住居跡内及びその周辺からは類似した土器は見られず、検出された住居跡以外に住居が存在していた可能性が考えられた。出土した土器は出土状態から、掘立住建物跡B群側から流入したと考えられることから、B群内に第1号住居跡～第6号住居跡より古い時期の住居が存在した可能性が強く、B群を構築する際尾根を削平しており、この時期に消滅したと考えられよう。

以上のことから、本遺跡は、弥生時代後期初頭を前後する時期に成立し、後期後半にわたって営まれた集落と考えられよう。

掘立柱建物跡は、既述のように、A群、B群、C群の3群が検出された。各群内から掘立柱建物跡が検出された。A群は、尾根先端部を削平して平坦面を造成しており掘立柱建物跡を2軒検出した。この平坦面を分断するように、尾根中央部から溝状遺構（第1号溝状遺構）を検出した。この溝状遺構は、急角度で下方に下っており、遺構面からの深さは最大で約3.5mを測り、排土に際して危険が生じたため、全体を把握することはできなかった。検出した部分で、底部の幅は約50cm、傾斜角は約20°を測り、1人が通行できるものである。検出状態から、A群構築に際して作られたと考えられ、尾根上に登るための通路として作られたものと考えられる。B群は尾根平坦面を大きく削平し、後背部は尾根を切断するように掘り切り（第2号溝状遺構）を設けるとともに、L字状に土塁を設けている。C群は尾根を2段に削平し、下段側から多数の小ピットが検出され、その配置関係'規模から少なくとも2棟分を確認することができた。A群・B群からは、少量の土師質土器・すり鉢などが出土しているが、小片であるため、細かい時期を明らかにすることは困難であるが、A群から検出した溝状遺構は、A群とB群の中間にあたる位置に上端があつて、B群も意識しているものと考えられる。従つてA群とB群は同一時期に作られた可能性が強い。C群から出土した遺物は全て弥生土器であり、中世と考えられる遺物は見られない。このことからC群は、A群・B群と異なつて弥生時代の遺構の可能性が強いと考えられよう。弥生時代の遺構と考えれば、土器の特徴と位置から第2グループに伴うものと考えられよう。

A群・B群は、中世遺構と考えられるので、その性格についてふれておきたい。本遺構は、背後を掘り切りで分断しており、土塁を設けているところから、尾根先端部を利用した山城としての機能を有していると言えよう。又、A群から検出した溝状遺構は、その規模・位置から考えれば、下から攻撃をした場合この溝状遺構を通らざるを得ないと考えられる。このように考えるならば、防禦しやすく攻撃しにくい構造と言えよう。本遺跡の背後には、安芸武田氏の居城である銀山城跡が存在しており、このことを勘案すれば、本遺構は銀山城に密接な関連をもつ遺構と考えられよう。

さて、これらA群・B群が構築された時期であるが、遺物が少量であるとともに細片であるため、明確にすることは困難であつて、時代背景から推定せざるを得ない。安芸武田氏は、承久の変（1221年）の功によつて安芸守護職に任ぜられ、元寇に際して入国した後在国するようになり、正安年間（1299～1302年）頃銀山城を築城したとされている。以後武田氏はこの銀山城を拠点として領国経営を行う。しかし、安芸国内には有力な武士団が多く、さらに周辺の大内氏・尼子氏などの進出があつて、武田氏はその勢力を大きく伸ばすことはできなかった。武田氏は勢力の伸張をはかるため、巖島神主家の相続問題に介入したり、周辺に出兵を行つたりした。しかし、その勢力は大きくなることはなく、旧佐東郡とその周辺を確保したにすぎなかった。そして、永正14年（1517年）有田合戦（千代田町）で元繁が戦死するに及んでその衰亡は決定的となり、ついに1541年、信実の代に毛利氏の攻撃をうけて滅亡した。本遺構は武田氏が銀山城の防禦機能を高めるために設けたものと考えられ、武田氏が、大内氏・尼子氏の攻撃をうけるとともに、それに対抗して周辺に出兵する時期に設けたものであろう。以上のように考えるならば本遺構は16世紀初頭を前後する時期に武田氏によつて構築されたものであろう。

参 考 文 献

「新修広島史 第1巻総説編」

「祇園町誌」

付表2 長う子遺跡出土土器観察表

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第29図 1	1号住居 掘り方外	甕	口径 12.0	直立気味に上がる口縁部の端部はわずかに外反し、丸くおさめている。	内面 胴部ヘラ削り 口縁部ハケ目調整 後ヨコナデ 外面 胴部ハケ目調整 口縁部ヨコナデ	胎土砂粒多し 焼成良好 淡褐色 スス付着
2	2号住居	甕	口径 17.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部はわずかに水平に出し平たくおさめている。	内面 胴部ヘラ削り 口縁部ヨコナデ 外面 胴部ハケ目調整と ヘラ研磨 口縁部ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色 スス付着
3	3号住居	鉢	口径 18.0	立ち上がる口縁部の端部はわずかに外反し平たくおさめている。	内外面ともハケ目調整を行ない、外面胴部下半はヘラ磨きを施す。口縁部はヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
4	2号住居	壺	口径 18.0	壺の口縁部の破片である。外反する口縁部の端部は平たくおさめている。	内外面ともヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色
5	2号住居	鉢	口径 16.8	外上方へ延びる口縁部の端部はわずかに外反し平たくおさめている。「ハの字」状に開く高台を貼り付けている。	内面 体部ヘラ削り 口縁部ヨコナデ 外面 ハケ目調整 高台部は、指頭による貼付、指頭圧痕が残存。底部はハケ目調整	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
6	3号住居	不明	底径 3.0	凹底気味の底部である。	内面 ハケ目調整 外面 磨滅のため不明	胎土砂粒多し 焼成若干軟調 淡褐色
7	2号住居	不明	端部径 7.0	片方へ狭くなる円筒形を呈する。	内面 ハケ目調整、ヘラ削り 外面 ハケ目調整	胎土良好 焼成良好 赤褐色 甌の可能性 がある。
8	4号住居	高坏	底径 19.4	高坏脚端部である。「ハの字」状に開く脚の端部は平たくおさめ、わずかに凹んでいる。	内面 磨滅のため不明 外面 ハケ目調整、端部はヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
9	S1区 表土	蓋	底径 23.4	「ハの字」状に開く口縁部の端部は、やや内傾し鋭角的におさめている。	内面 ハケ目調整、ヘラ研磨 外面 ナデ調整、ヘラ削り 口縁部ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 黄褐色 高坏の可能性あり
10	5号住居	甕	口径 11.6 器高 12.1	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめている。底部は凹底である。	内面 胴部ヘラ削り 口縁部ヨコナデ 外面 胴部ハケ目調整 口縁部ヨコナデ 肩部にヘラによる刺突をめぐらせる。	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
第30図 11	第6号住居土器群	甕	口径 20.2 器高 28.5	「くの字」状に外反する口縁部の端部は上下に拡張し2条の凹線をめぐらせる。	内面 胴部ヘラ削り 口縁部ヨコナデ 外面 胴部ハケ目の後、ナデか 口縁部ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 内外面にスス付着
12	第6号住居土器群	甕	口径 13.9 器高 14.0	「くの字」状に外反する口縁部はわずかに内傾しつつ丸くおさめている。底部は平底。	内面 胴部ナデの後、ヘラ削り 口縁部ハケ目の後、ヨコナデ 外面 胴部ハケ目調整 口縁部ハケ目の後、ヨコナデ	胎土良好 焼成若干軟調 暗赤褐色 スス付着
13	第6号住居土器群	甕	口径 11.0 器高 17.4	直立する口縁部の端部はわずかに外反し丸くおさめている。底部は丸底。	内面 胴部ヘラ削り 口縁部ハケ目調整 外面 胴部ハケ目調整	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色 スス付着
14	第6号住居土器群	壺	口径 15.5 器高 13.8	大きく外反する口縁部の端部は平たくおさめている。底部は凹底である。	内面 胴部ヘラ削りの後ナデ 口縁部ハケ目調整 外面 胴部ハケ目調整 口縁部ハケ目調整	胎土砂粒多し 焼成良好 淡赤褐色
15	第6号住居土器群	壺	口径 14.0 器高 13.0	ゆるく外反する口縁部の端部は丸くおさめている。底部は丸底に近い平底である。	内面 胴部ハケ目の後、ナデ 口縁部ヨコナデ 外面 胴部ハケ目調整 口縁部ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
16	第6号住居土器群	壺	口径 12.4 器高 18.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめている。底部は凹底である。	内面 胴部ヘラ削り 外面 ハケ目調整、ヘラ研磨 口縁部ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
17	第6号住 居土器群	壺	口径 10.6 器高 14.9	わずかに外反する口縁部の端部は丸くおさめている。底部は丸みをもつ平底である。	内面 指頭によるナデの後、口縁部のみ、ハケ目調整 外面 胴部 ハケ目、ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色～ 淡黄褐色 スス付着
第31図 18	第6号住 居土器群	甕	口径 14.0 器高 16.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は肥厚し、2条の凹線をめぐらせている。底部は凹底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 内面ハケ目調整 外面ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
19	第6号住 居土器群	甕	口径 14.8	「くの字」状に外反する口縁部の端部は丸くおさめている。底部は丸みをもつ平底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整の後、ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
20	第6号住 居土器群	甕	口径 12.0 器高 15.8 ～18.7	ゆるく外反する口縁部の端部は丸くおさめている。底部は平底である。全体に歪みが著しい。	内面 指頭調整と指ナデ 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 底部に指頭圧痕残存	胎土良好 焼成若干軟調 淡赤褐色 スス付着
21	第6号住 居土器群	甕	口径 17.7 器高 17.9 (推定)	ゆるく外反する口縁部の端部は平たくおさめている。底部は丸底と考えられる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス付着
22	第6号住 居土器群	甕	口径 11.8	ゆるく外反する口縁部の端部は丸くおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 ナデ(?) 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成若干軟調 淡赤褐色 スス付着
23	N7区 北側斜面	壺	口径 12.0	「くの字」に外反する口縁部の端部は丸くおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 ヨコナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成若干軟調 淡赤褐色
24	N7区 北側斜面	甕	口径 12.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は上下に拡張し2条の凹線をめぐらせている。	内面 上半はナデ、下半はヘラ削り 外面 ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗黄褐色 スス付着

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第32図 25	第6号住 居土器群	甕	口径 14.0	ゆるく外反する口縁部の端部は、器厚を減じ丸くおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 茶褐色 スス付着
26	N6・7 区斜面土 器群	壺	口径 19.8	「くの字」状に外反する口縁部の端部はわずかに下方に拡張し、平たくおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 ヨコナデ 口縁部 ヨコナデ 頸部に「ノ」字状の刺突	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
27	N6・7 区斜面土 器群	甕	口径 13.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は上下に拡張し、2条の凹線をめぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラナデの後研磨 肩部に刺突文をめぐらせる。	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
28	N6・7 区斜面土 器群	甕	口径 18.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 櫛歯状工具による調整後ナデ 口縁部 内面ハケ目調整 外面ヨコナデ	胎土良好 焼成若干軟調 茶褐色 スス付着
29	第6号住 居土器群	壺	口径 13.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめている。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 磨滅のため不明 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色
30	N7・8 区斜面土 器群	壺	口径 17.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 内面ハケ目 外面ハケ目後ナデ	胎土良好 焼成良好 暗褐色
31	N7・8 区斜面土 器群	壺	口径 22.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は凸気味で2条の凹線をめぐらせる。	内面 ヘラ削り(?) 外面 不明 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色 淡赤褐色
第33図 32	N6・7 区斜面土 器群	甕	口径 15.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部は上下に拡張し、3条の凹線をめぐらせる。	内面 ハケ目(?) 外面 ハケ目(?) 口縁部 ヨコナデ 肩部に4条の凹線をめぐらせ、ヘラによる刻みをめぐらせる。	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色 スス付着
33	第6号住 居土器群	壺	口径 14.0 器高 11.5	「くの字」状に外反する口縁部の端部は丸くおさめる。底部は凹底気味である。	内面 ヘラ研磨 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
34	第6号住居土器群	鉢	口径 14.0 器高 12.7	わずかに外反する口縁部の端部は丸くおさめる。底部は丸底である。	内面 ヘラナデ 外面 ハケ目調整後, ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 橙色
35	N7・8区斜面土器群	壺	口径 13.0 器高 10.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。底部は平底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 肩部に刺突をめぐらせる。	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色
36	第6号住居土器群	鉢	口径 11.0 器高 7.2	ゆるやかに外反する口縁部の端部は平たくおさめている。底部は平底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色
37	N7・8区斜面土器群	鉢	口径 9.2 器高 10.0	コップ状を呈する。口縁部端部は丸くおさめている。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色 スス附着
38	N6・7区斜面土器群	鉢	口径 11.6 器高 8.0	外上方へ延びる口縁部の端部は平たくおさめる。底部は凸気味である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ, 指頭痕が見られる。	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色
39	N6・7区斜面土器群	壺	口径 8.8	「くの字」状に外反する口縁の端部は丸くおさめる。肩部はにぶい稜線が見られる。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
40	N6・7区斜面土器群	壺	不明	頸部に凸帯をめぐらせている。	内外面とも磨滅のため調整不明。凸帯をめぐらせた後, 刻みを施し, 5条の凹線をめぐらせる。	胎土良好 焼成軟調 暗褐色
41	第6号住居土器群	甕	不明	最大径は比較的高位にある。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 肩部に刺突をめぐらす。	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス附着
42	第6号住居土器群	不明	底径 5.6	凹底である。	内面 不明 外面 ナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色
43	第6号住居土器群	不明	底径 5.6	凹底である。	内面 指頭によるナデ 外面 ハケ目調整	胎土良好 焼成良好 淡褐色

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
44	第6号住居土器群	甕	底径 6.0	丸底に近い凸底である。	内面 ヘラナデ 外面 ハケ目調整後、ナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス附着
第34図 45	第6号住居土器群	甕	不明	丸底である。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラ研磨(?) 底面 ハケ目調整	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色 スス附着
46	第6号住居土器群	不明	不明	丸底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整後ナデ	胎土良好 焼成良好 橙色
47	N7・8区斜面土	不明	底径 3.0	凹底である。	内面 ハケ目調整 外面 ハケ目調整、底部はヘラ削り	胎土良好 焼成良好 淡褐色
48	N7・8	不明	底径 4.8	高台状を呈する底部である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 高台部は指頭整形後ナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色
49	第6号住居土器群	不明	底径 3.6	凹底である。	内面 不明 外面 ハケ目調整(?)	胎土良好 焼成良好 淡褐色
50	第6号住居土器群	壺	底径 9.2	平底で、上半部3分の1を欠失	内面 下半は指頭による押さえ、上半はヘラ削り 外面 ハケ目調整後ヘラ研磨	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
第35図 51	第2号溝状遺構	甕	口径 19.0 器高 26.2	強く外反する口縁部の端部を上下に拡張し、2条の凹線をめぐらせる。底部は平底である。	内面 ナデとヘラ研磨 外面 上半ハケ目調整、下半ヘラ研磨 胴部中央に貝殻腹縁による。	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス附着
52	第2号溝状遺構	壺	口径 10.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し平たくおさめる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ 肩部に波状文をめぐらせる。	胎土良好 焼成軟調 橙色
53	第2号溝状遺構	壺	口径 12.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、2条の凹線をめぐらせる。	内面 指頭によるナデ 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 肩部に波状文2条	胎土良好 焼成良好 橙色 淡褐色

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
54	第2号溝 状遺構	壺	口径 12.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し平らにおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 不明 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色
55	第2号溝 状遺構	甕	口径 15.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 磨滅のため不明 口縁部 ヨコナデ 肩部に、ヘラ刻みを3条めぐるせる。	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色 スス付着
56	第2号溝 状遺構	甕	口径 12.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を2条にめぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色 スス付着
第36図 57	第2号溝 状遺構	壺	口径 21.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を2条にめぐらせる。	内面 磨滅のため不明 外面 同上 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色
58	第2号溝 状遺構	甕	口径 18.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を3条にめぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 肩部に、ヘラによる押し引きをめぐらす。	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
59	第2号溝 状遺構	壺	口径 20.0	強く外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を2条めぐるせる。	内面 ナデ調整 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色
60	第2号溝 状遺構	鉢	口径 5.0	手づくねの小形土器である。	内面 ヘラ削り 外面 指頭調整	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色
61	第2号溝 状遺構	高坏	底径 6.8	「ハの字」状にゆるく開く脚部である。	内面 ナデ(?) 外面 ヘラナデ 脚端部に浅い凹線を2条めぐるせる。	胎土良好 焼成良好 橙色
62	第2号溝 状遺構	壺	底径 4.6	端部でわずかに開く脚部である。	内面 不明 外面 ヘラによる調整	胎土良好 焼成軟調 暗赤褐色
63	第2号溝 状遺構	甕	口径 13.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめている。	内面 ハケ目調整 外面 ハケ目調整	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス付着

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
64	第2号溝 状遺構	甕	口径 12.6 器高 22.0	「くの字」状にゆるく外反する口縁部の端部は平たくおさめる。底部は凹底気味である。	内面 ヘラ削り 外面 磨滅のため不明 口縁部 ヨコナデ 肩部に、刺突文をめぐらせる。	胎土良好 焼成良好 淡褐色 スス付着
第37図 65	N8区 表土	甕	口径 13.4 器高 38.0	弧状に外反する口縁部の端部は上下に拡張し、平たくおさめる。底部は平底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ 肩部に貝殻腹縁による3条の施文。	胎土良好 焼成軟調 淡褐色 スス付着
66	N7区 表土	鉢	口径 31.8	強く外反する口縁部の端部は上下に拡張し、凹線を2条めぐらせる。	内面 上半部ハケ目の後ナデ、下半部ヘラ削り後ナデ 外面 上半部ハケ目調整 下半部ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ 胴部に貝殻腹縁による2条の施文。	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス付着
67	N9区 北側斜面	壺	口径 11.6	ゆるく弧状に外反する口縁部の端部を丸くおさめる。	内面 磨滅のため不明 外面 ハケ目調整 肩部に刻みをめぐらせる。	胎土不良 焼成軟調 橙色
第38図 68	第1号土 壙	甕	口径 20.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部を下方に拡張し、凹線を2~3条めぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土不良 焼成良好 淡褐色 スス付着
69	第1号土 壙	壺	口径 15.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ナデ調整 口縁部 ヨコナデ	胎土不良 焼成軟調 淡褐色
70	第1号土 壙	壺	口径 12.2	「くの字」状に外反する短い口縁部の端部は丸くおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色
71	第1号土 壙	壺	口径 12.8	「くの字」状に外反する短い口縁部の端部は平たくおさめる。肩部ににぶい段が見られる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 肩部にヘラによる刺突文	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
72	第1号土 壙	壺	口径 14.8	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ、ハケ目調整	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
73	第1号土壙	鉢	口径 14.4	直立する体部の口縁端部はわずかに外反し、平たくおさめる。底部は丸底と思われる。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
74	第2号土壙	壺	口径 18.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部は下方に拡張し、凹線を3条めぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 磨減 口縁部 ヨコナデ 肩部に2条の刺突	胎土良好 焼成軟調 淡褐色
75	第2号土壙	壺	口径 12.0 器高 19.4	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を3条めぐらせる。底部は平底である。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ 肩部に波状文を施す	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
第39図 76	第6号土壙	壺	口径 15.2 器高 20.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部を平たくおさめる。底部は凹底気味。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土不良 焼成良好 淡赤褐色
77	N8区 表土	壺	口径 14.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
78	N1区 表土	壺	口径 11.4	ゆるやかに外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を6条めぐらせる。	内面 ナデ調整 外面 ナデ調整 頸部に凹線をめぐらせる	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色
79	表採	甕	口径 18.0	「くの字」状に外反する口縁部の端部を上下に拡張し、凹線を4条めぐらせる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 肩部に貝殻腹縁による2条の施文	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色 スス付着
80	表採	壺	口径 17.6	ゆるく外反する口縁部の端部は平たくおさめる。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 口縁部 ヨコナデ	胎土不良 焼成良好 淡褐色
81	表採	壺	口径 15.3 器高 9.6	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。底部は平底の痕跡をとどめる。	内面 ハケ目調整 外面 ハケ目調整後ナデ 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色
82	第6号住居土器群	鉢	口径 4.7 器高 3.7	手づくねの小形土器である。	内外面とも指頭による調整	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色

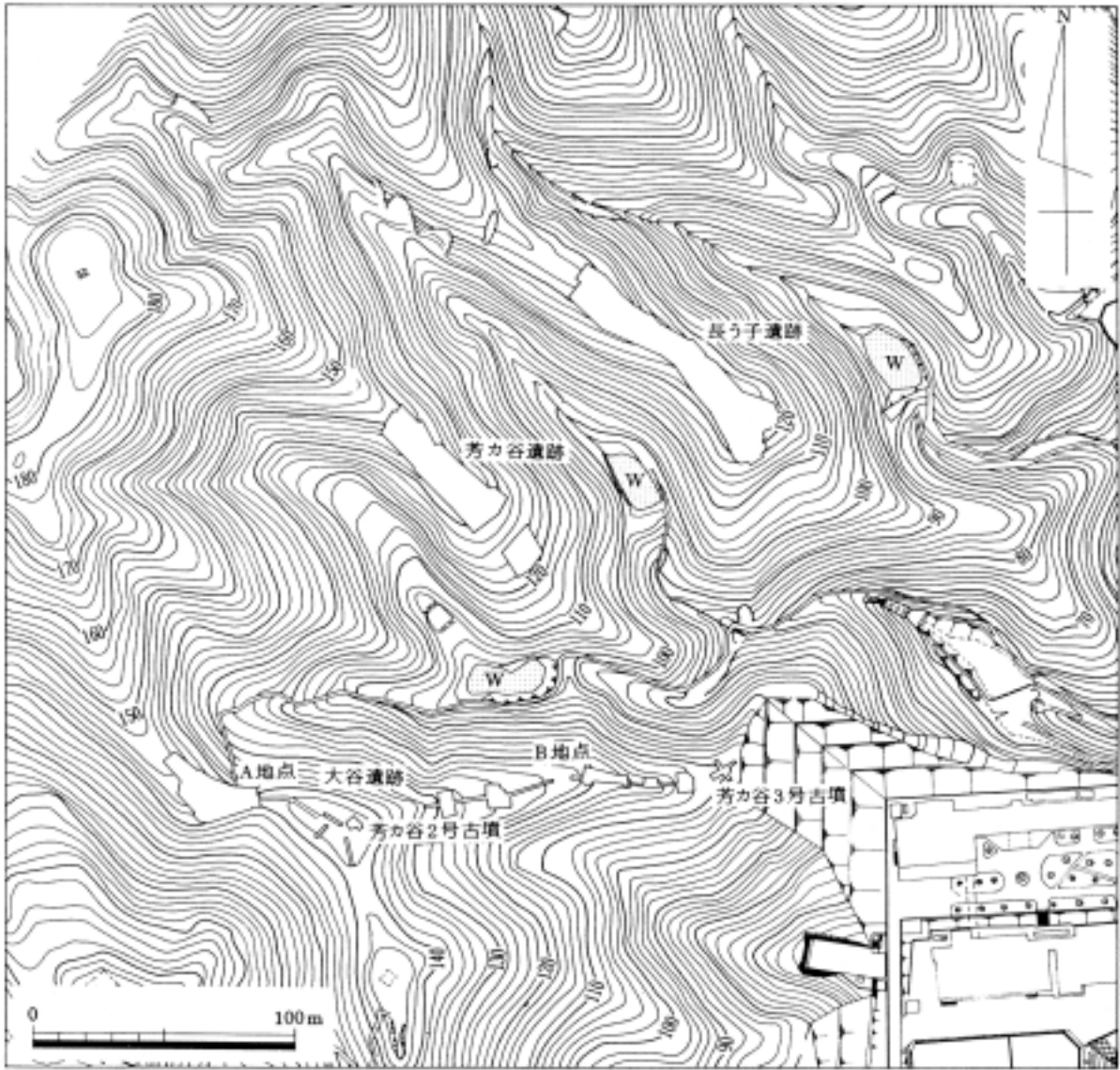
図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第40図 83	N9区	鉢	口径 16.4 器高 9.2	強く外反する口縁部の端部は平たくおさめ、凹線を1条めぐらせる。	内面 磨滅 外面 ヘラ研磨(?) 底面 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡褐色
84	S5区 表土	鉢	口径 9.0 器高 6.9	口縁部の端部は平たくおさめ、底部は高台状としている。	内面 ヘラ削り 外面 ハケ目調整 高台部は指頭による整形	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
85	N8区 表土	鉢	口径 9.0 器高 4.3	浅い手づくねの土器である。底部は丸底と思われる。	内面 ヘラ削り 外面 ヘラナデ後ヘラ研磨	胎土良好 焼成軟調 淡赤褐色
86	S5区 表土	壺	口径 10.2	外上方へ立ち上がる口縁部の端部は鋭くしている。	内外面とも磨滅	胎土不良 焼成軟調 淡赤褐色
87	S2・3 区間ベル	高坏	不明	高坏脚部である。端部を欠失している。透し1残存	内面 ヘラ削り 外面 ナデ調整 坏部にさし込んだと思われる。	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色
88	S4区 表土	高坏	口径 25.4	高坏坏部上半である。口縁端部は内傾気味に立ち上がり、平たくおさめる。屈曲部に凸帯をめぐらす。	全面磨滅	胎土良好 焼成軟調 淡黄褐色
89	S8区 表土	高坏	口径 27.0	高坏坏部上半である。口縁部端部を水平に拡張し、凹線を3条めぐらせる。	内面 ヨコナデ(?) 外面 ヘラ研磨 口縁部 ヨコナデ	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
90	表採	壺	不明	頸部である。屈曲部に4条の凹線をめぐらせる。	内面 磨滅 外面 施文部以上ヨコナデ、以下ヘラ研磨	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
第41図 1	N6区	壺	底径 9.2	大形壺の胴部である。棺身として使用したもので、頸部以上を打ち割っている。	内面 ハケ目調整、底部は押さえ 外面 ハケ目調整後部分的にヘラ研磨	胎土良好 焼成良好 淡赤褐色
2	N6区	甕	口径 16.0 器高 27.2	「くの字」状に外反する口縁部の端部は平たくおさめる。底部は平底である。	内面 ヘラ削り後ナデ 外面 ハケ目調整 口縁部 外面ヨコナデ 内面ハケ目調整後ナデ 頸部に刻みをめぐらせる。	胎土良好 焼成良好 橙色 スス附着

図面No.	出土地点	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
第42図 1	掘立柱建物跡A群	すり鉢	口径 32.0 器高 10.0 (推定)	外上方へ延びる口縁部の端部を上方へ拡張している。底部と体部の境界不明瞭。	内面 ハケ目調整後4本単位の溝を施す 外面 指頭調整, 指頭ナデ後, 部分的にヘラナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 産地不明
2	第1号溝状遺構	すり鉢	底径 14.6	体部は凹凸が著しい。	内面 ロクロナデの後最低11条の溝を施す 外面 ロクロナデ	胎土良好 焼成良好 暗赤褐色 備前焼
3	掘立柱建物跡A群	上師質皿	口径 12.0 器高 2.2	外上方へ延びる口縁部の端部は丸くおさめる。	内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底部 ナデ	胎土良好 焼成良好 淡黄褐色 スス付着
4	掘立柱建物跡A群	上師質皿	底径 6.0		内面 ロクロナデ 外面 磨滅 底面 糸切り	胎土不良 焼成軟調 淡黄褐色

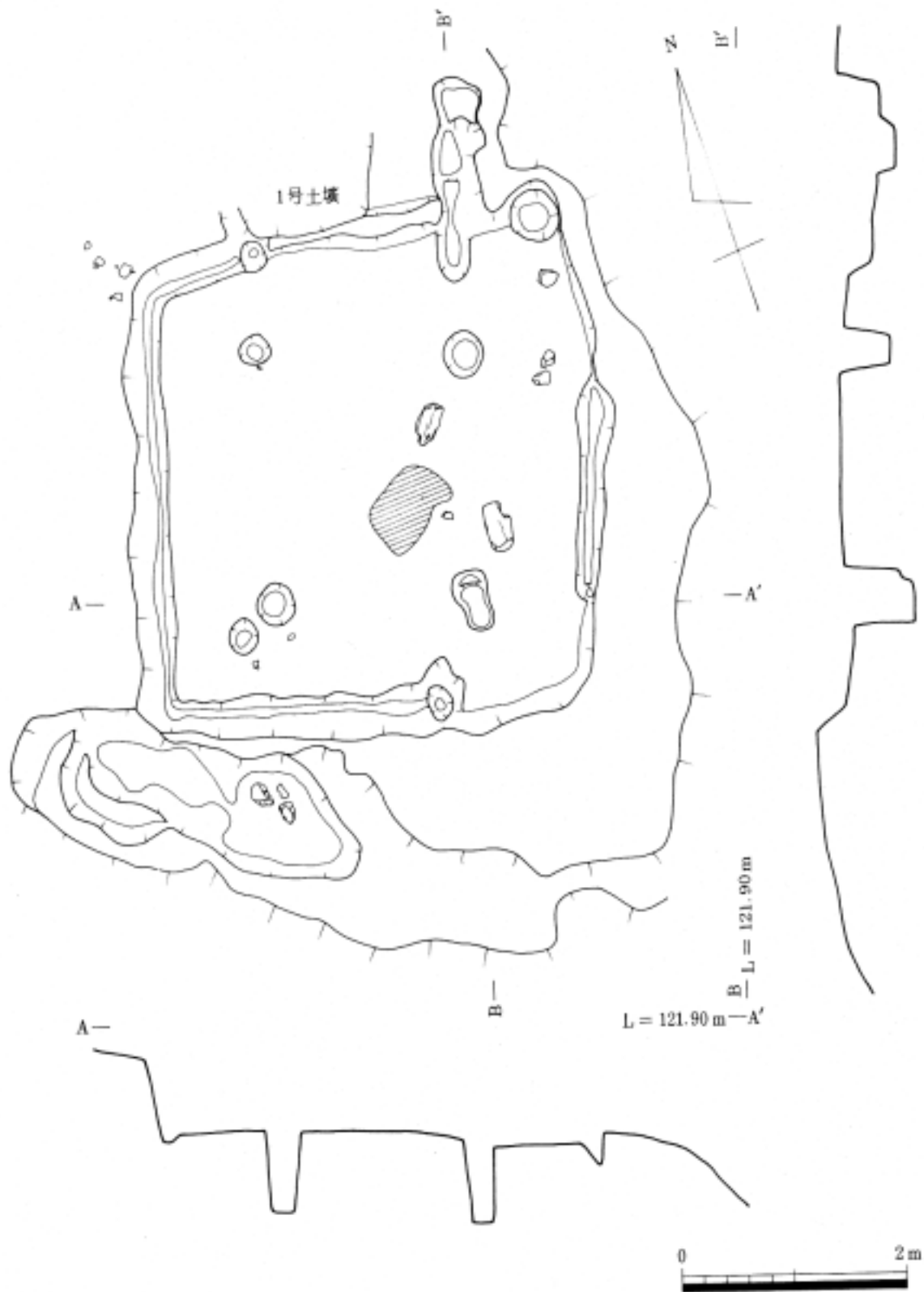


第1図 遺跡周辺地形図

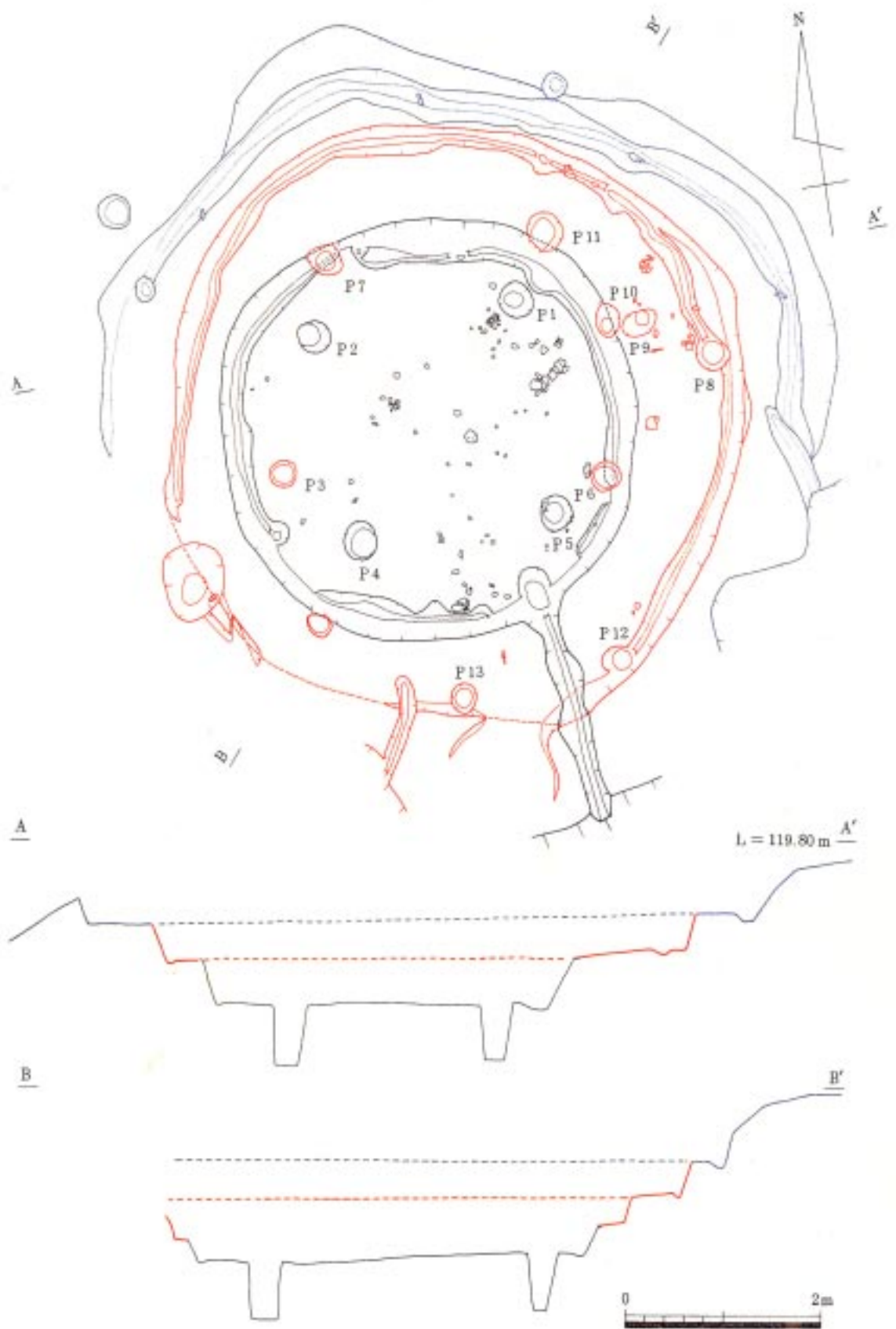
- | | | | |
|----------------|------------------|-----------|-------------|
| 1. 広島経済大学構内遺跡群 | 2. 文化女子短大グラウンド遺跡 | 7. 東山本寺遺跡 | 12. 大町矢カ谷遺跡 |
| a. 長う子遺跡 | 3. 池之内古墳群 | 8. 浄円寺古墳群 | 13. 銀山城跡 |
| b. 芳カ谷遺跡 | 4. 長東修練院裏遺跡 | 9. 上組古墳 | |
| c. 大谷遺跡A地点 | 5. 空長古墳群 | 10. 部谷山古墳 | |
| d. 大谷遺跡B地点 | 6. 光見寺跡 | 11. 三王原古墳 | |



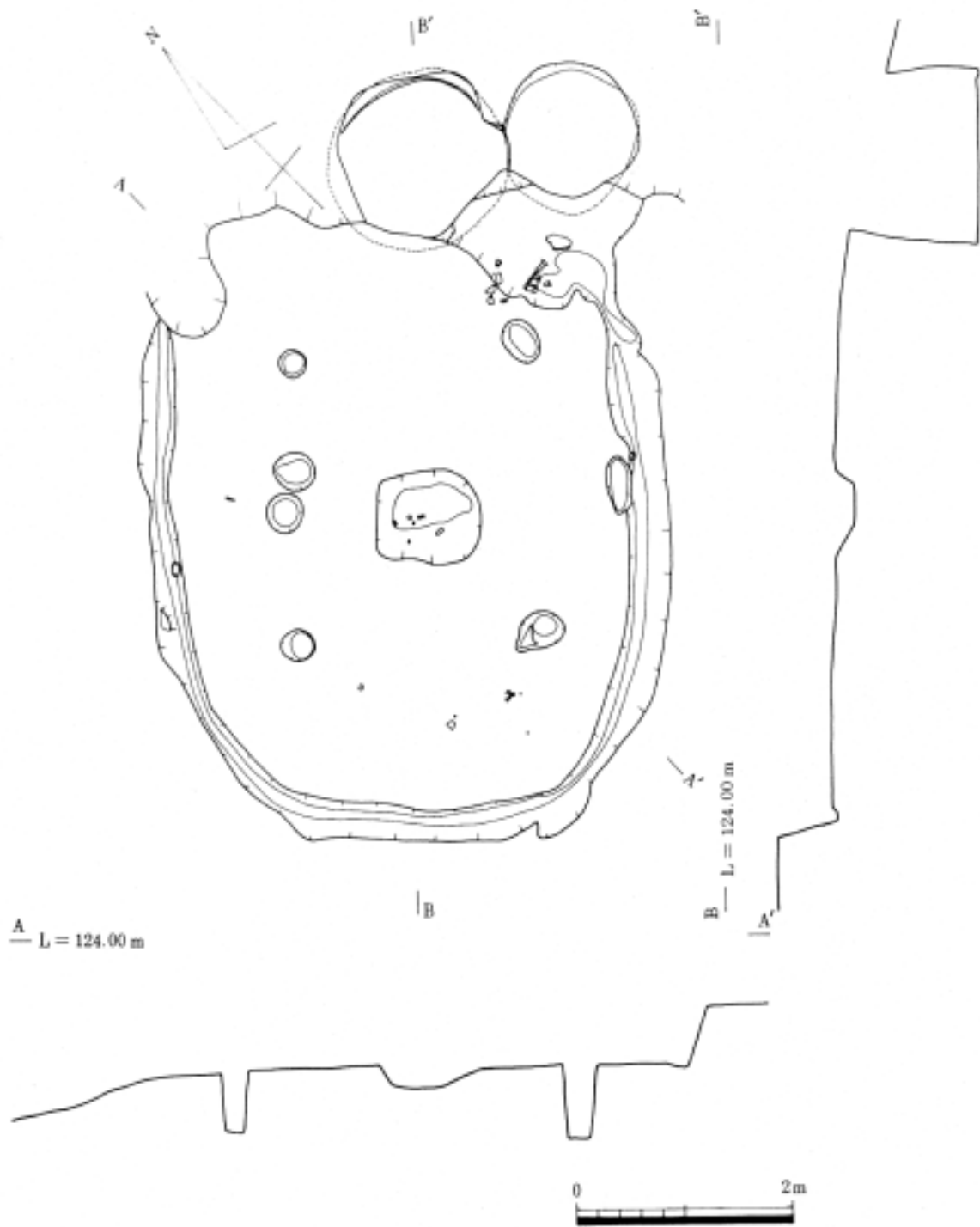
第2図 遺跡周辺地形図



第4図 長う子遺跡第1号住居跡実測図



第5号 長う子遺跡2, 3, 4号遺跡実測図



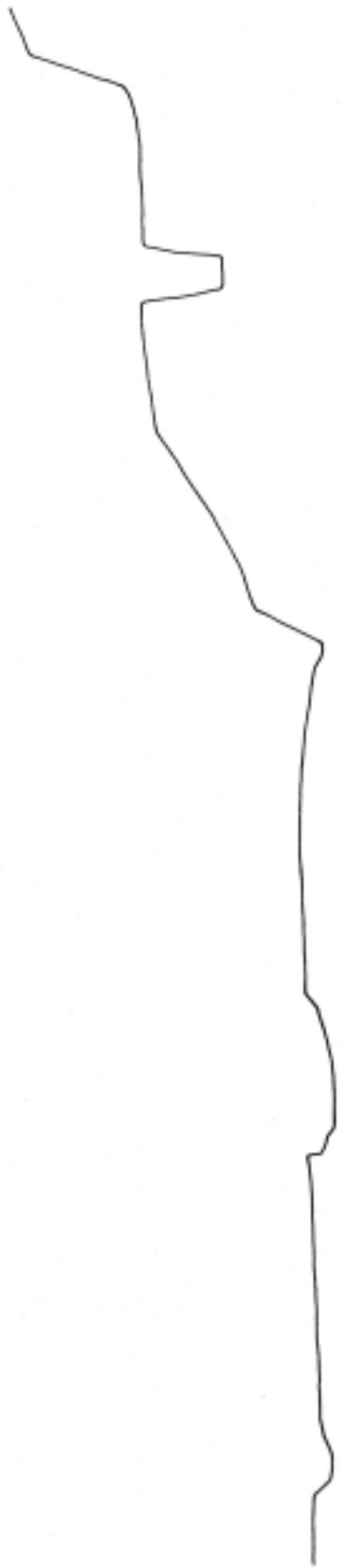
第6図 長う子遺跡第5号住居跡実測図



第7図 長う子遺跡第6号住居跡実測図

A_

$L = 126.80 \text{ m} \text{---} A'$



B_

$L = 125.50 \text{ m} \text{---} B'$

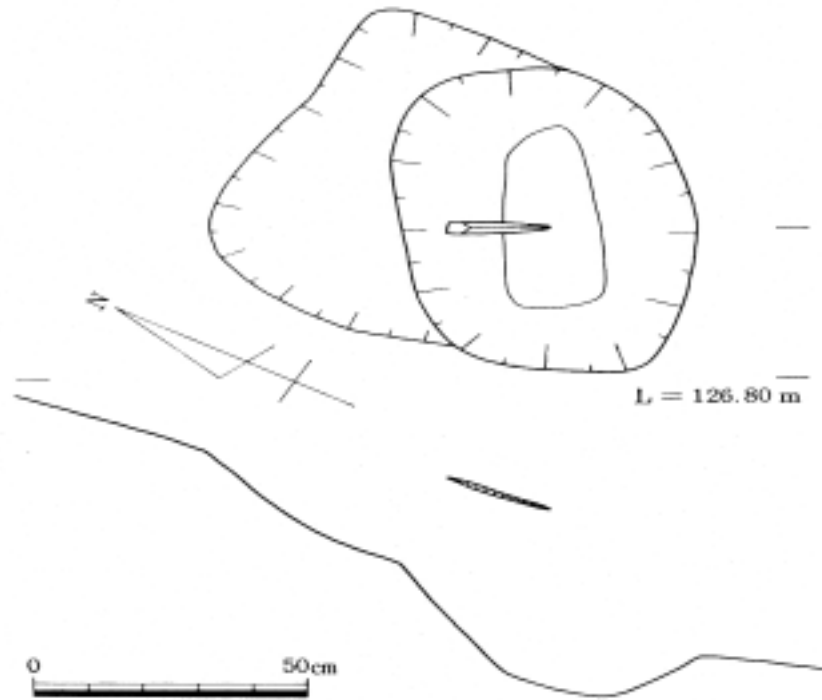


C_

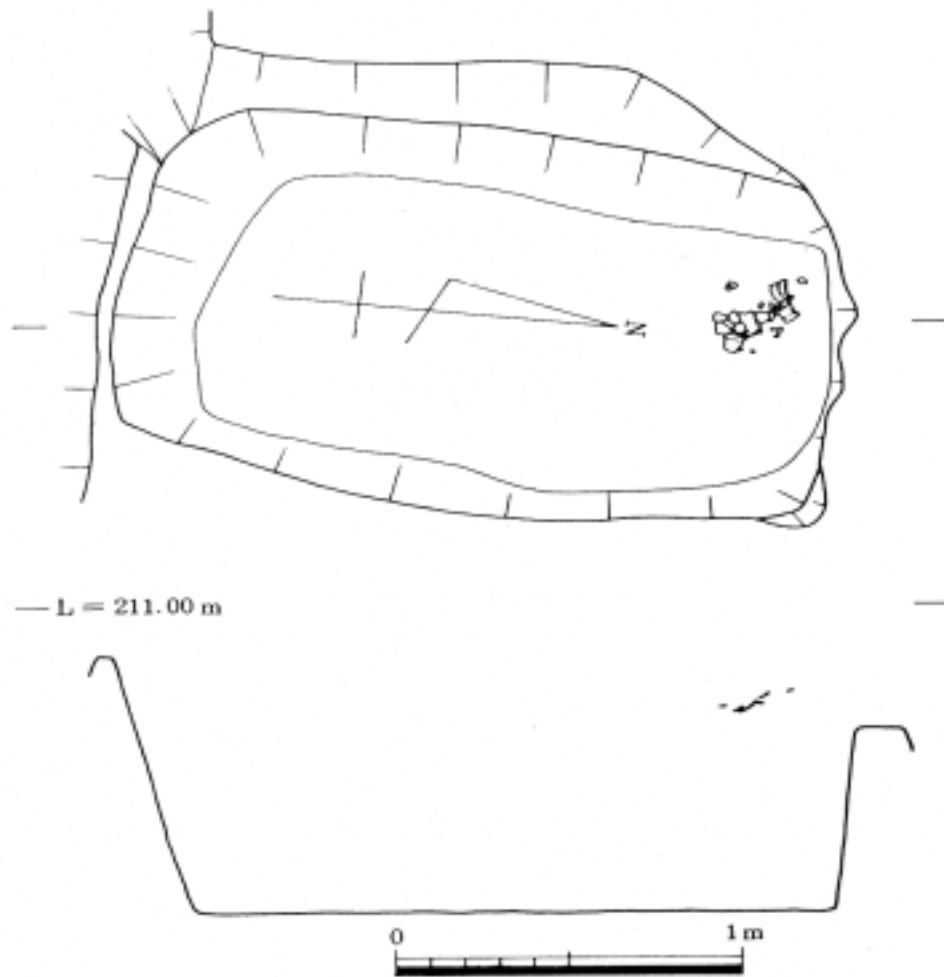
$L = 125.50 \text{ m} \text{---} C'$



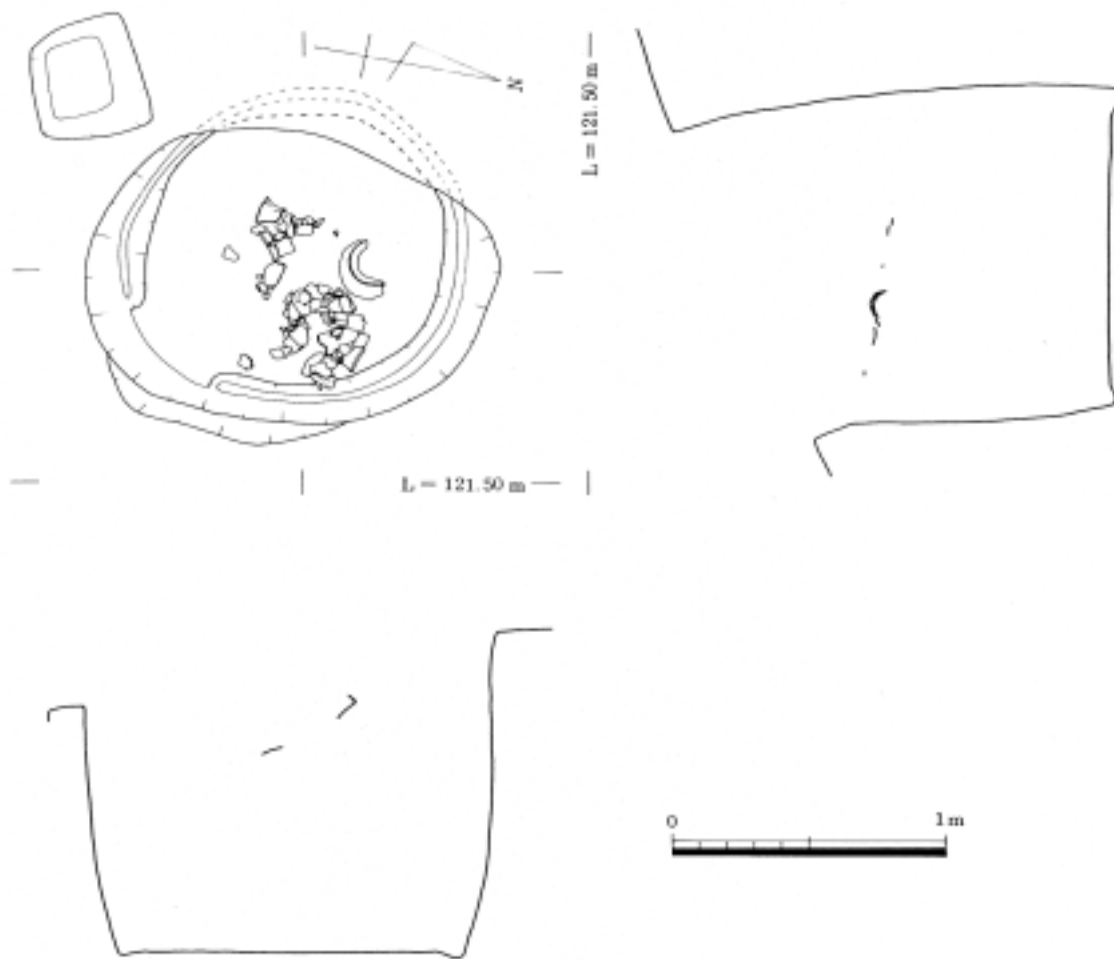
第8図 長う子遺跡第6号住居



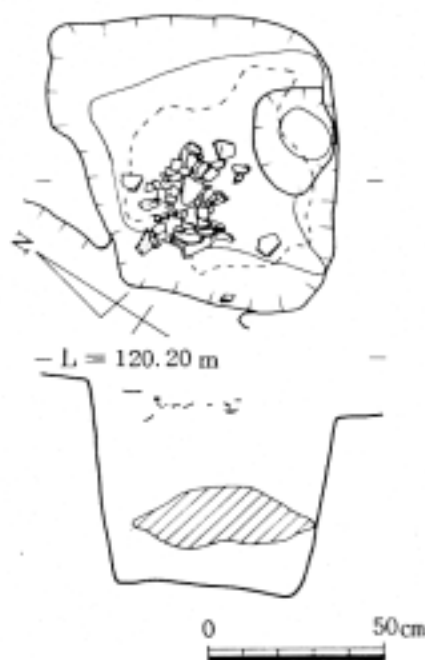
第9図 長う子遺跡磨製石剣出土状態実測図



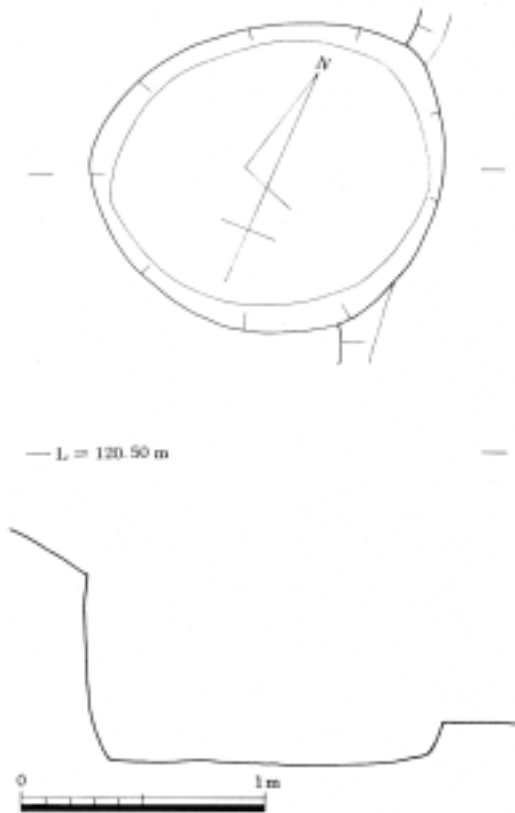
第10図 長う子遺跡第1号土壙実測図



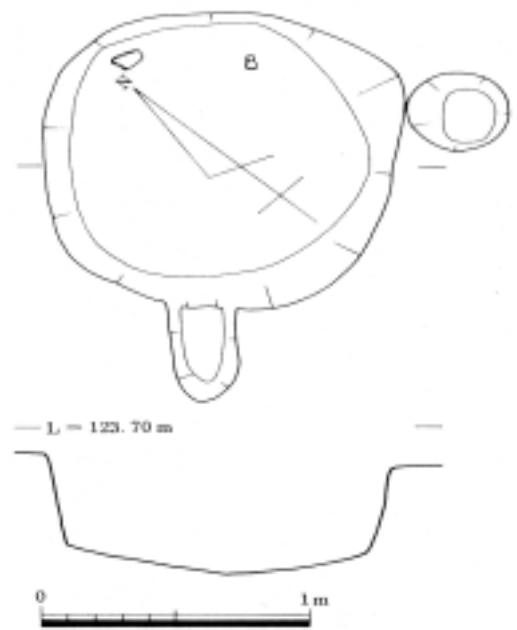
第11図 長う子遺跡第2号土壙実測図



第12図 長う子遺跡第3号土壙実測図



第13図 長う子遺跡第4号土壙実測図



第14図 長う子遺跡第5号土壙実測図



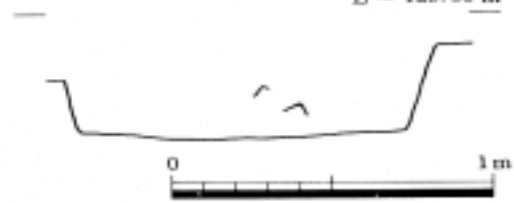
L = 130.00 m



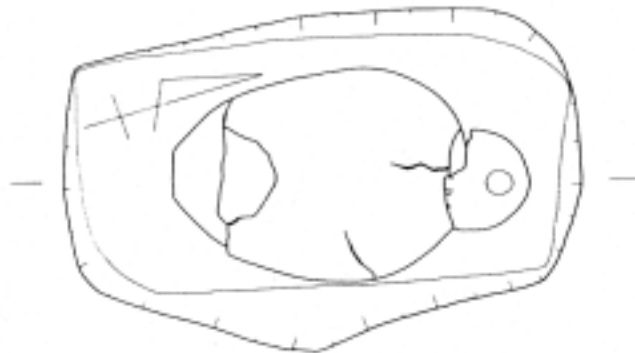
第15図 長う子遺跡第6号土壙実測図



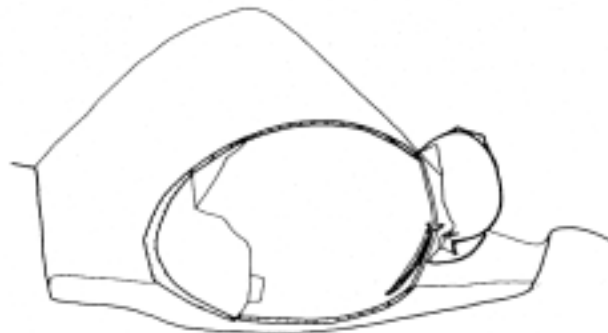
L = 129.50 m



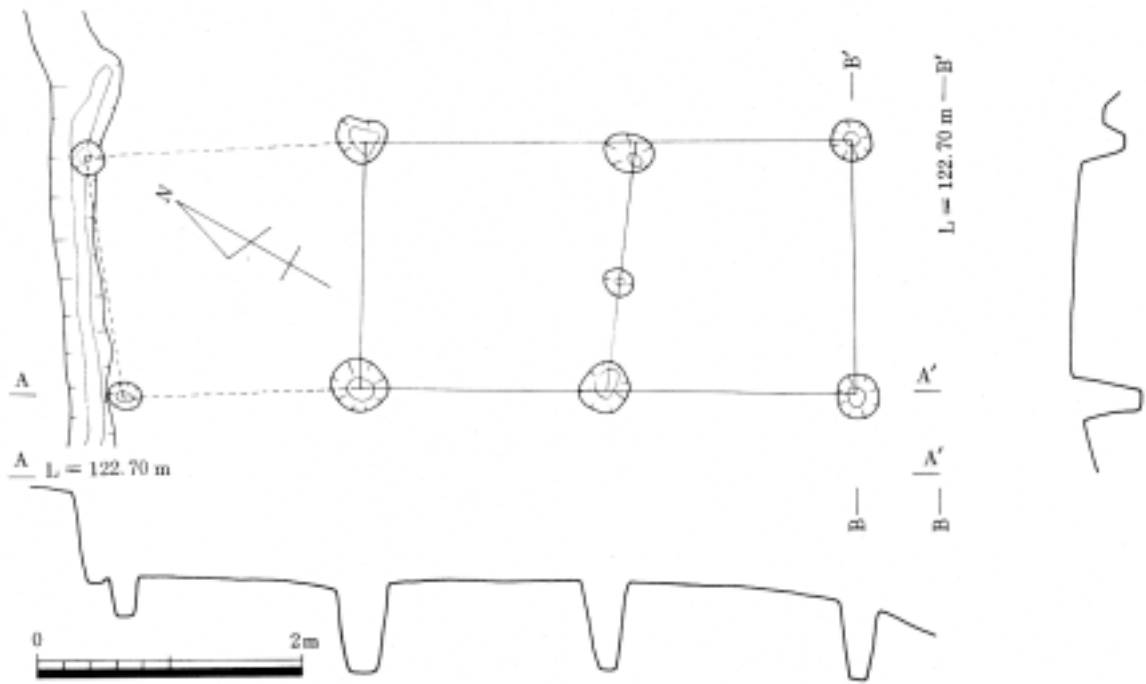
第16図 長う子遺跡第7号土壙実測図



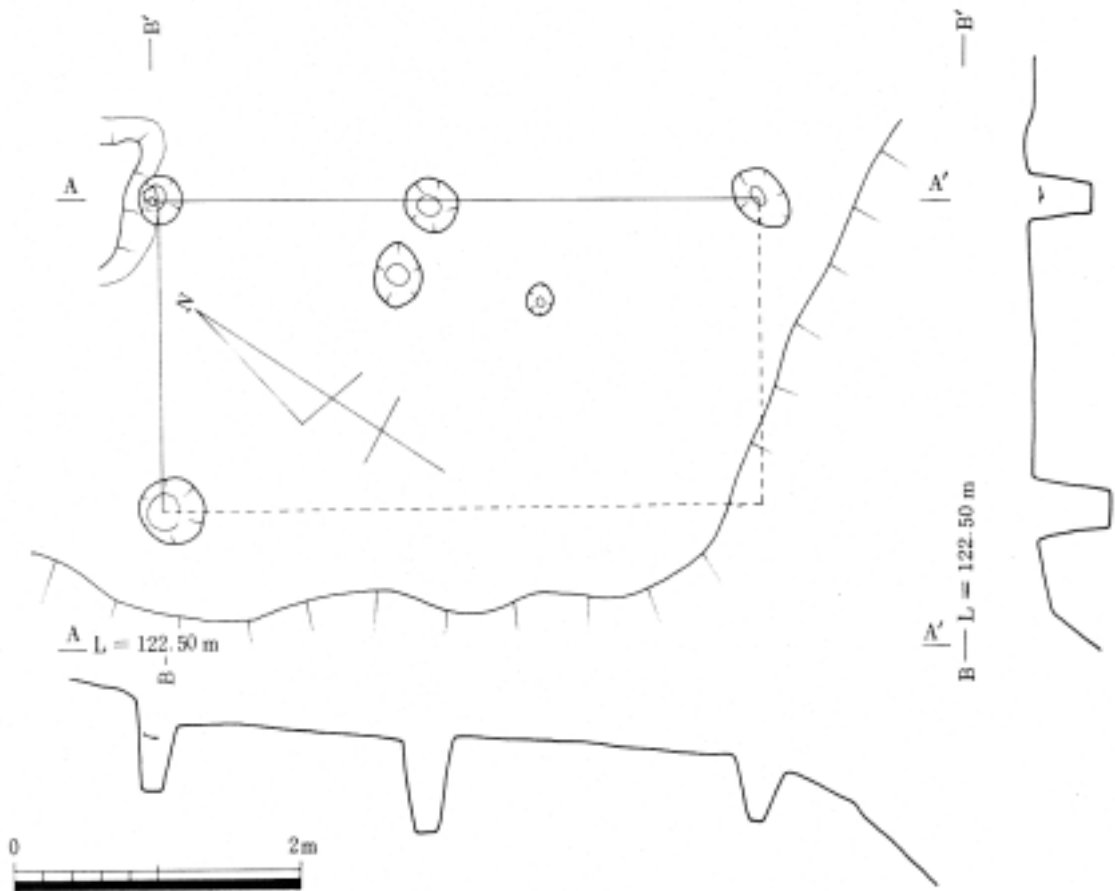
L = 124.65 m



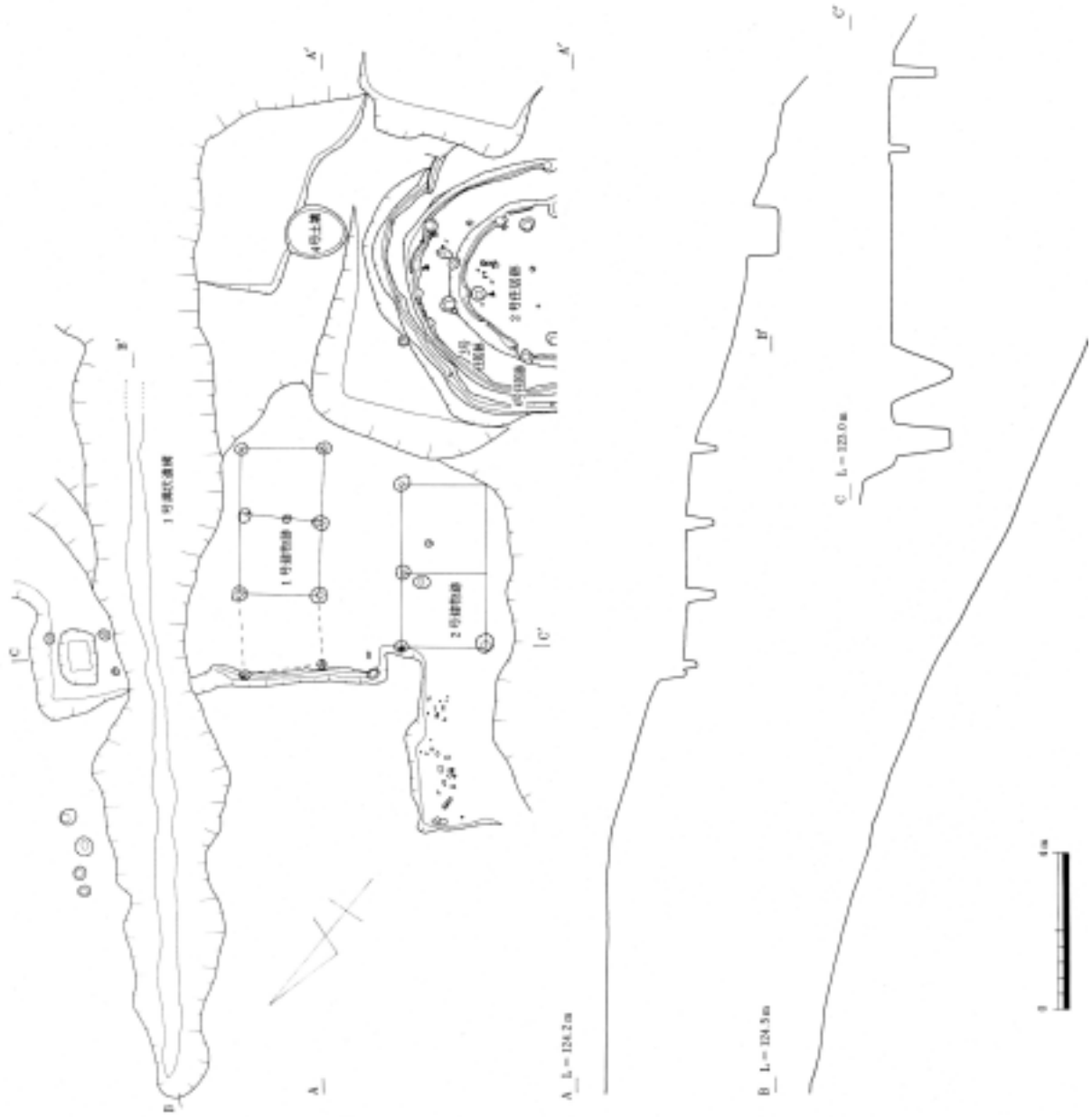
第17図 長う子遺跡壺棺実測図



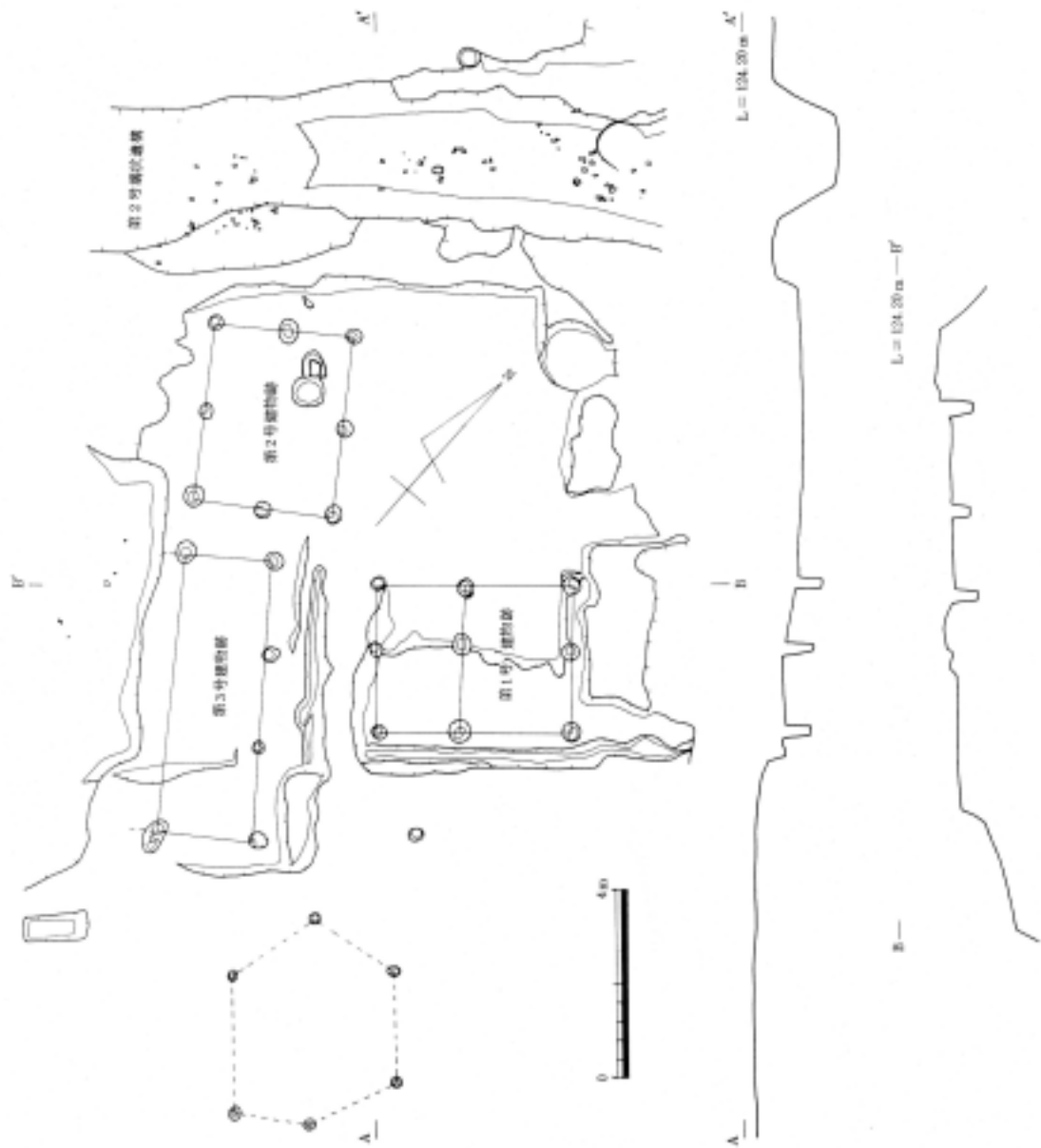
第19図 長う子遺跡掘立柱建物跡A群第1号建物跡実測図



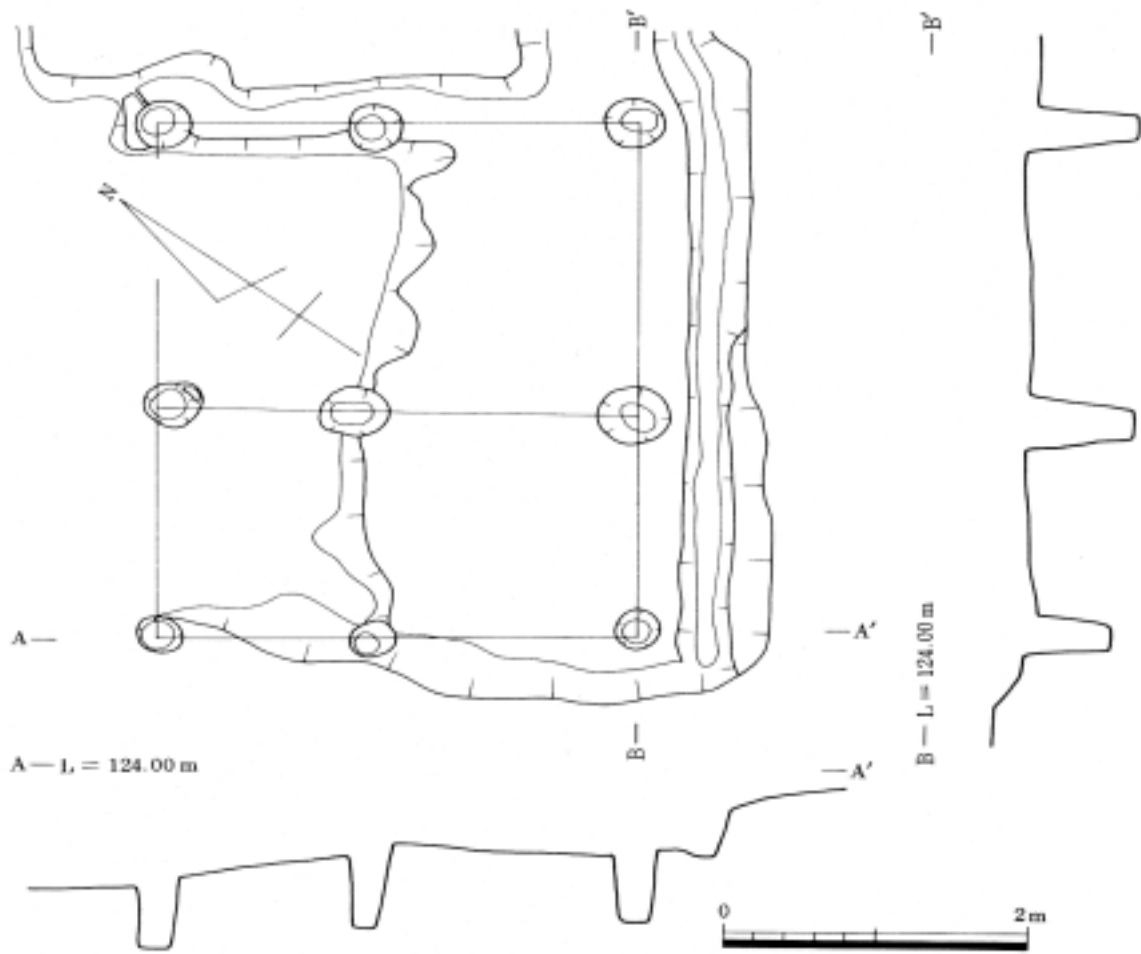
第20図 長う子遺跡掘立柱建物跡A群第2号建物跡実測図



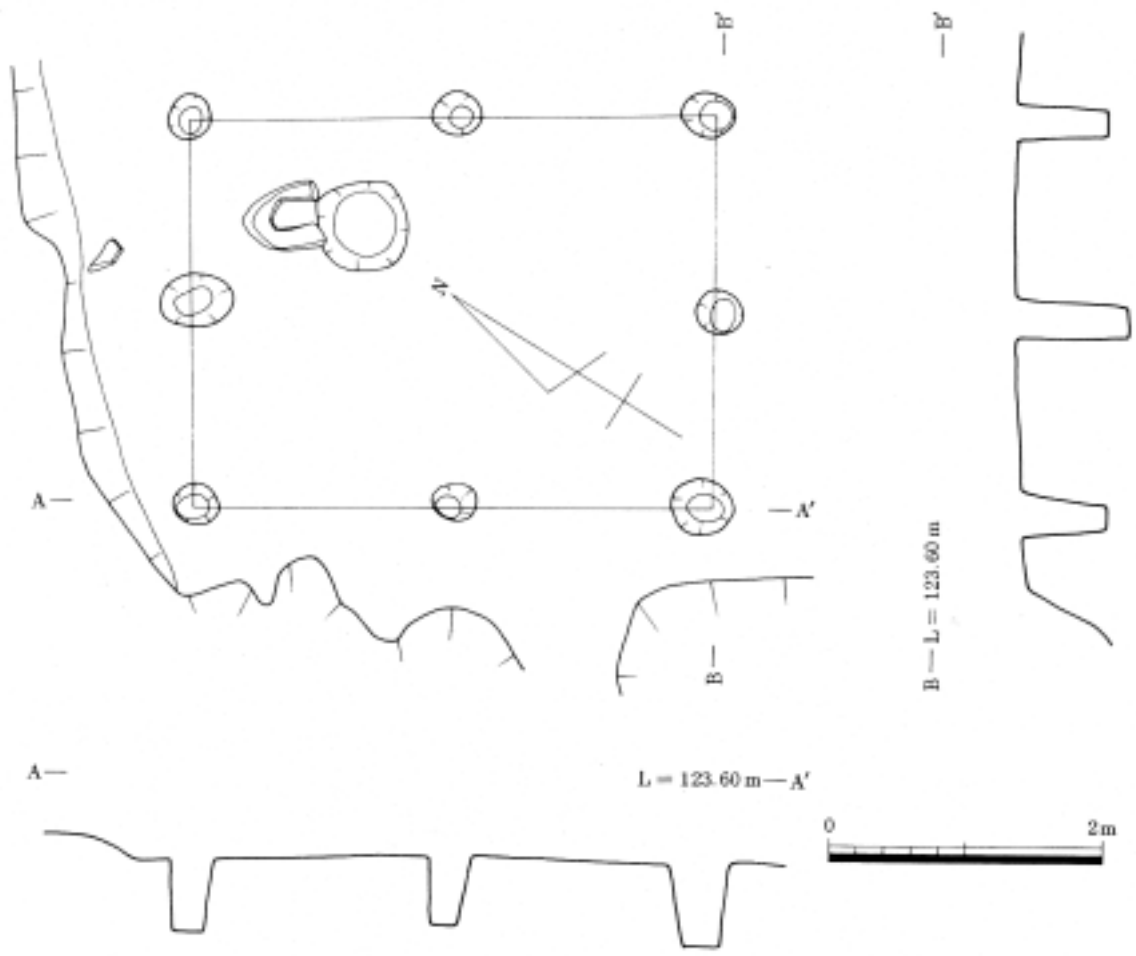
第18図 長う子遺跡掘立柱建物跡A群遺構配置図



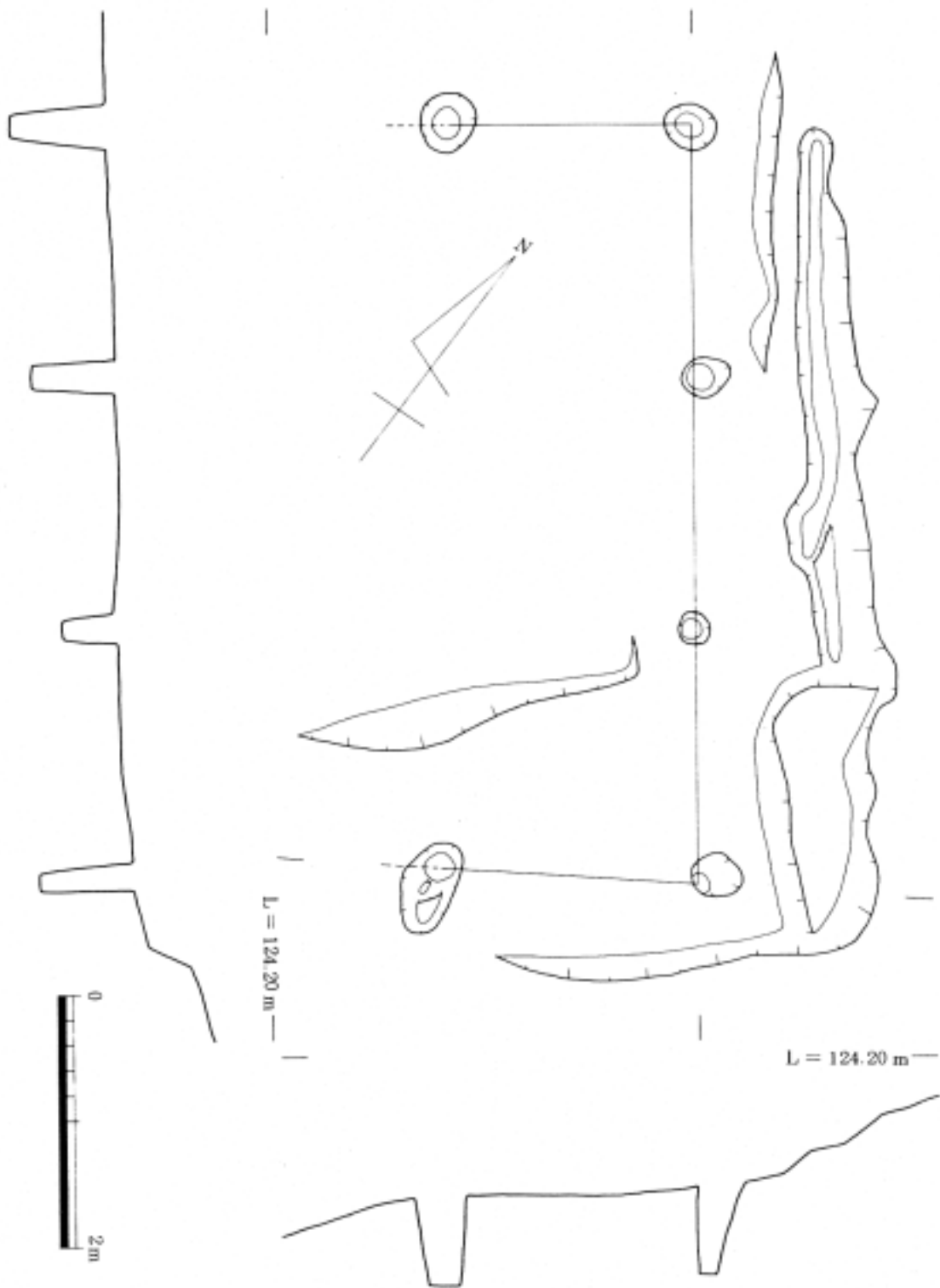
第 21 図 長う子遺跡掘立柱建物跡 B 群遺構配置図



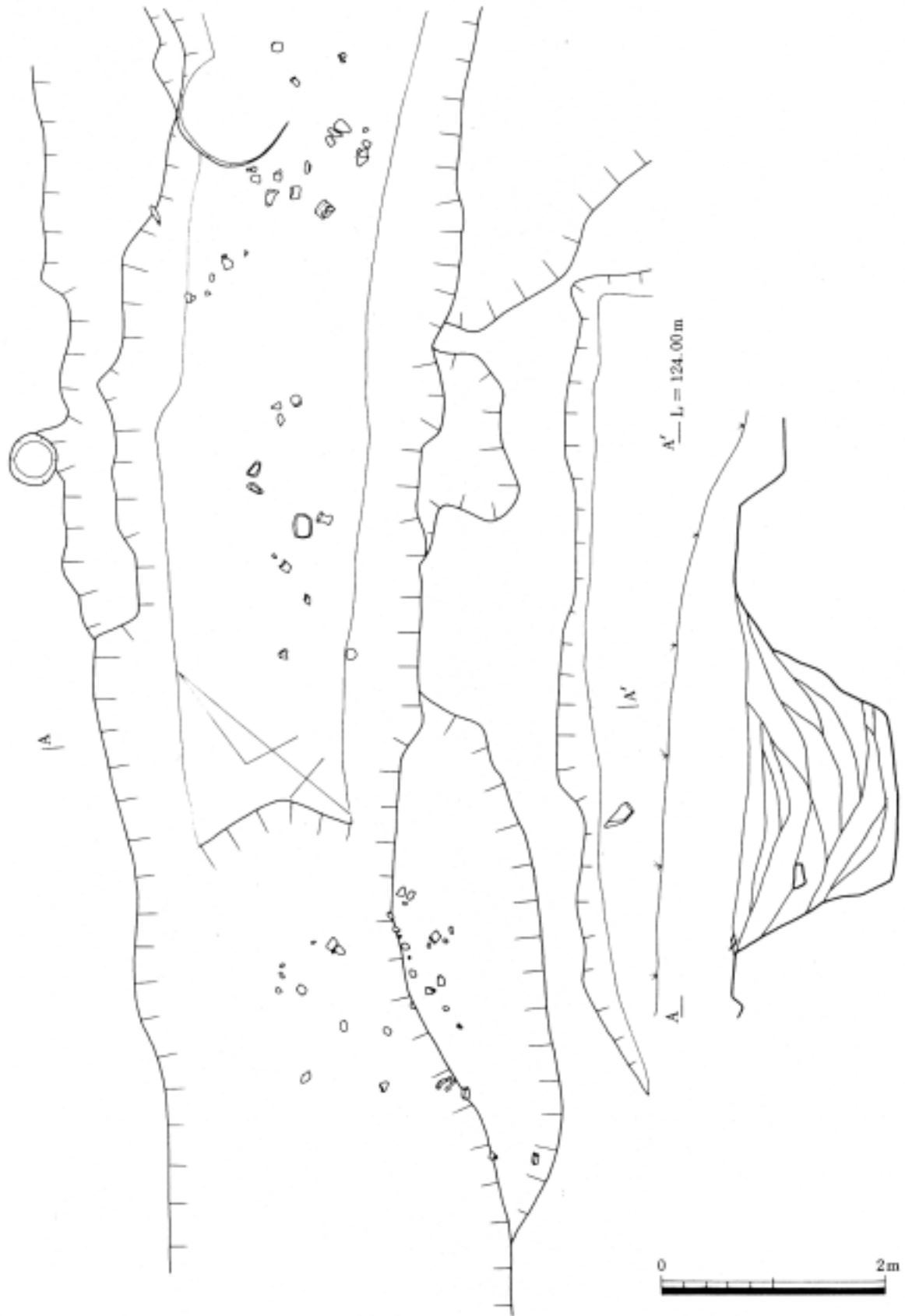
第22図 長う子遺跡掘立柱建物跡B群第1号建物跡実測図



第 23 図 長う子遺跡掘立柱建物跡 B 群第 2 号建物跡実測図



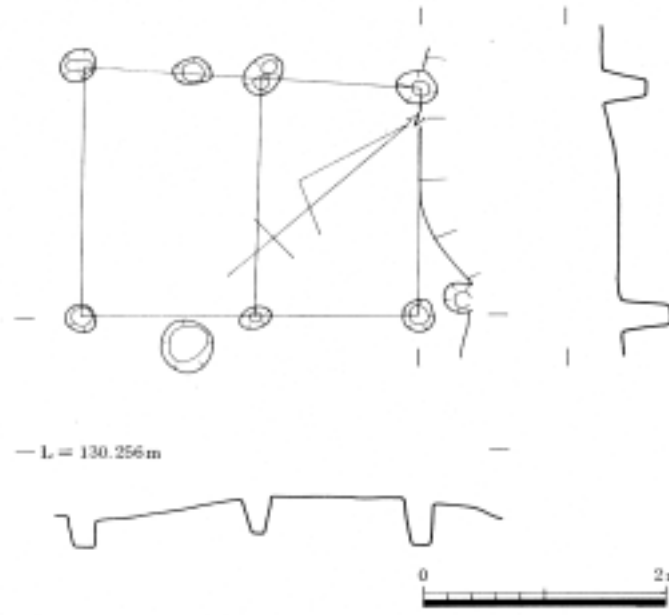
第24図 長う子遺跡掘立柱建物跡B群第3号建物跡実測図



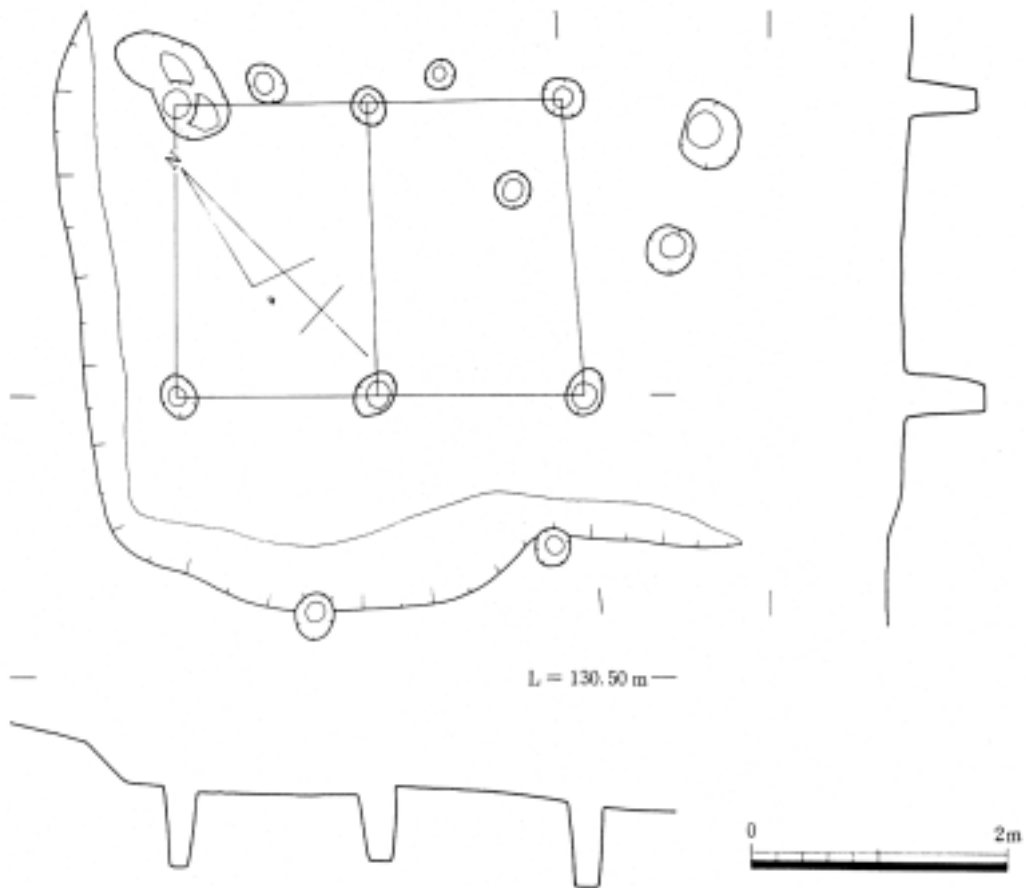
第25図 長う子遺跡第2号溝状遺構実測図



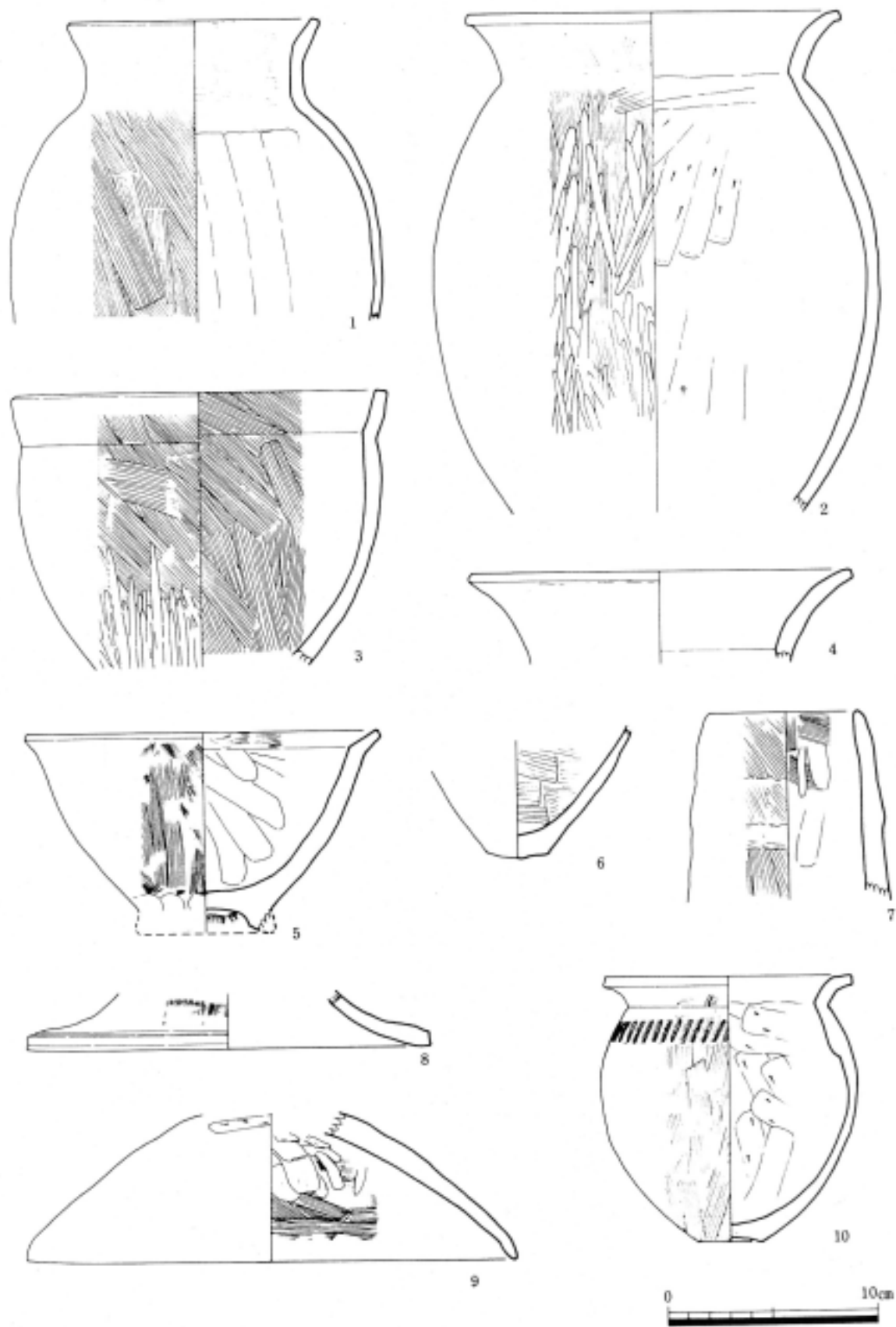
第26図 長う子遺跡掘立柱建物跡C群遺構配置図



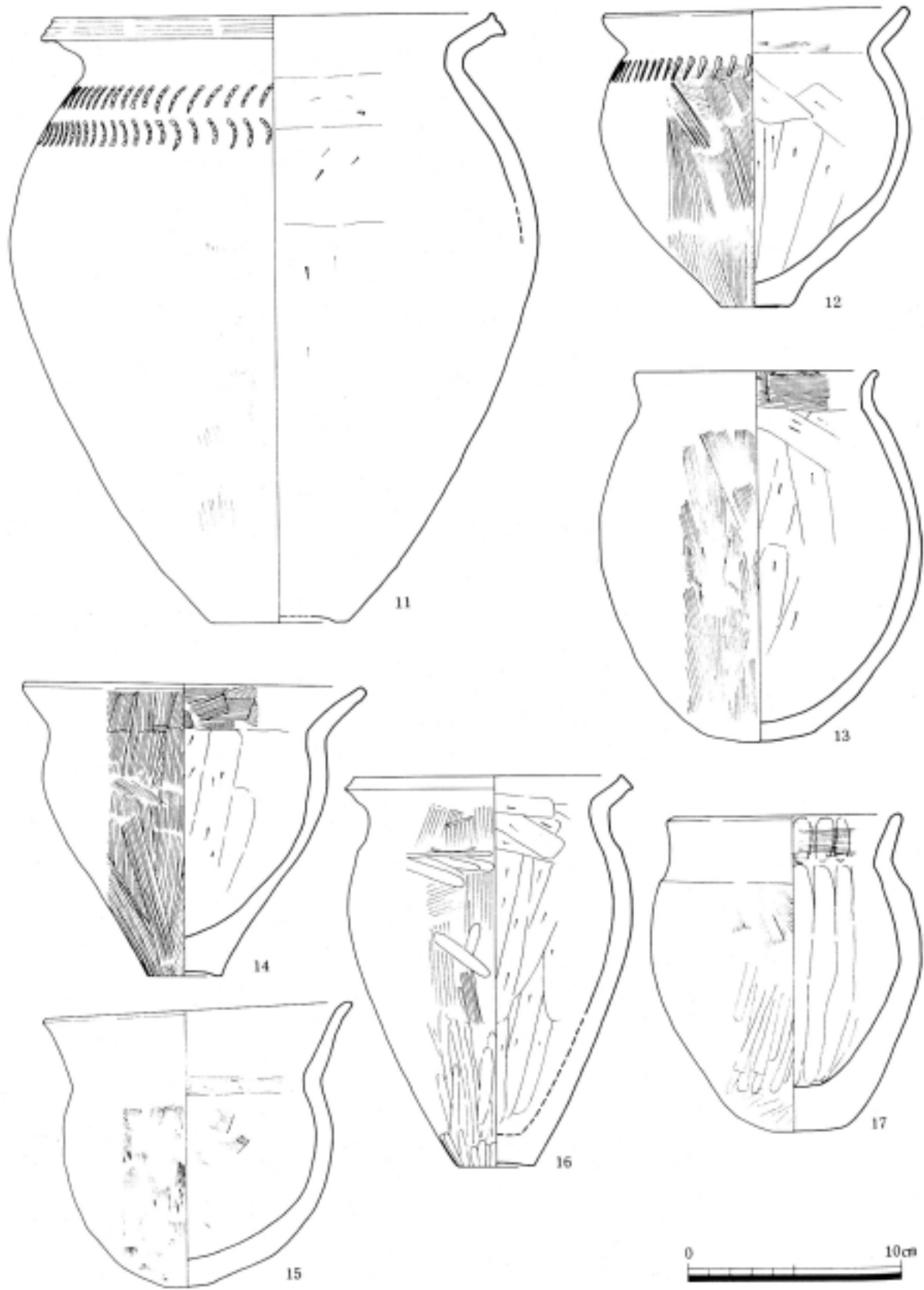
第27図 長う子遺跡掘立柱建物跡C群第1号建物跡実測図



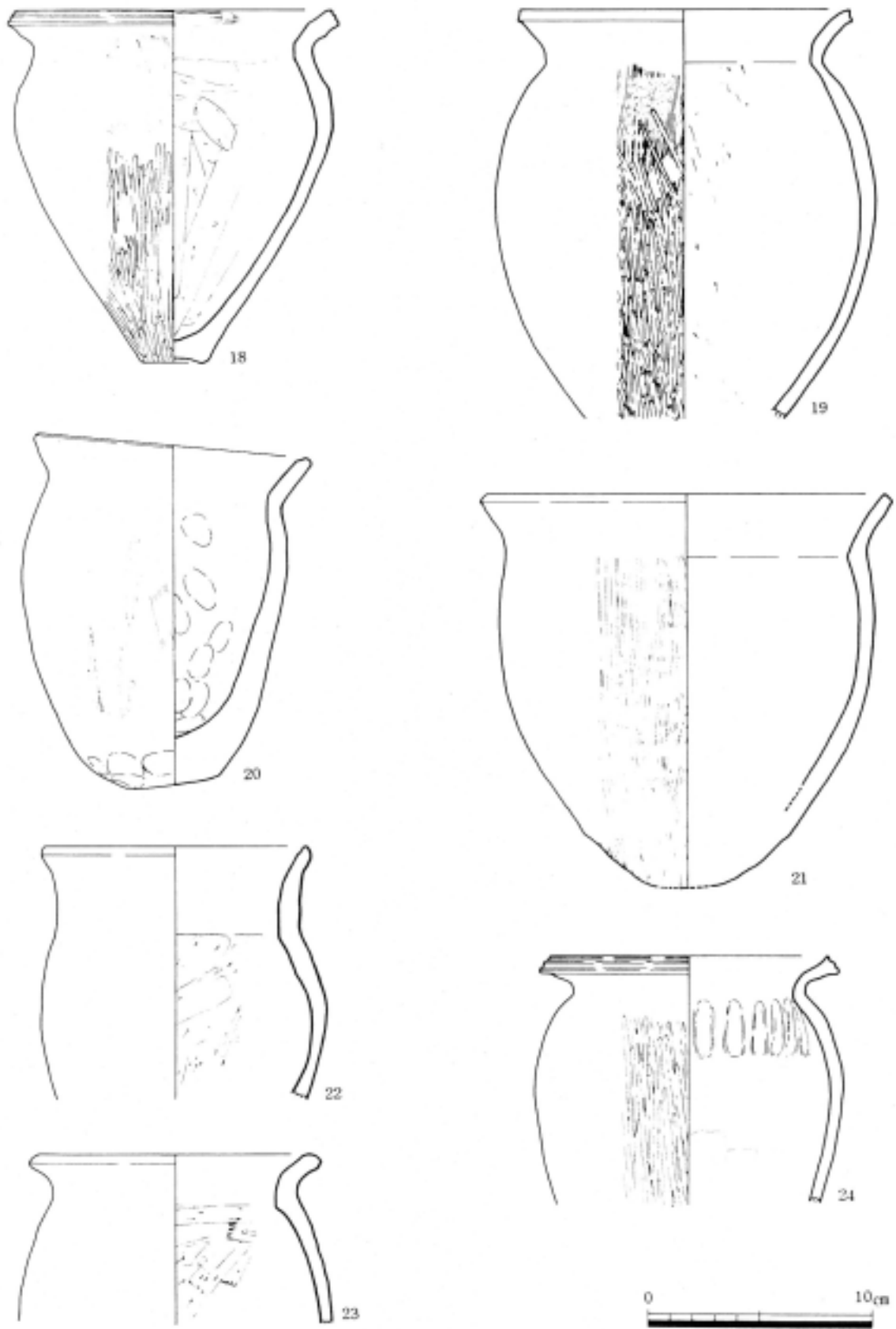
第28図 長う子遺跡掘立柱建物跡C群第2号建物跡実測図



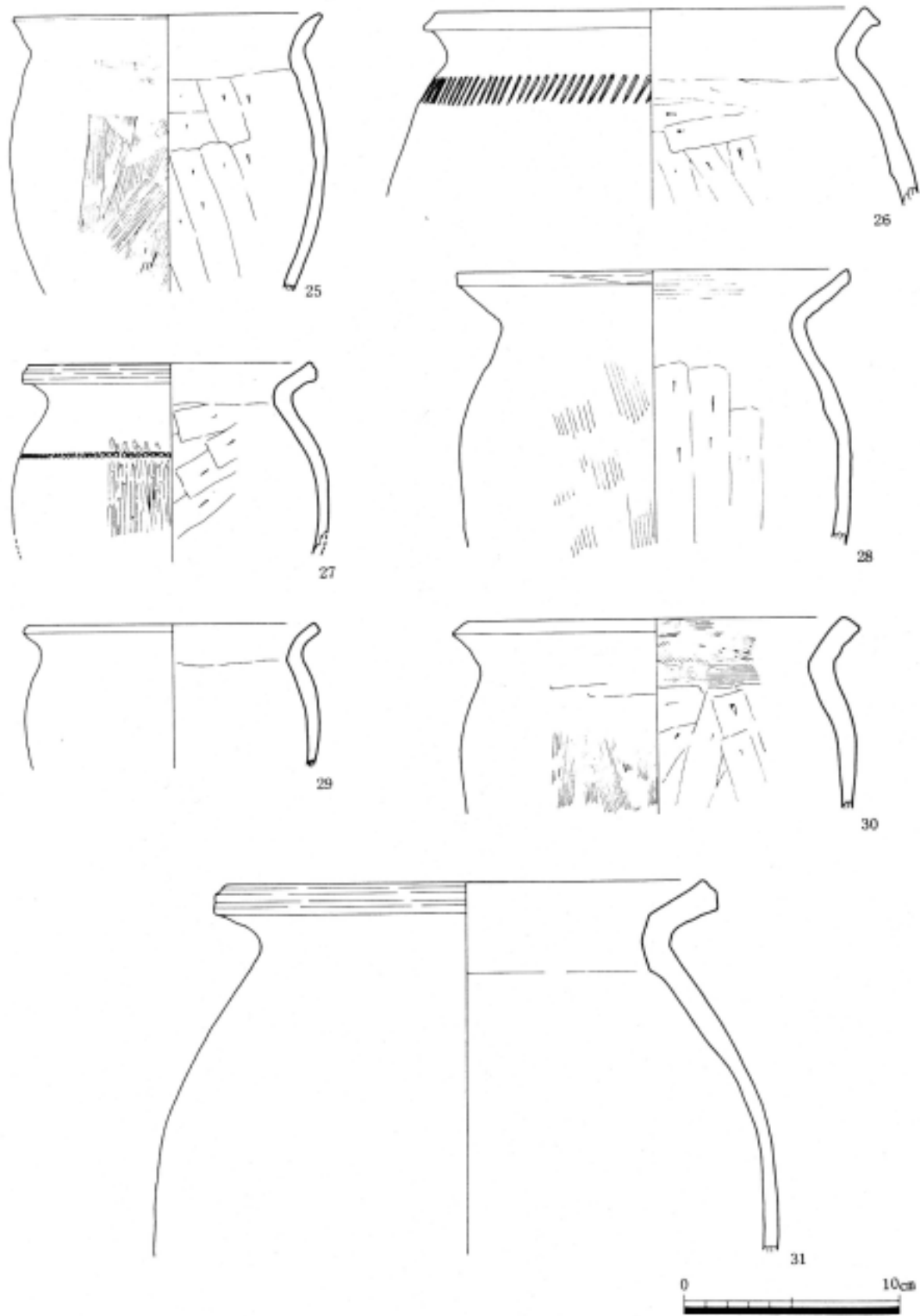
第29図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(1)



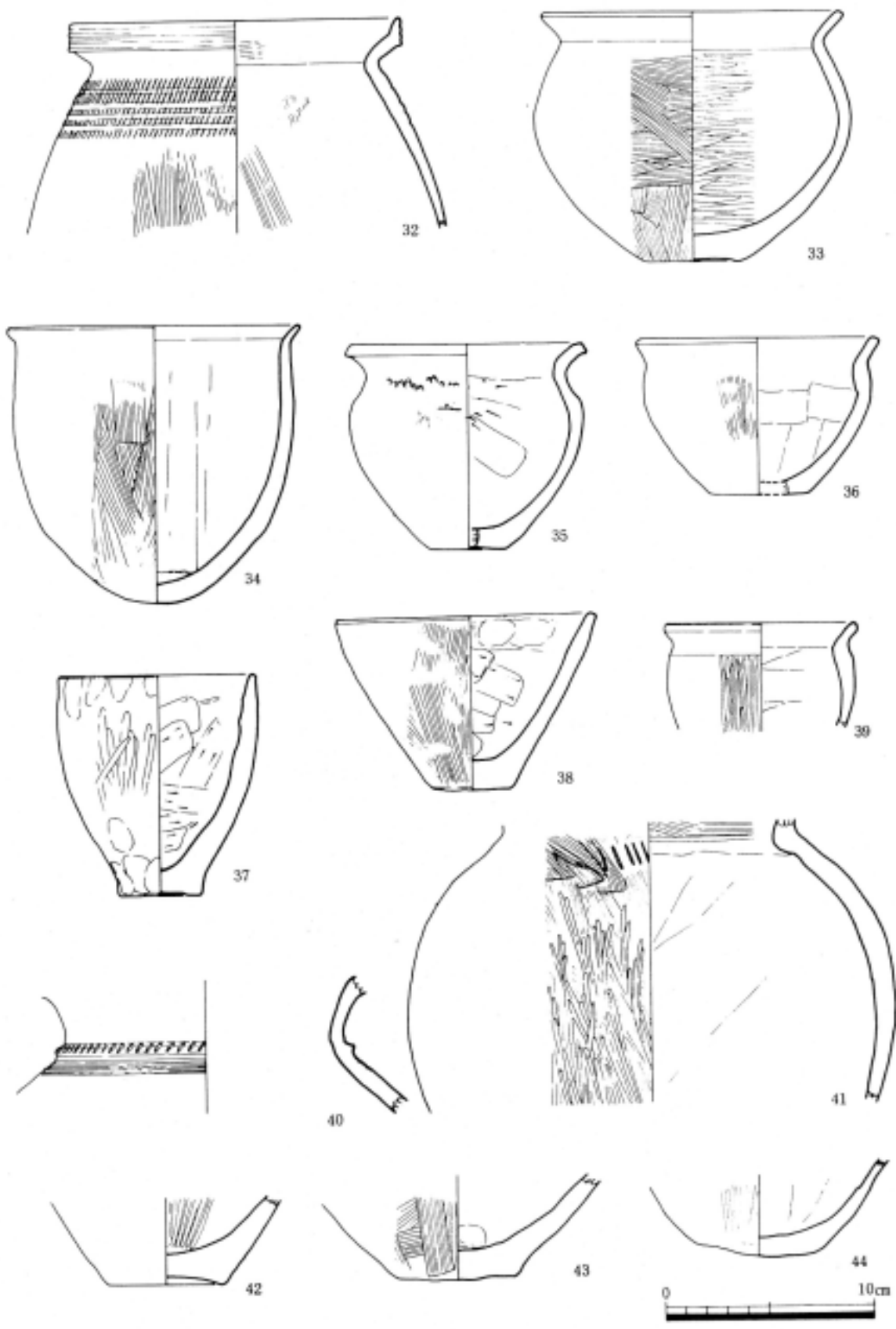
第30図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(2)



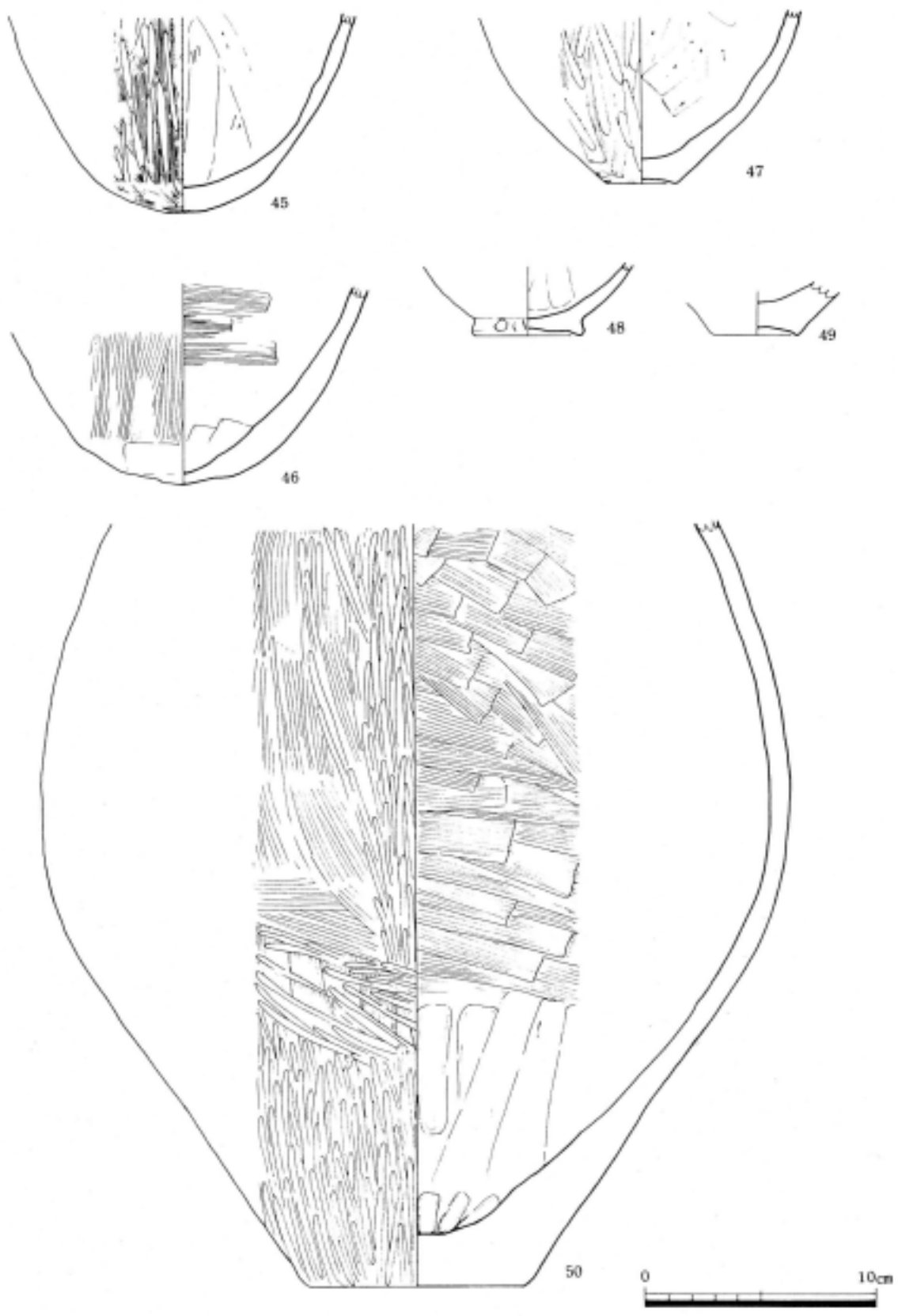
第31図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(3)



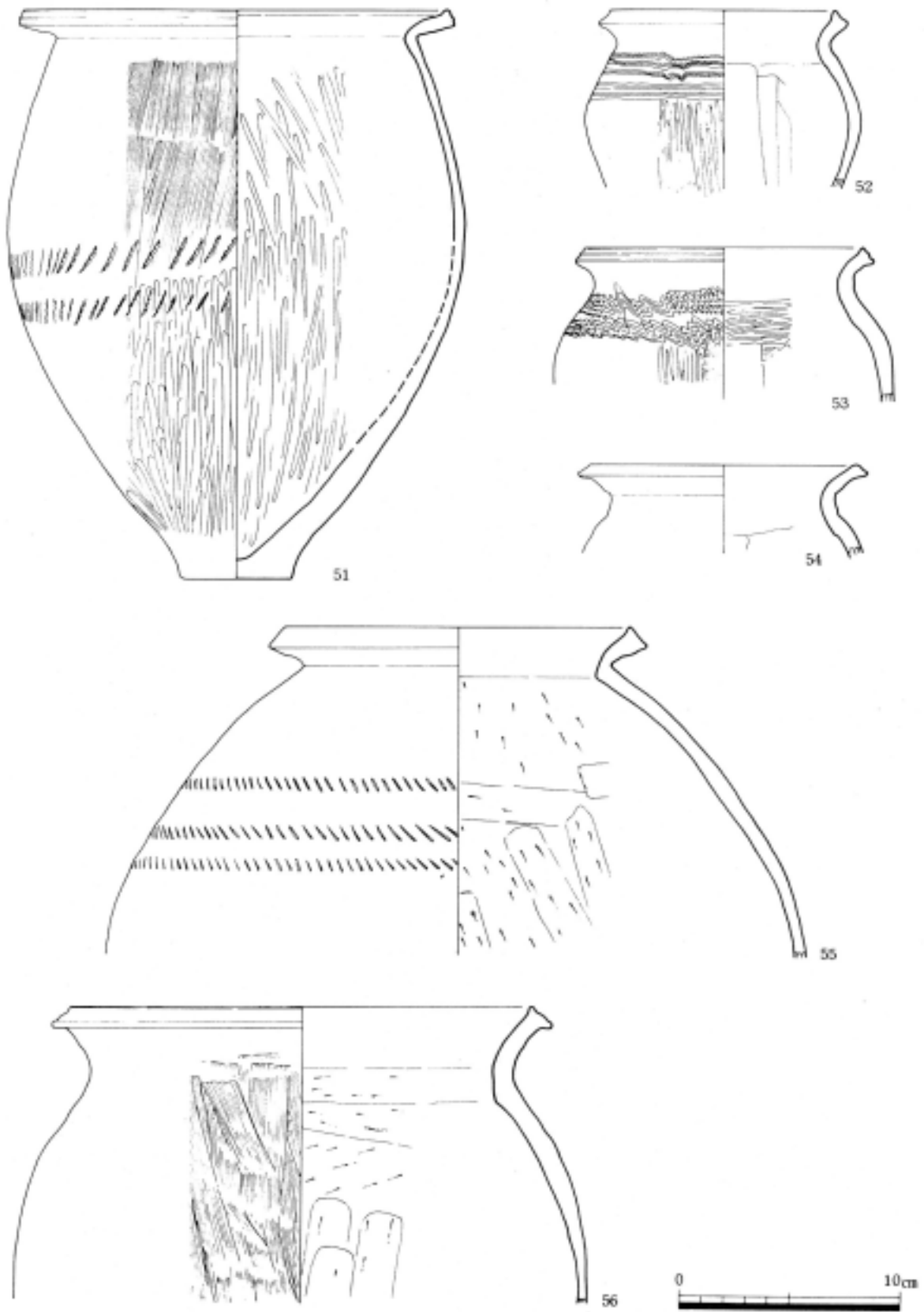
第 32 図 長う子遺跡出土弥生土器実測図 (4)



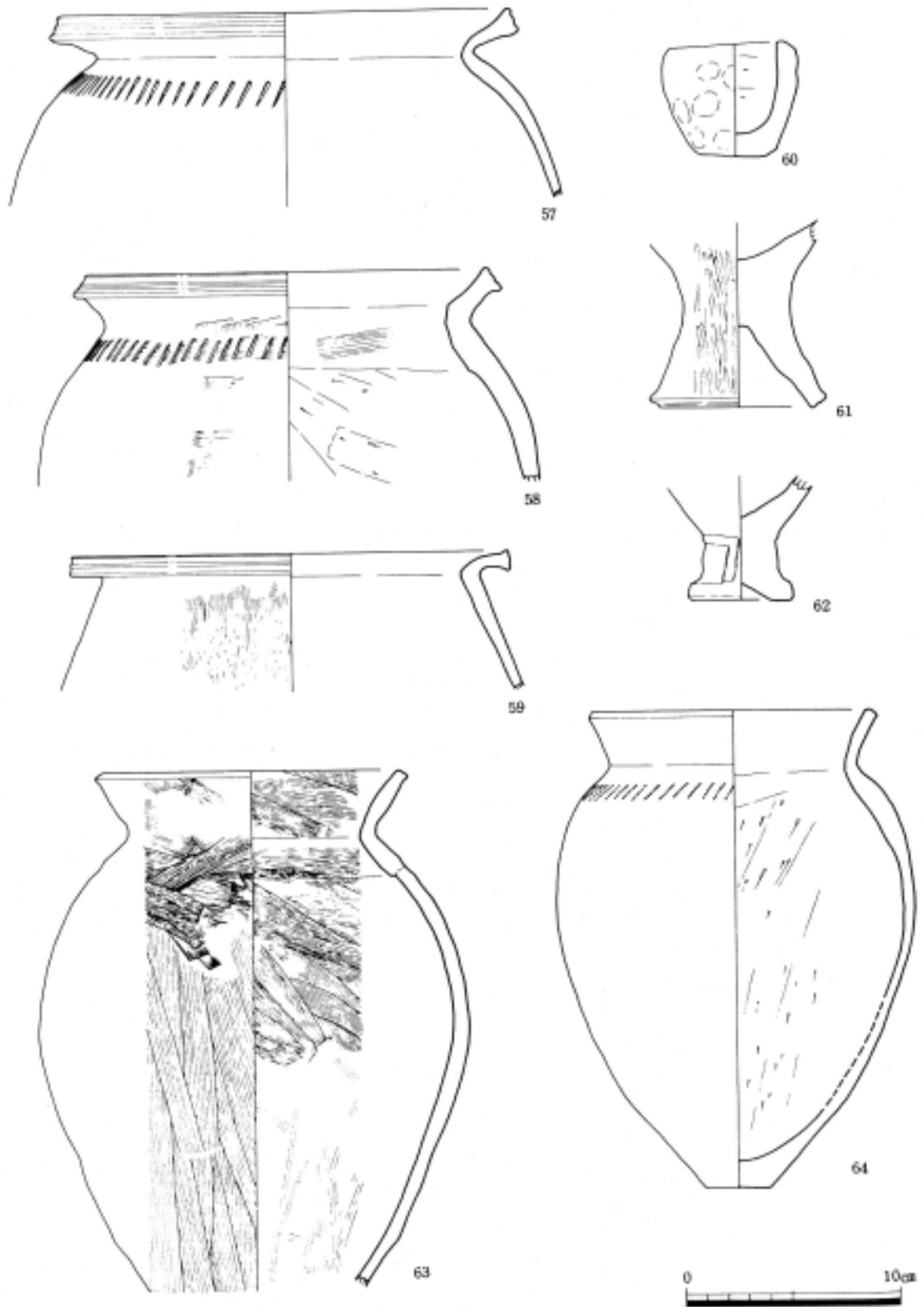
第33図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(5)



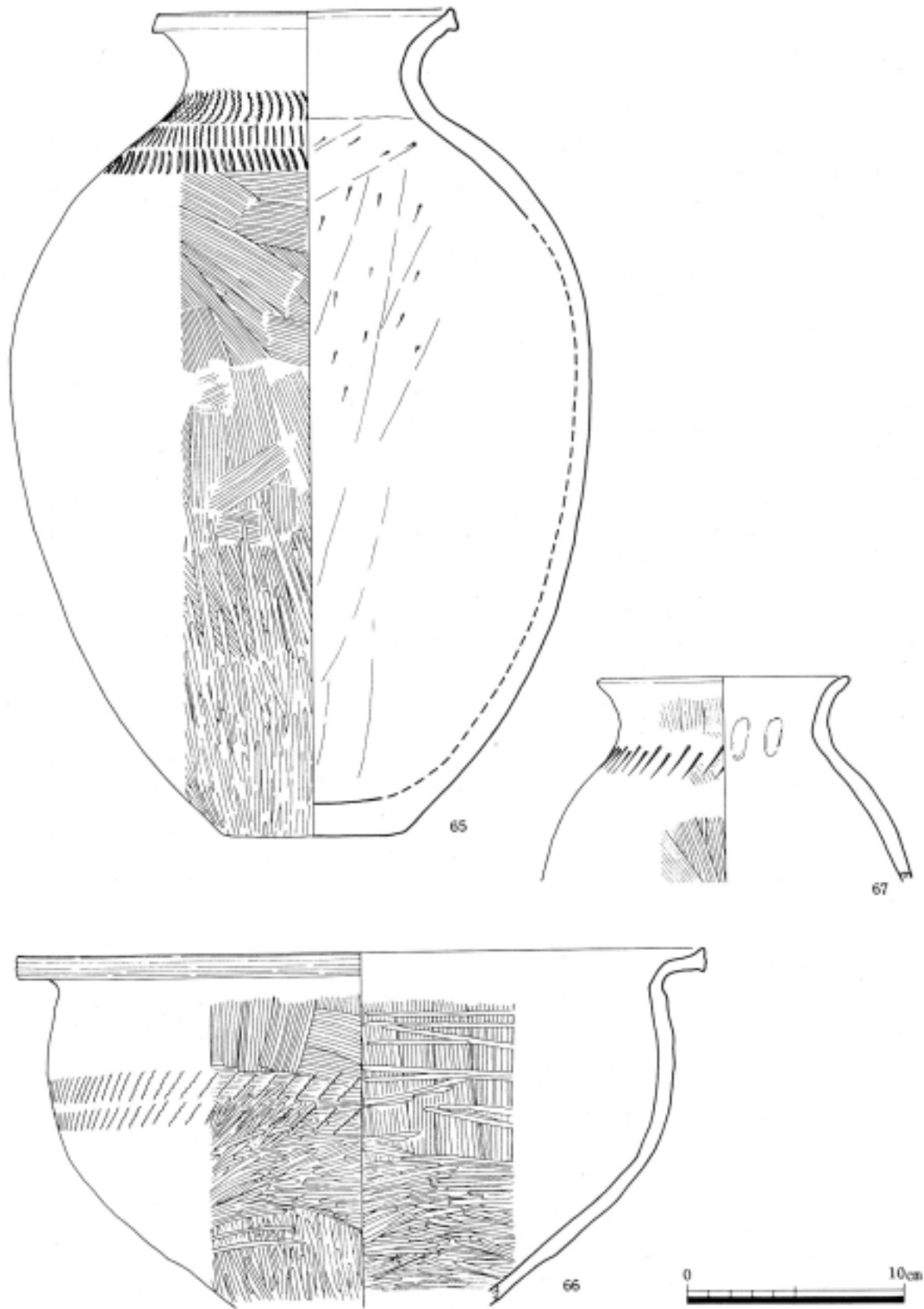
第 34 図 長う子遺跡出土弥生土器実測図 (6)



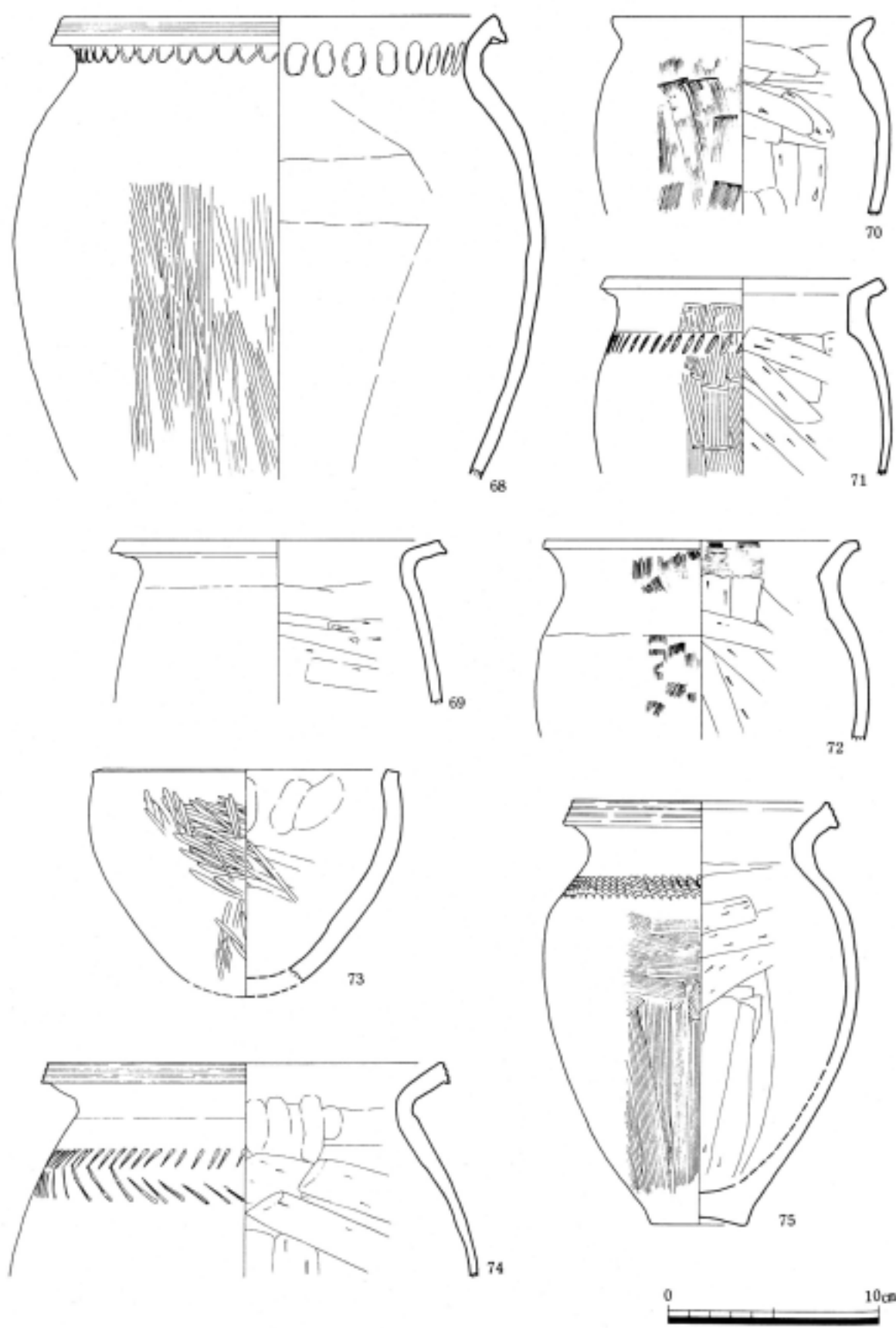
第35図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(7)



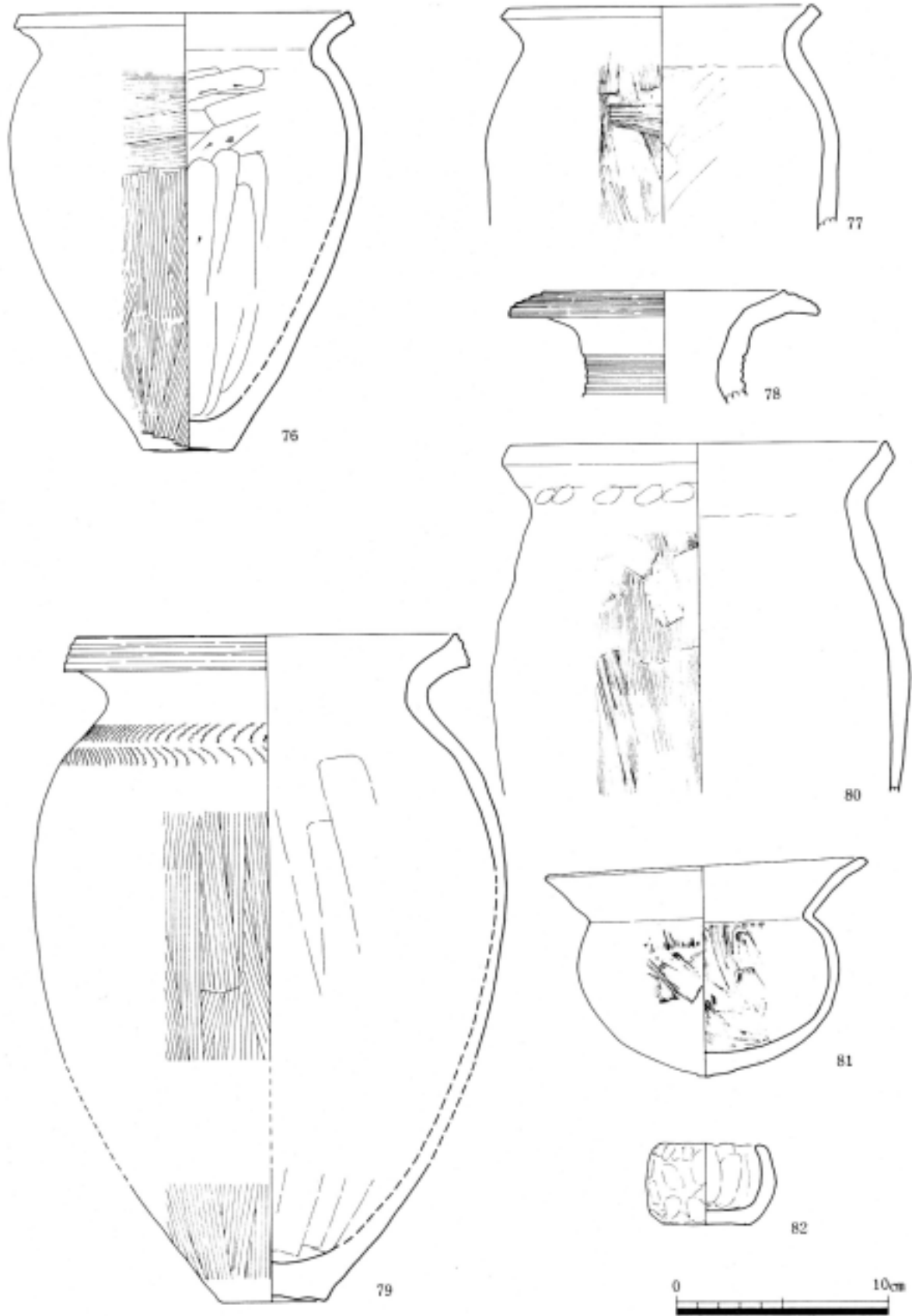
第 36 図 長う子遺跡出土弥生土器実測図 (8)



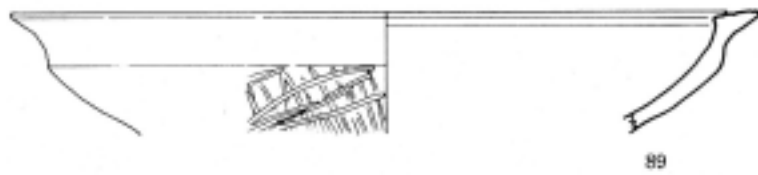
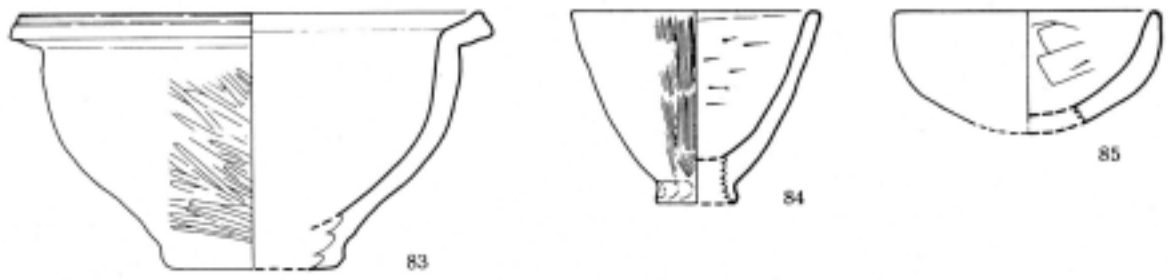
第37図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(9)



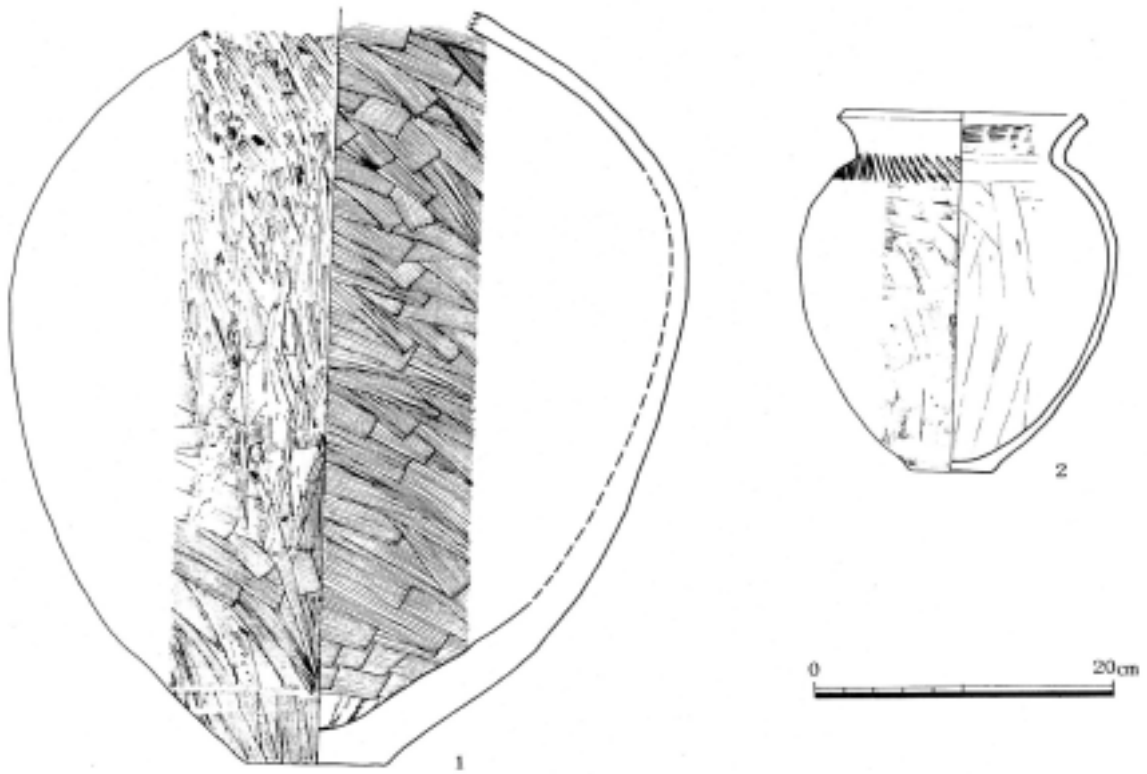
第38図 長う子遺跡出土弥生土器実測図(10)



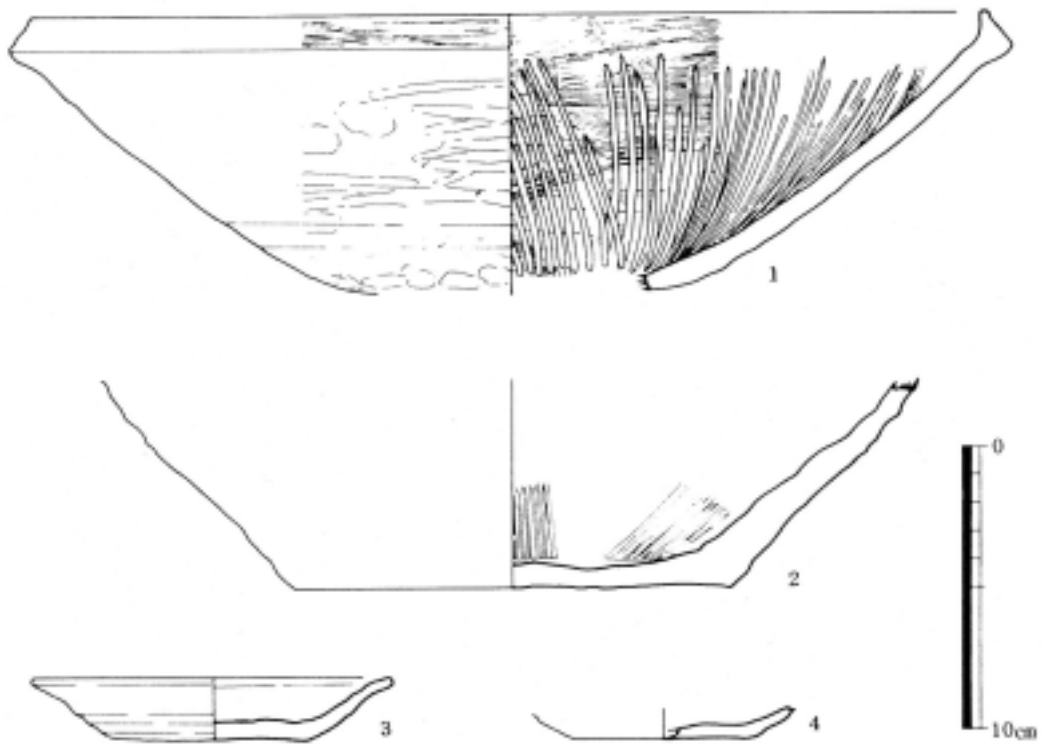
第39図 長う子遺跡出土弥生土器実測図 (11)



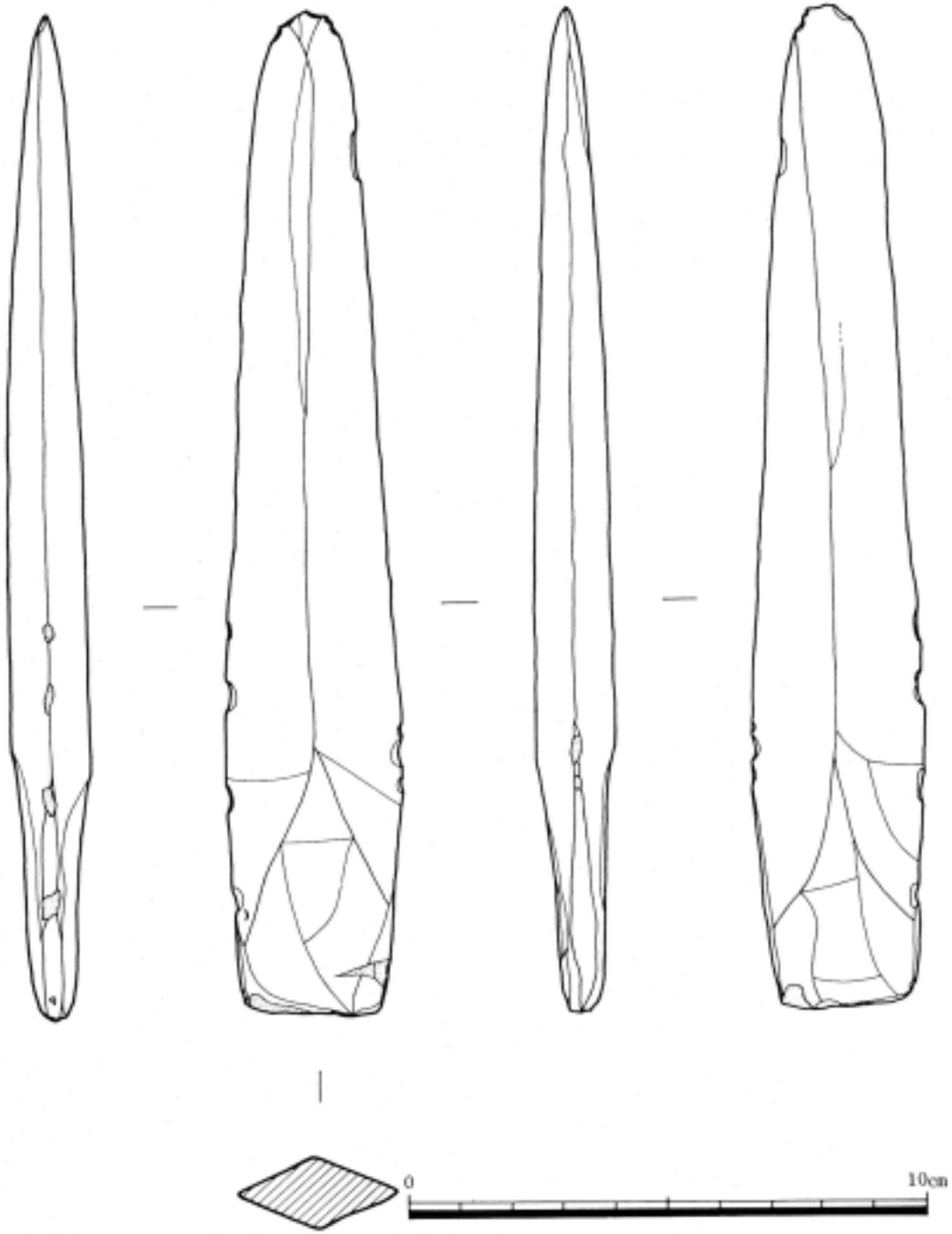
第40図 長う子遺跡出土弥生土器実測図 (12)



第41図 長う子遺跡出土弥生土器実測図 (13)



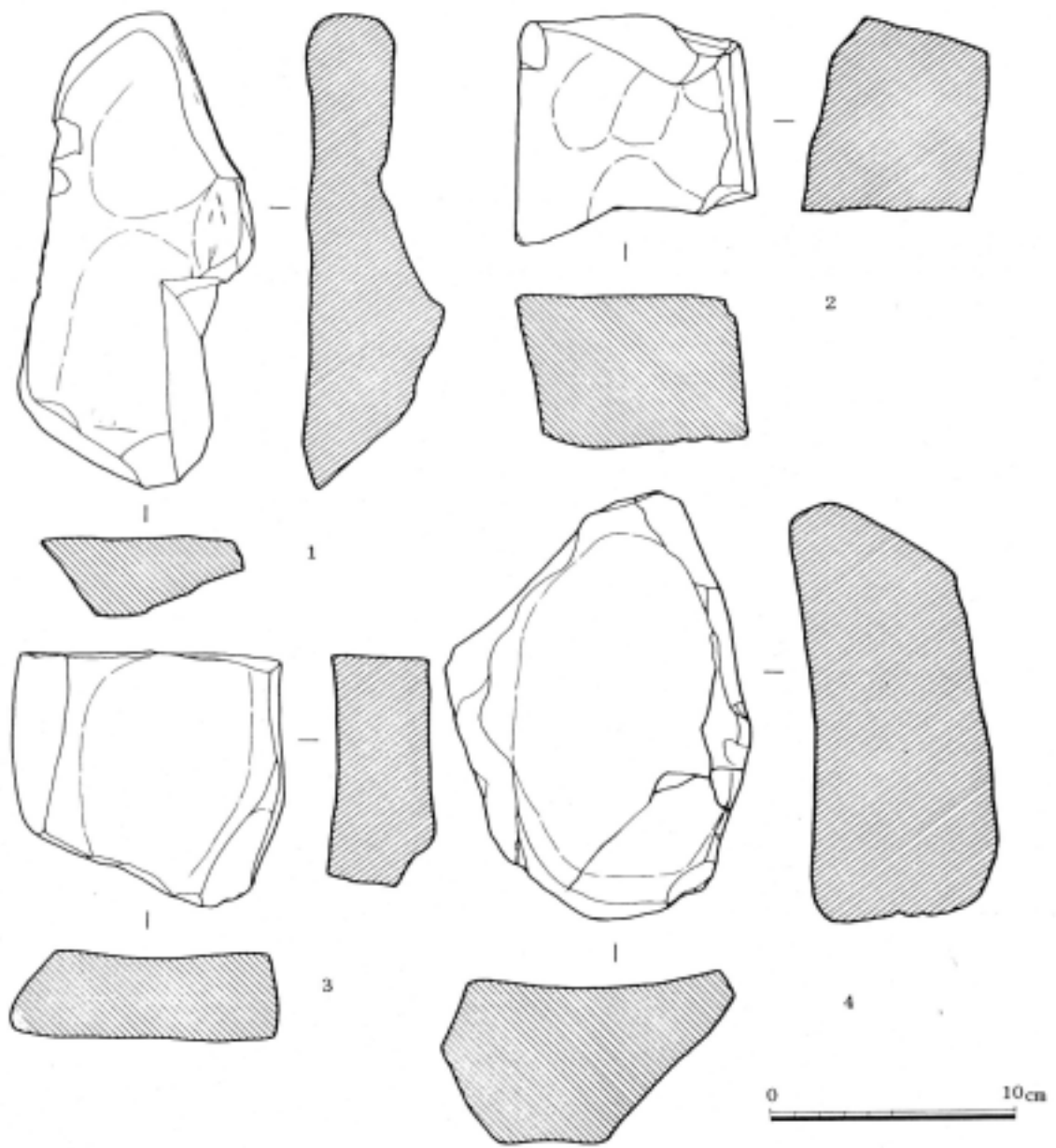
第42図 長う子遺跡出土中世土器類実測図



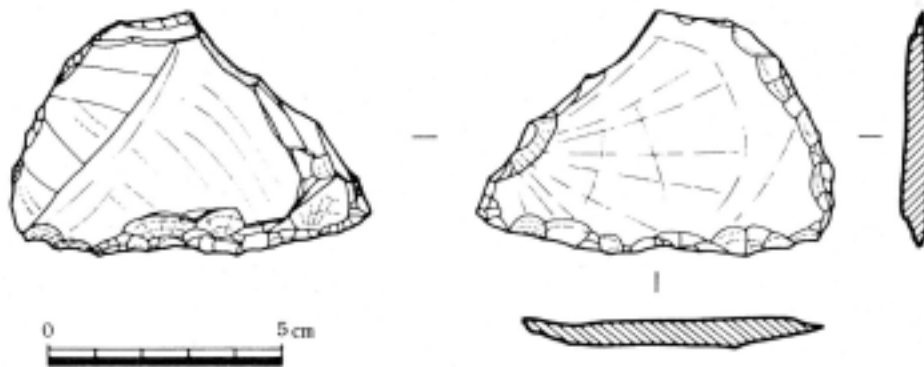
第43図 長う子遺跡出土磨製石剣実測図



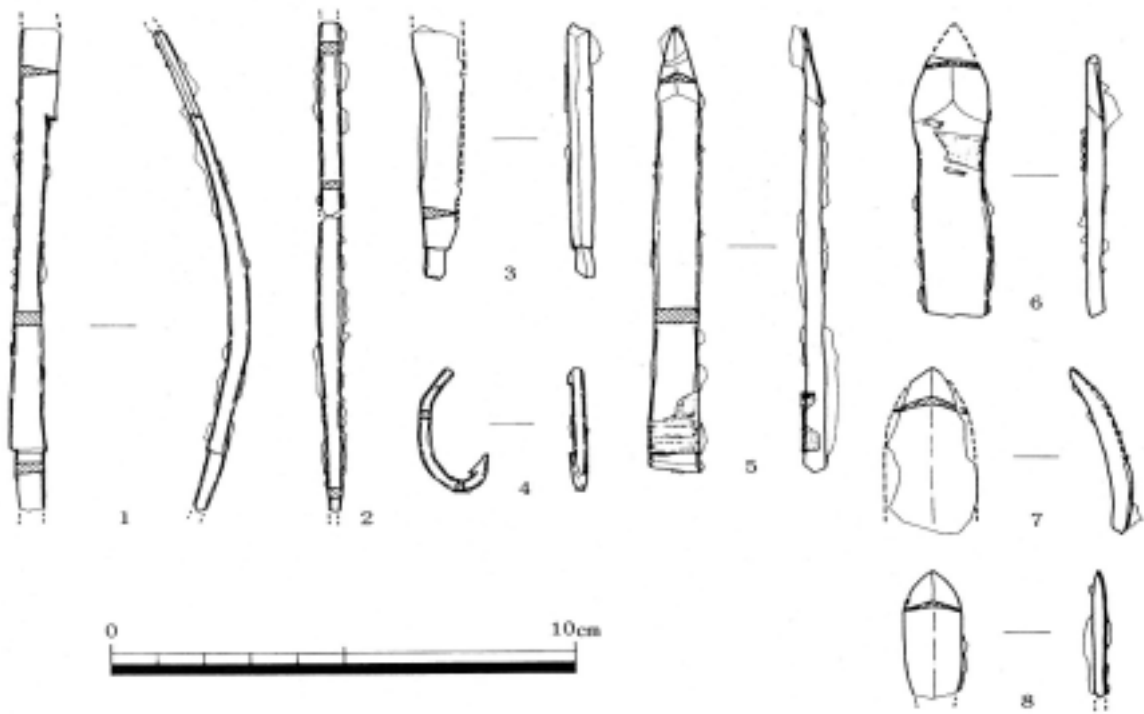
第44図 長う子遺跡出土石製品実測図(1)



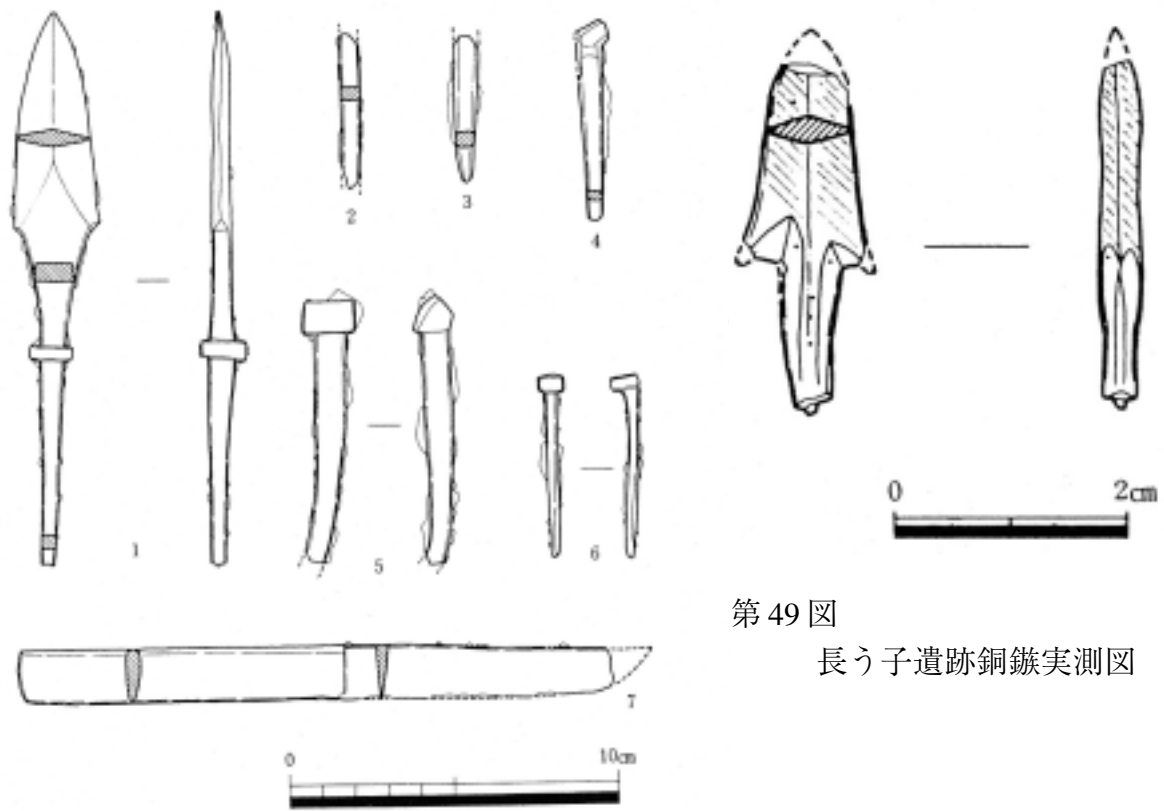
第45図 長う子遺跡出土石製品実測図(2)



第46図 長う子遺跡出土石器実測図

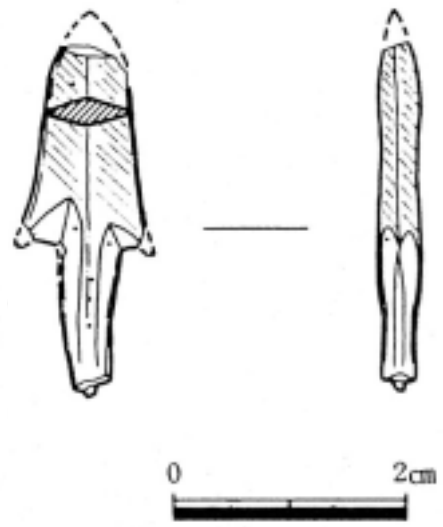


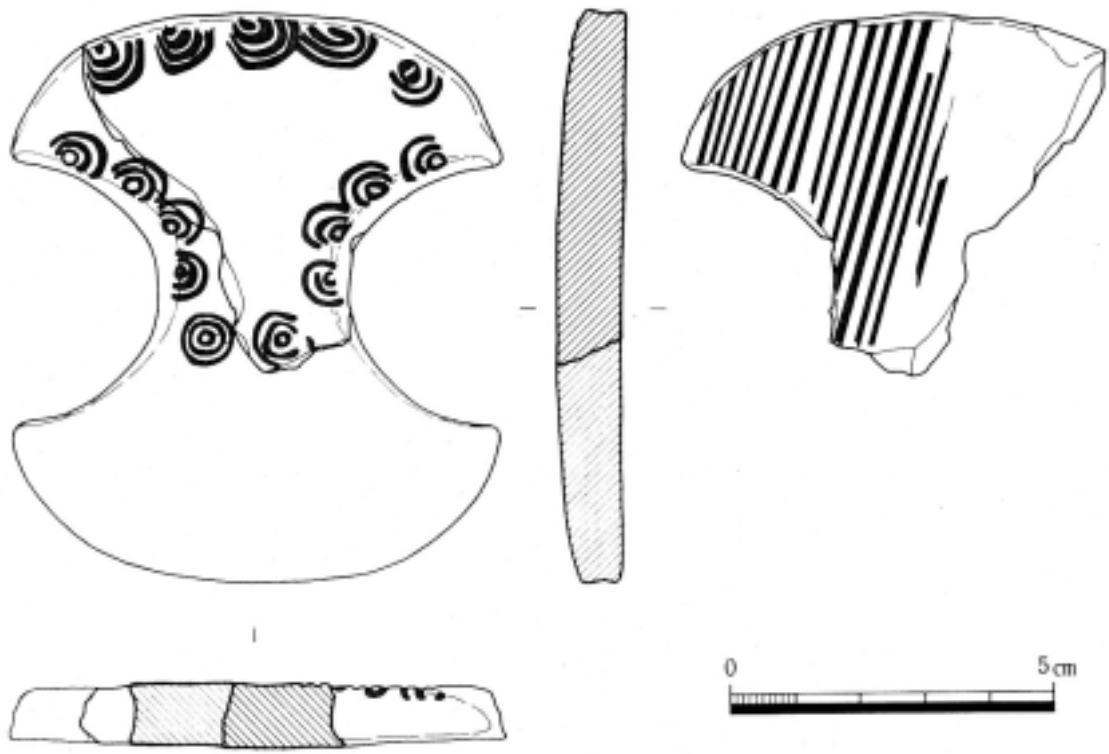
第47図 長う子遺跡鉄製品実測図 (弥生)



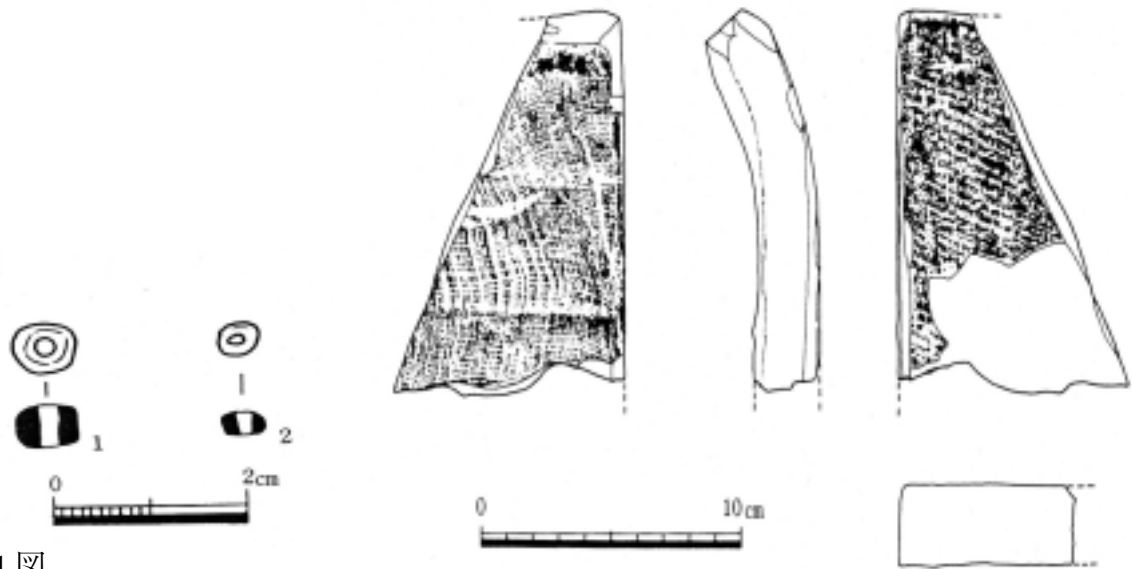
第48図 長う子遺跡鉄製品実測図 (中世)

第49図
長う子遺跡銅鏃実測図



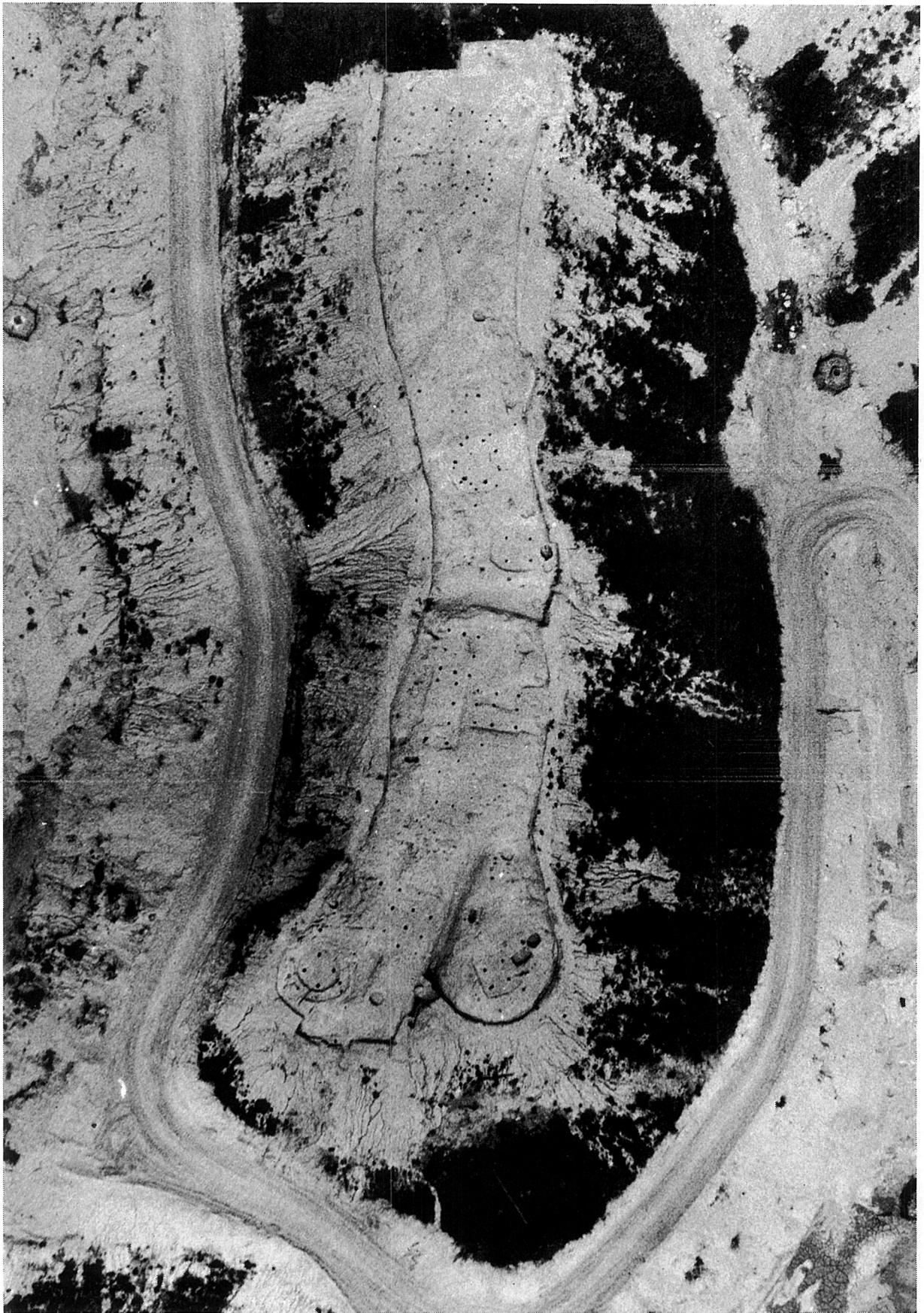


第50図 長う子遺跡出土分銅形土製品実測図

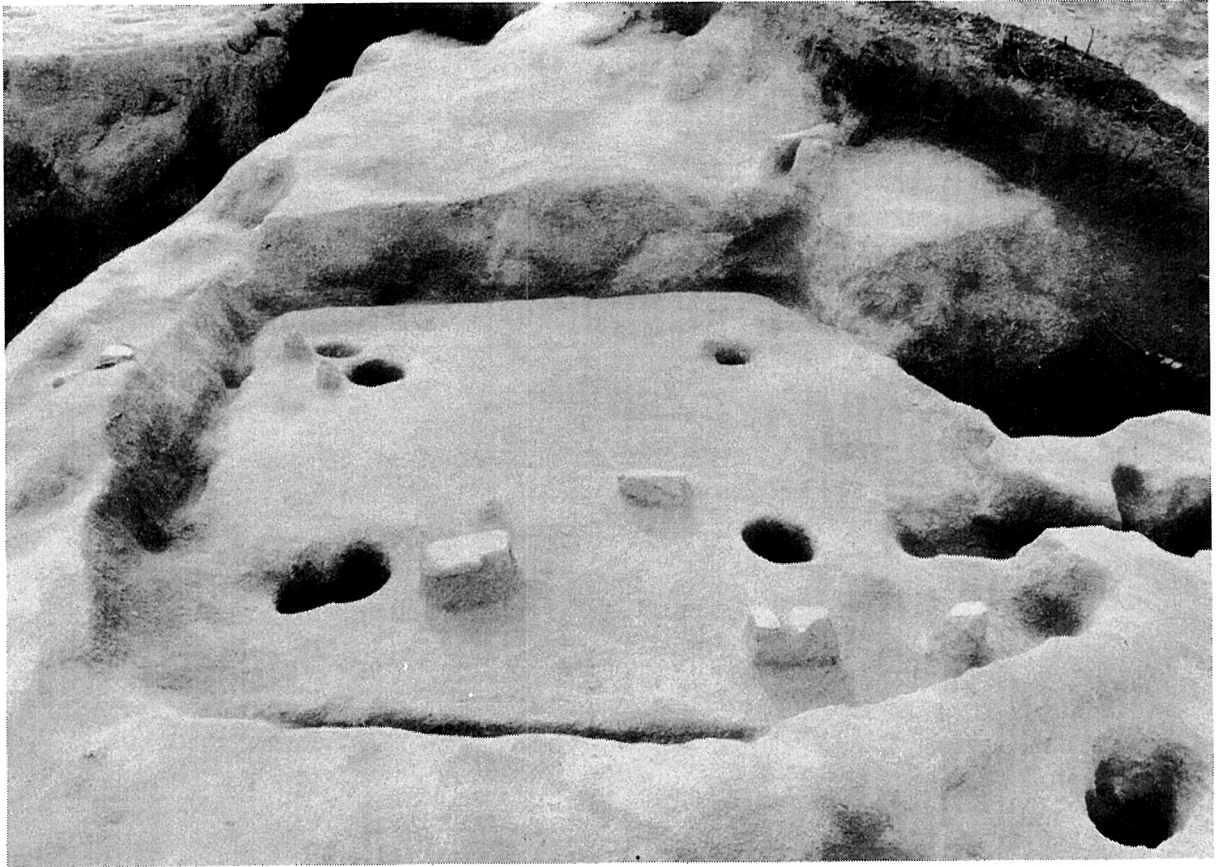


第51図
長う子遺跡出土
ガラス小玉実測図

第52 長う子遺跡出土古瓦実測図



長う子遺跡全景



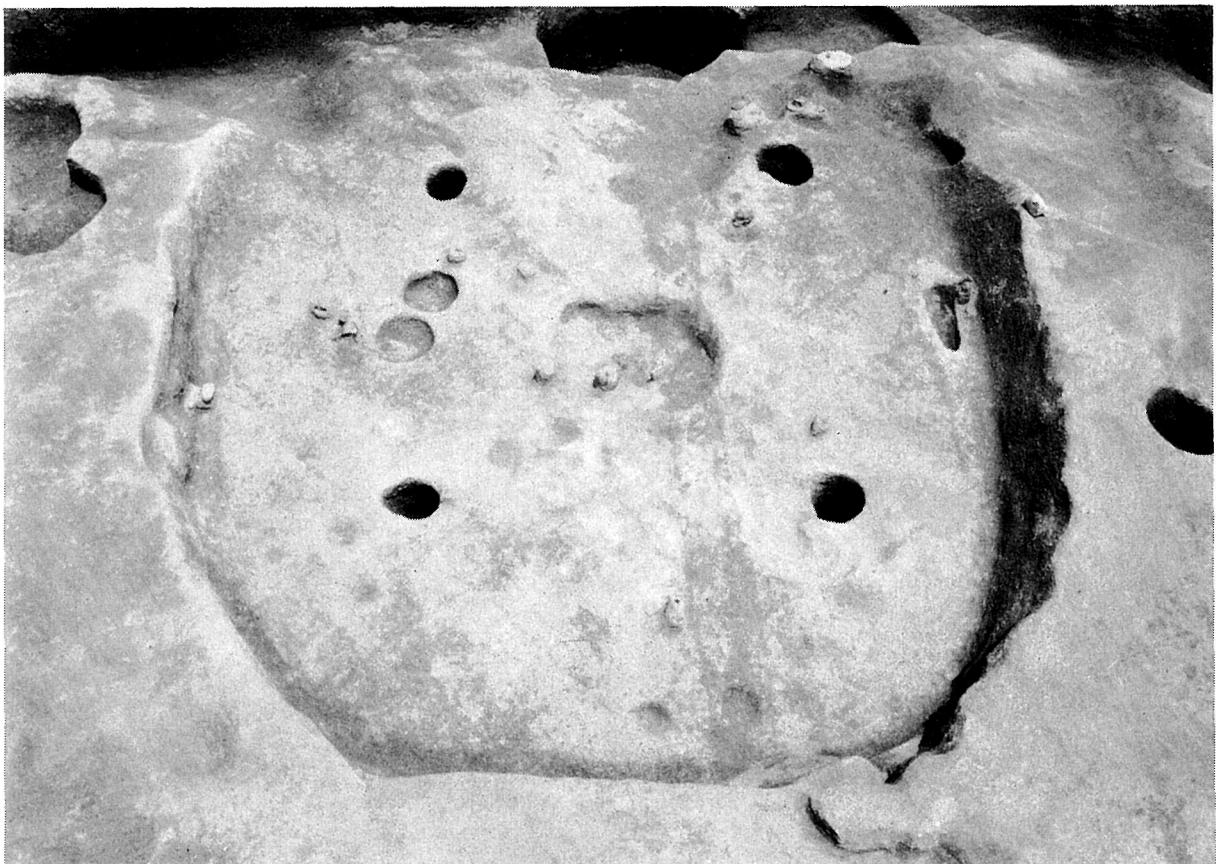
a. 長う子遺跡第1号住居跡(東より)



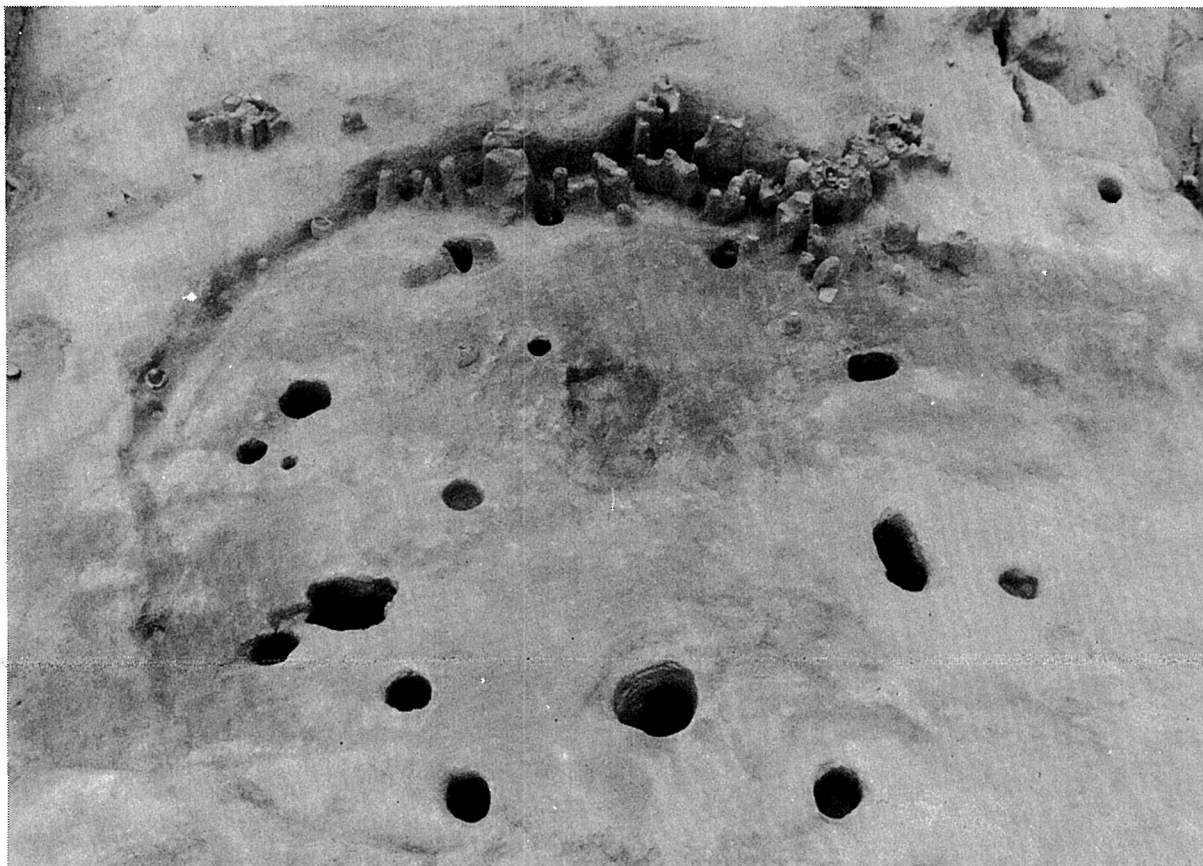
b. 長う子遺跡第2.3.4号住居跡(北西より)



a. 長う子遺跡第 2.3.4 号住居跡遺物出土状態



b. 長う子遺跡第 5 号住居跡（南より）



a. 長う子遺跡第6号住居跡(東より)



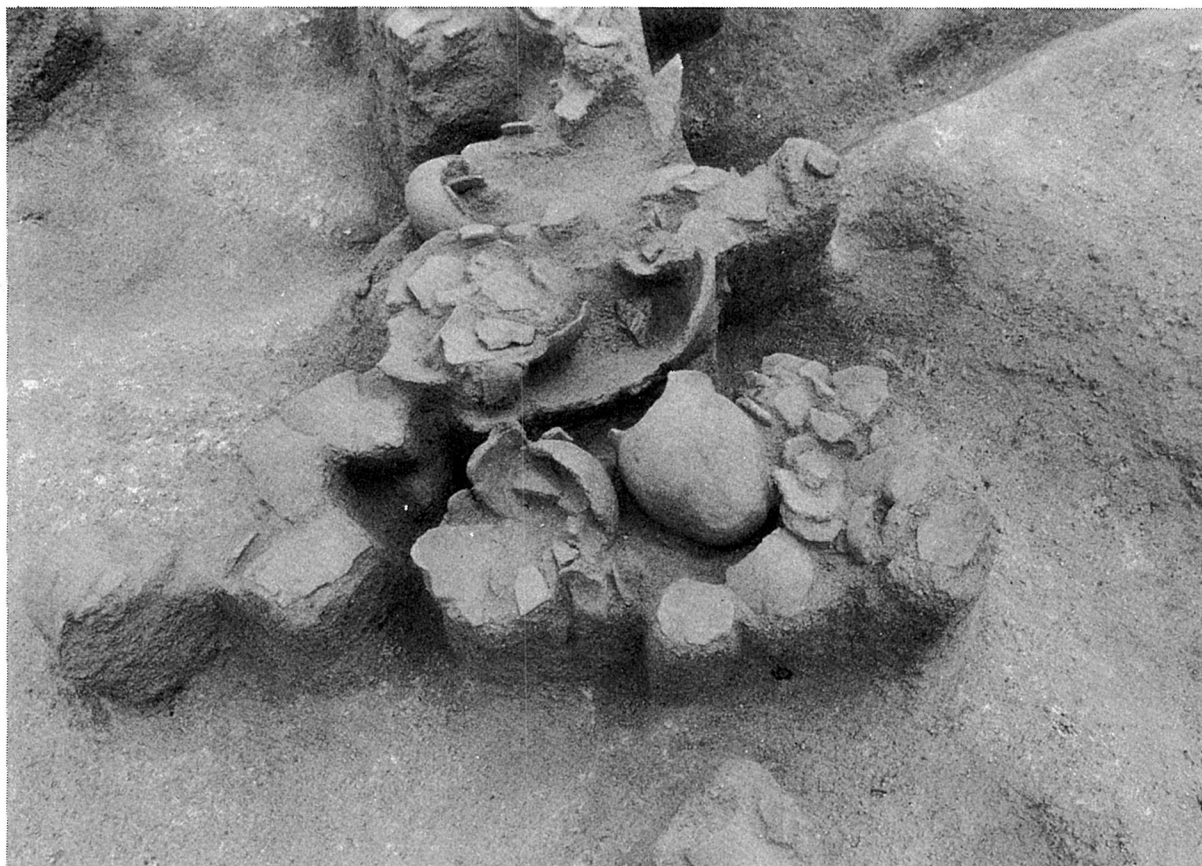
b. 長う子遺跡第6号住居跡遺物出土状態(北東より)



a. 長う子遺跡第6号住居跡遺物出土状態（南より）



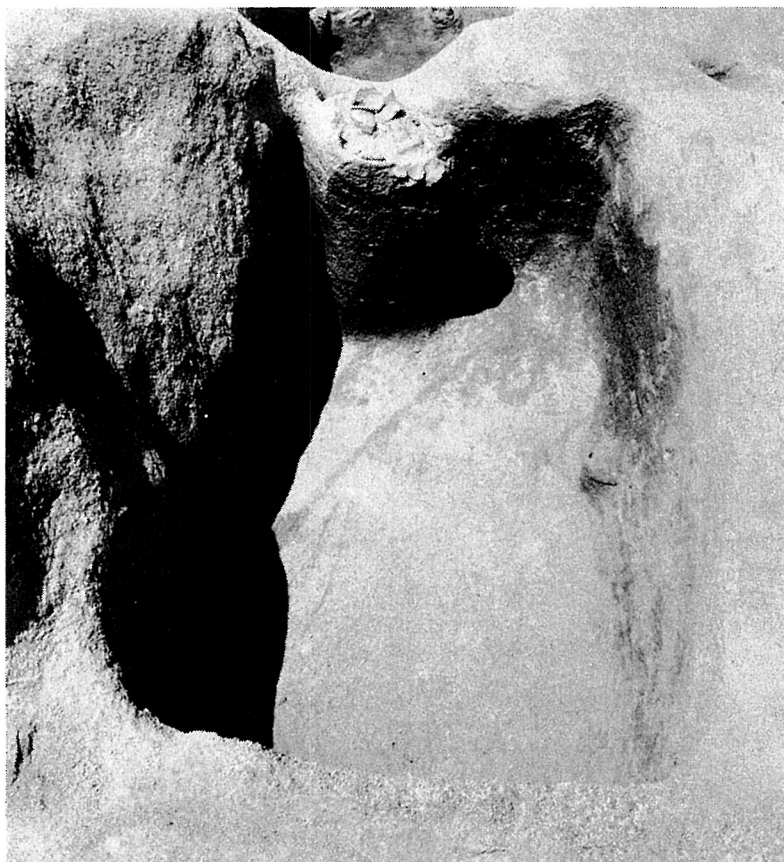
b. 長う子遺跡第6号住居跡遺物出土状態（西より）



a. 長う子遺跡第6号住居跡遺物出土状態（南東より）



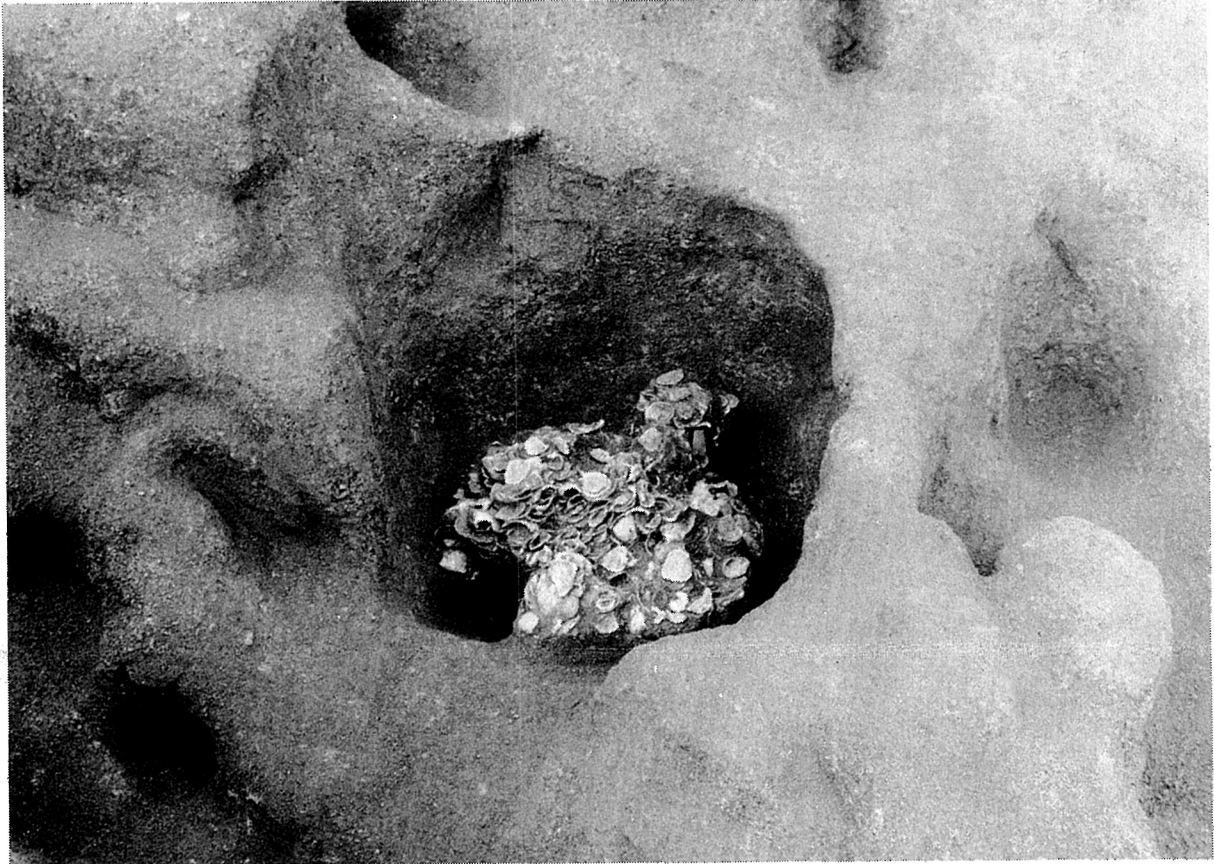
b. 長う子遺跡第6号住居跡釣針出土状態（北より）



a. 長う子遺跡第1号土壇(南東より)



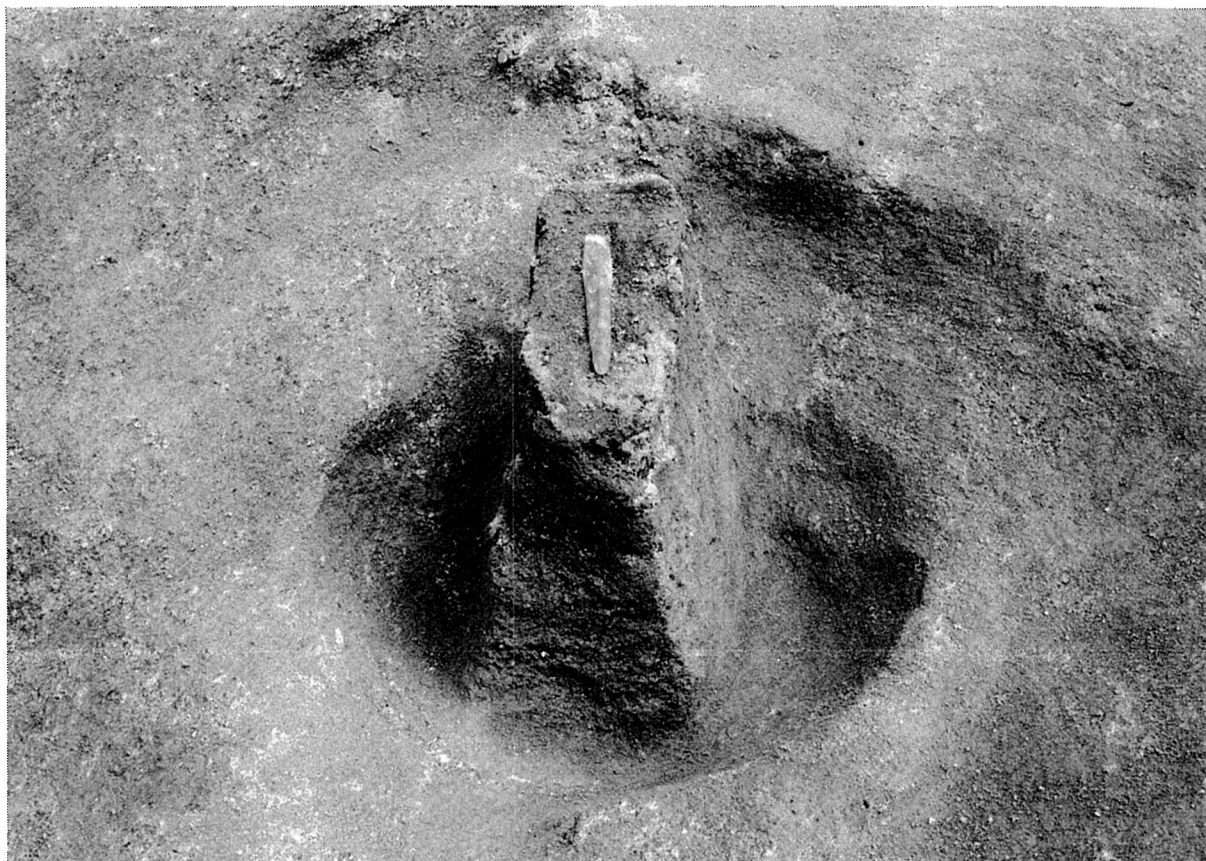
b. 長う子遺跡第2号土壇(北東より)



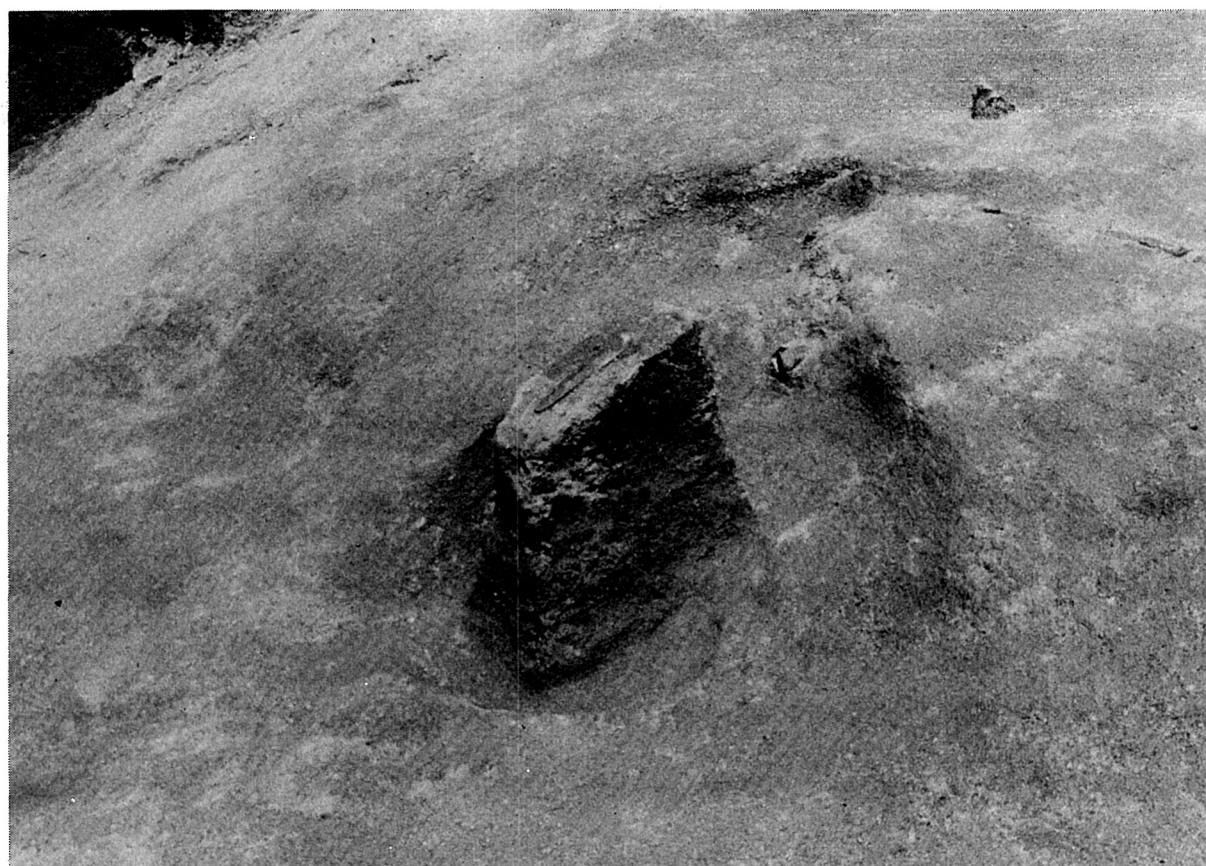
a. 長う子遺跡第3号土壙(南より)



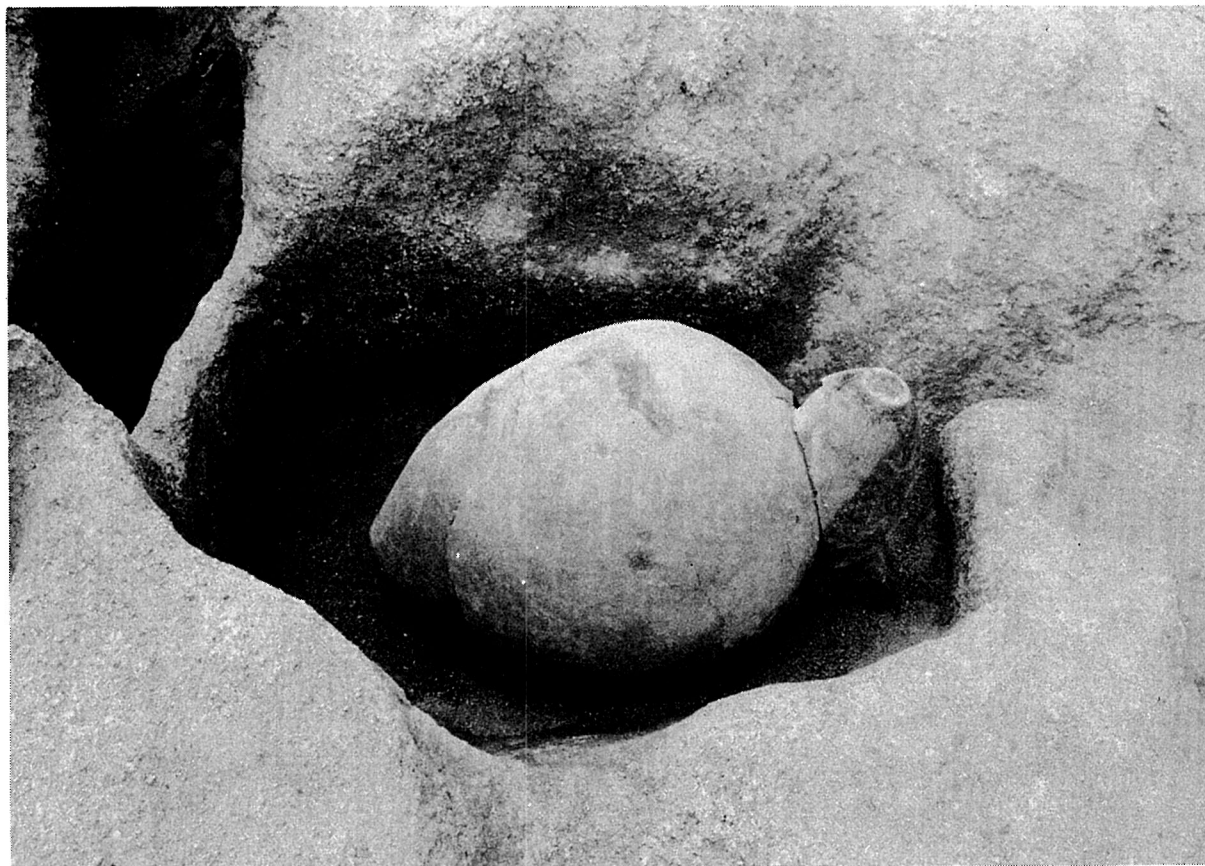
b. 長う子遺跡第3号土壙(南より)



a. 長う子遺跡磨製石剣出土状態（南より）



b. 長う子遺跡磨製石剣出土状態（東より）



a. 長う子遺跡壺棺出土状態（南東より）



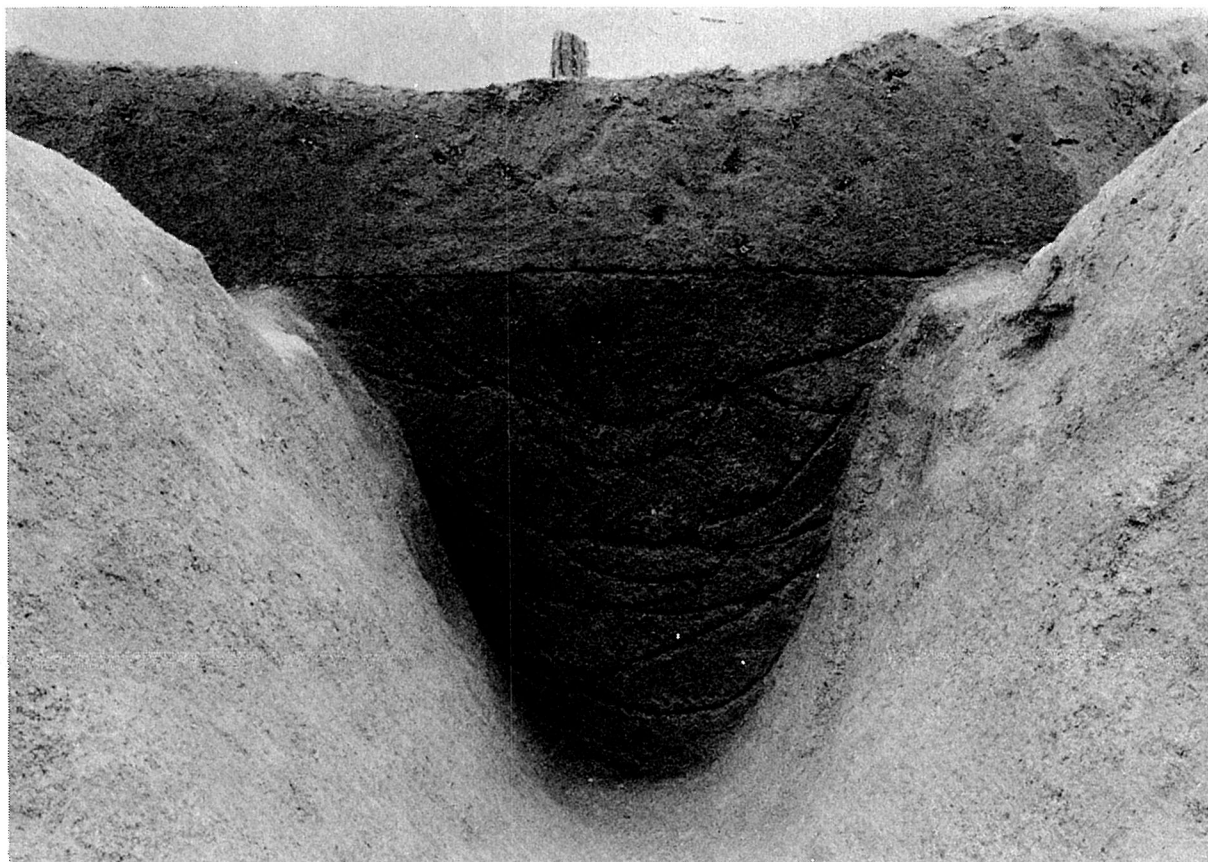
b. 長う子遺跡壺棺出土状態（北東より）



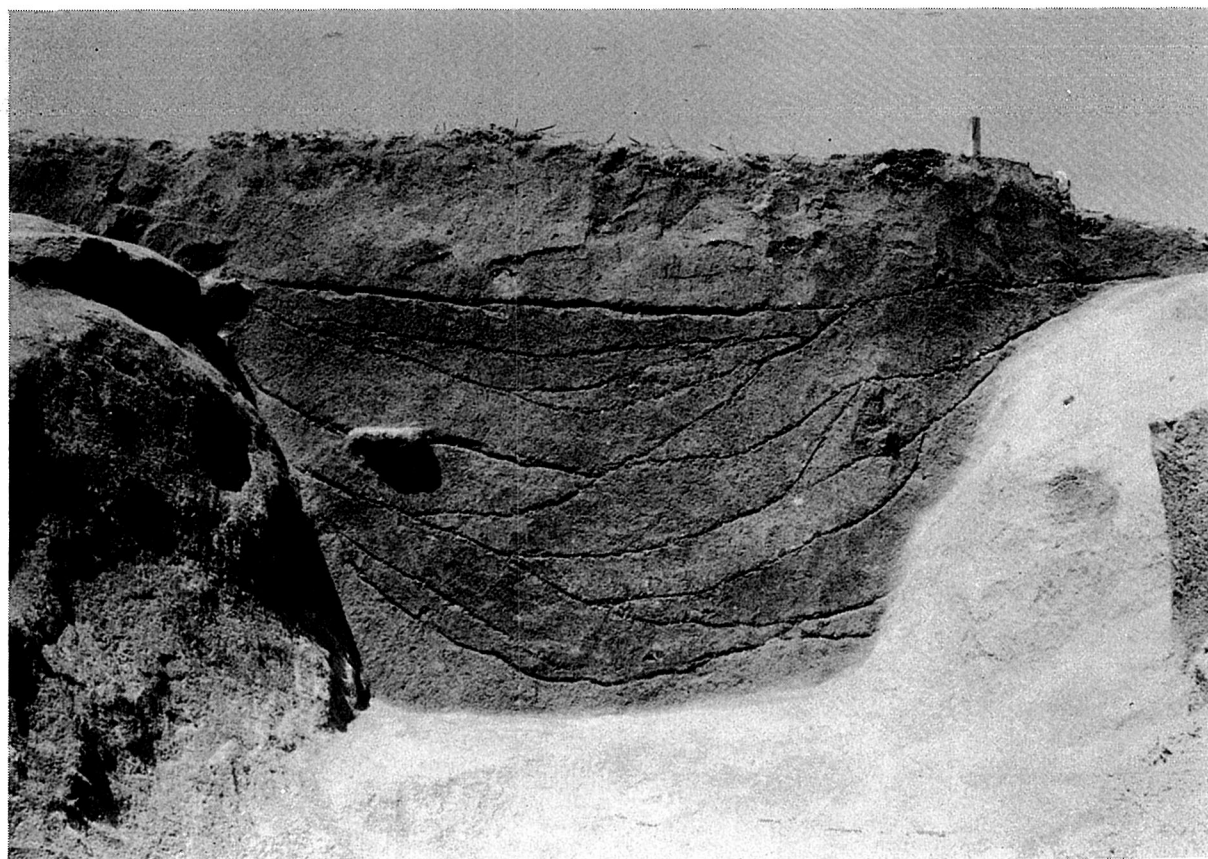
a. 長う子遺跡柱建物跡A群 1.2号建物跡(北西より)



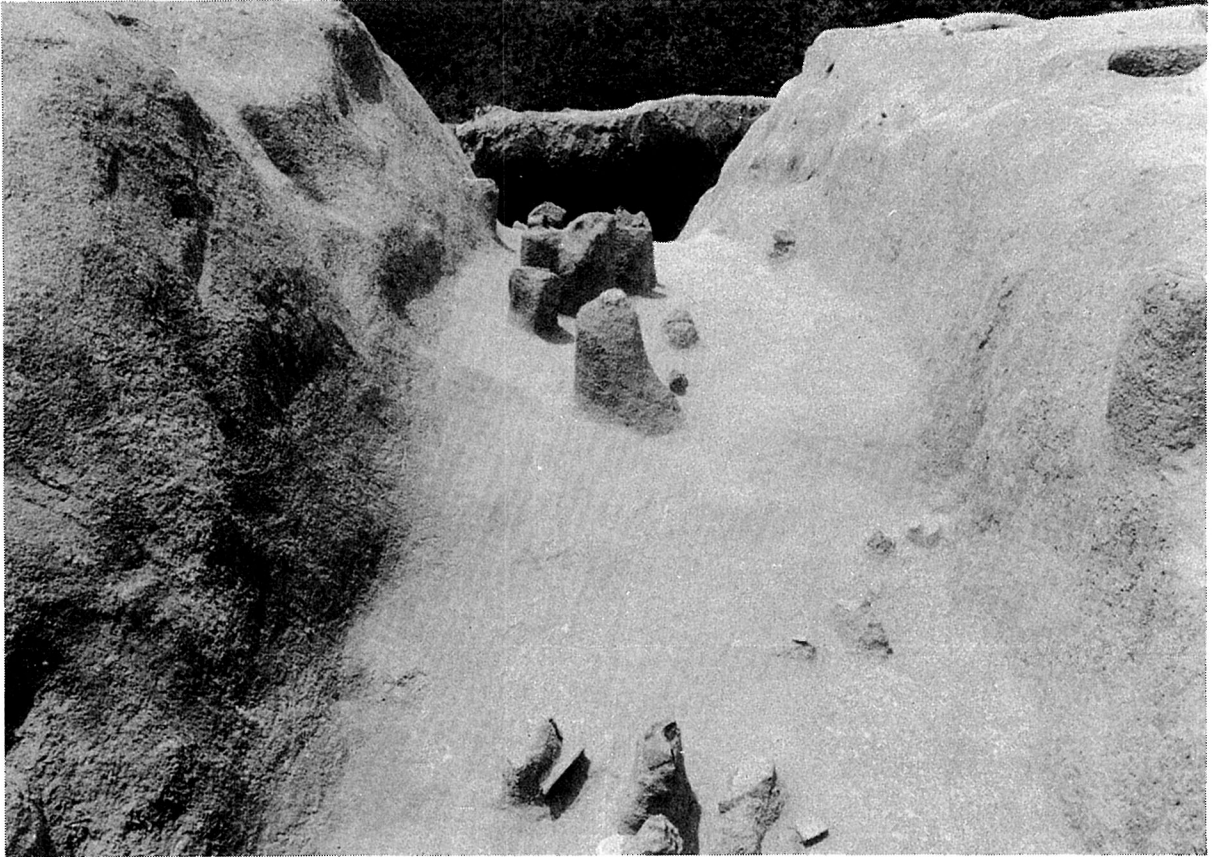
b. 長う子遺跡掘立柱建物跡A群掘り方及び遺物出土状態(北東より)



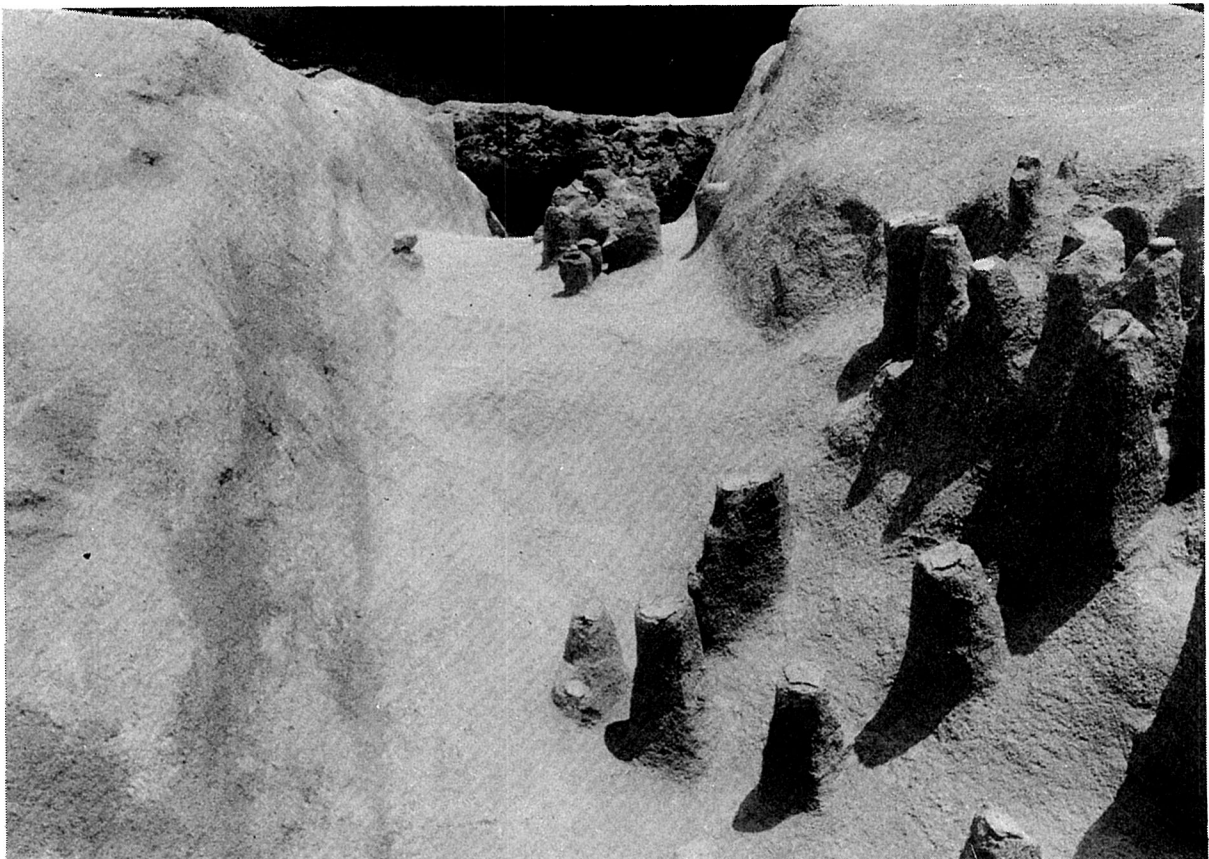
a. 長う子遺跡第1号溝状遺構断面(北西より)



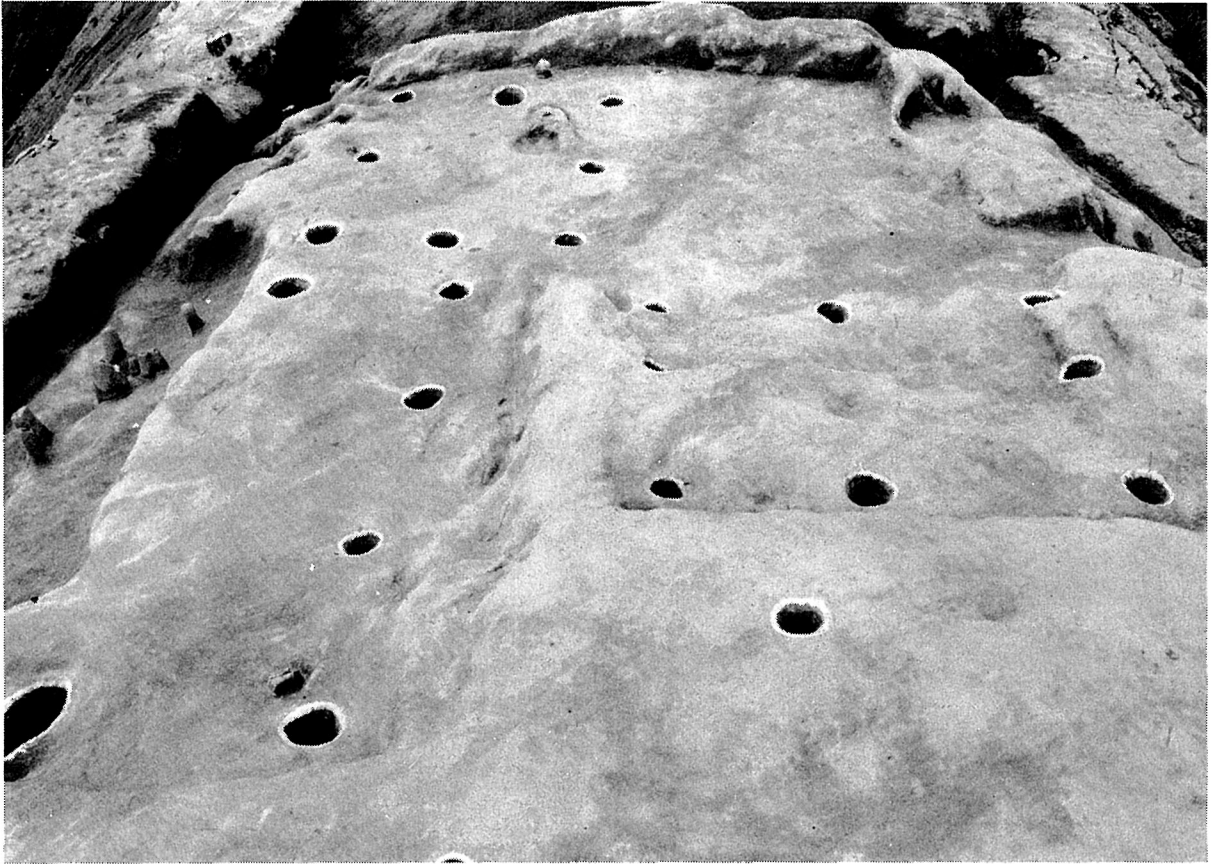
b. 長う子遺跡第2号溝状遺構断面(北より)



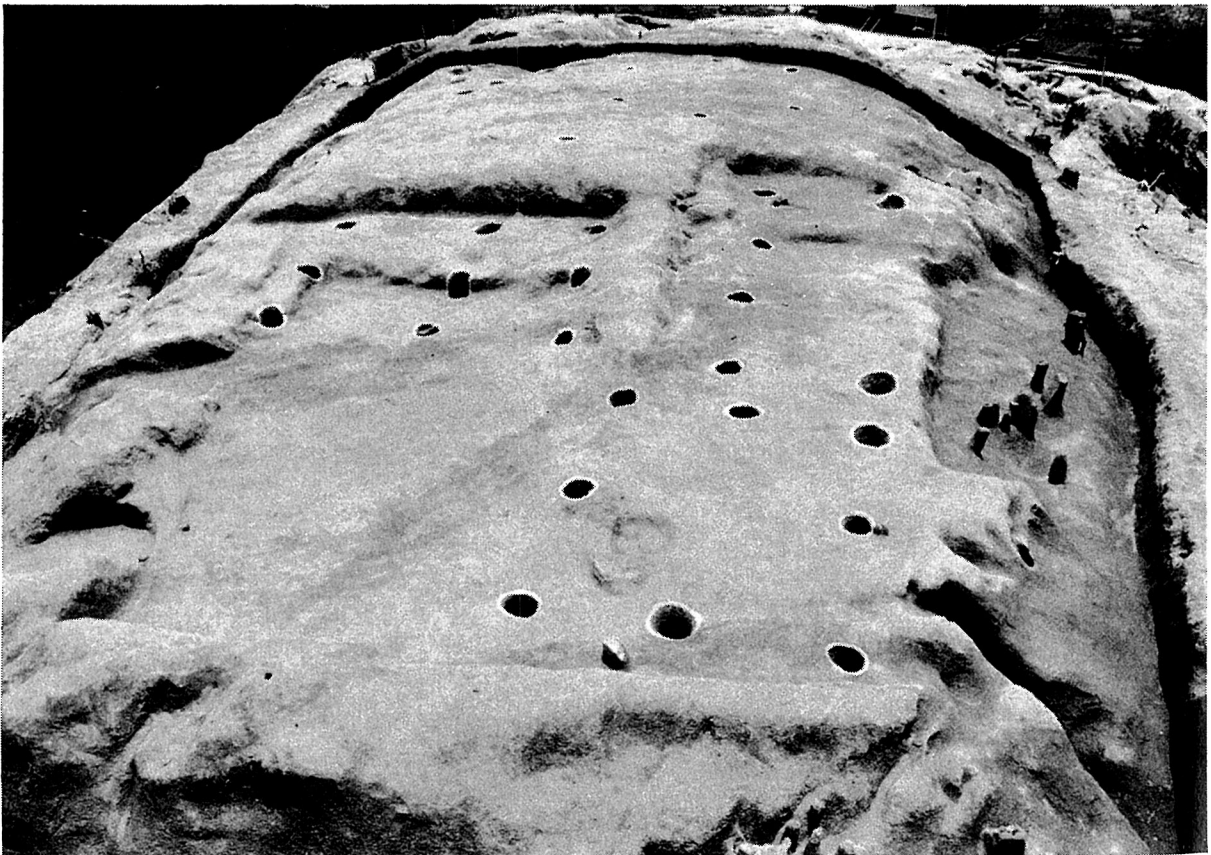
a. 長う子遺跡第2号溝状遺構（北より）



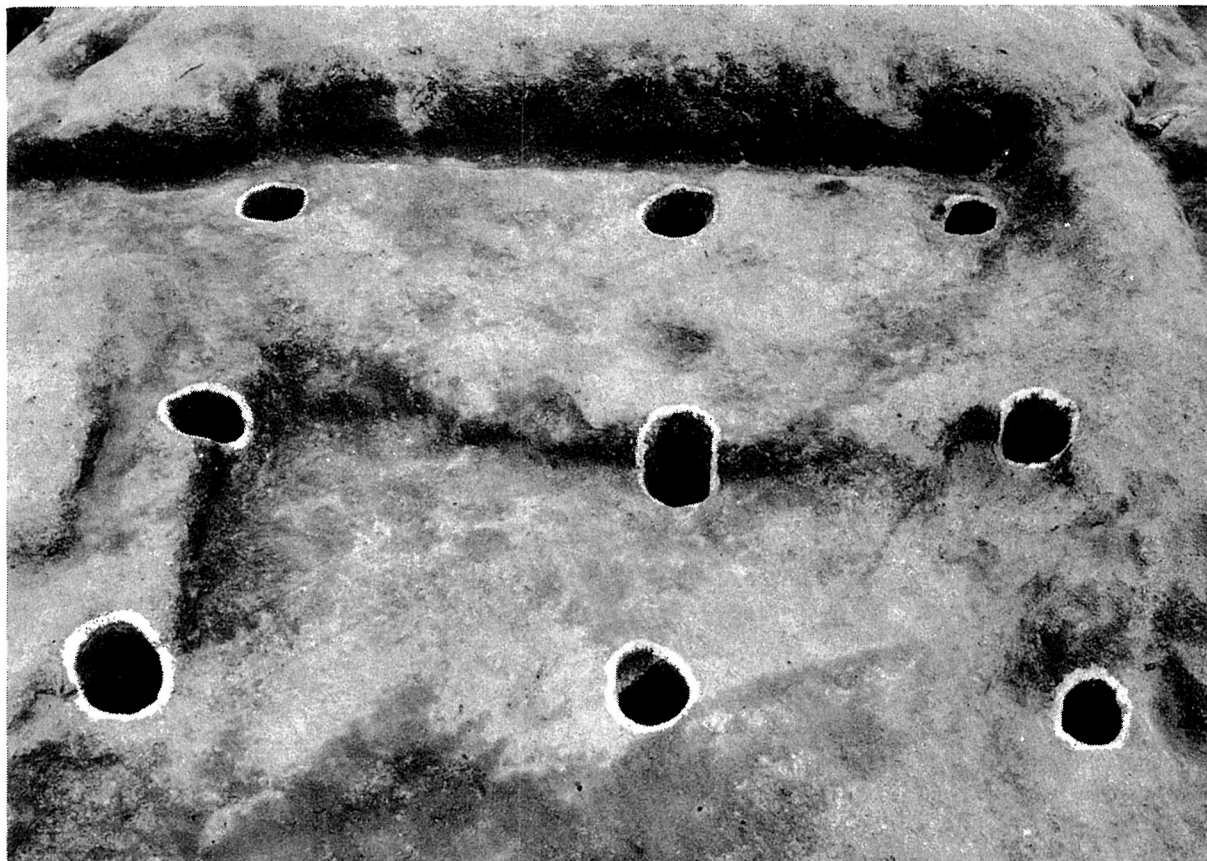
b. 長う子遺跡第2号溝状遺構（南より）



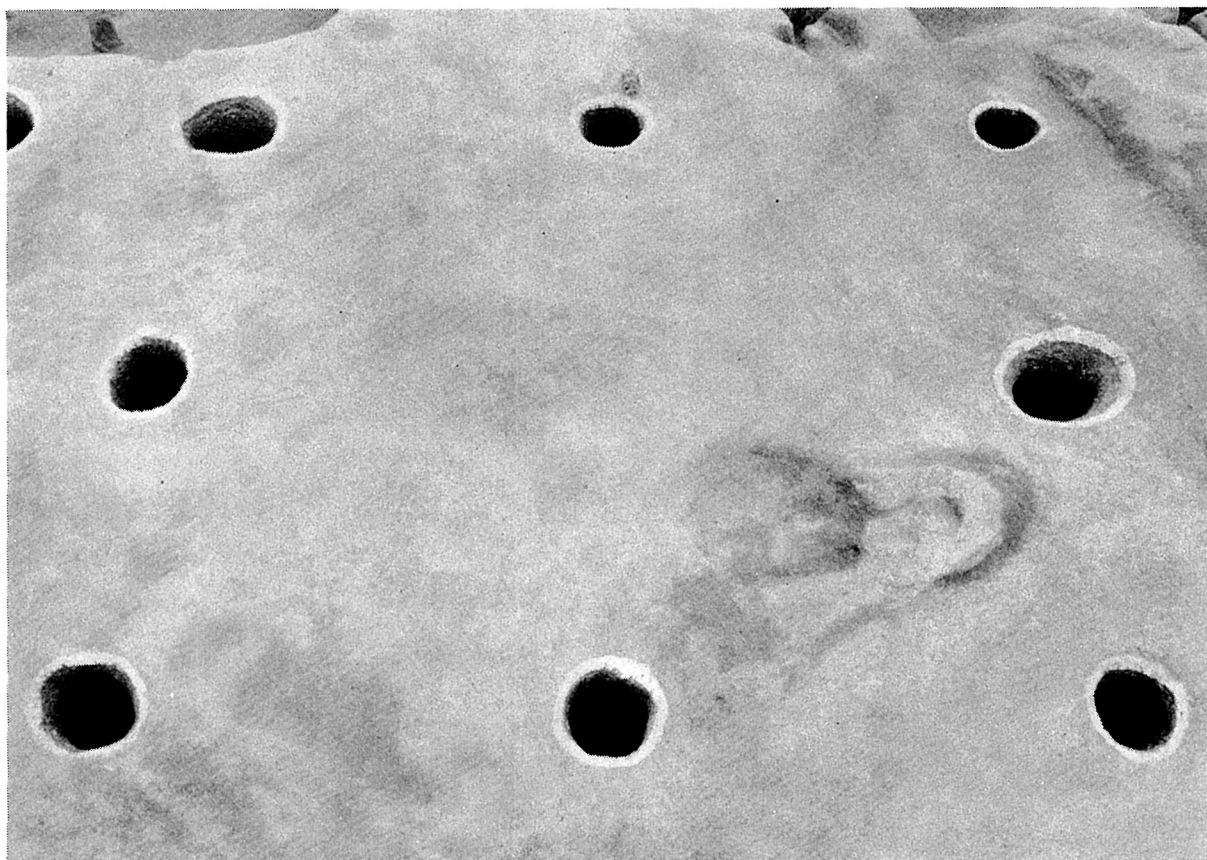
a. 長う子遺跡掘立柱建物跡B群全景（南東より）



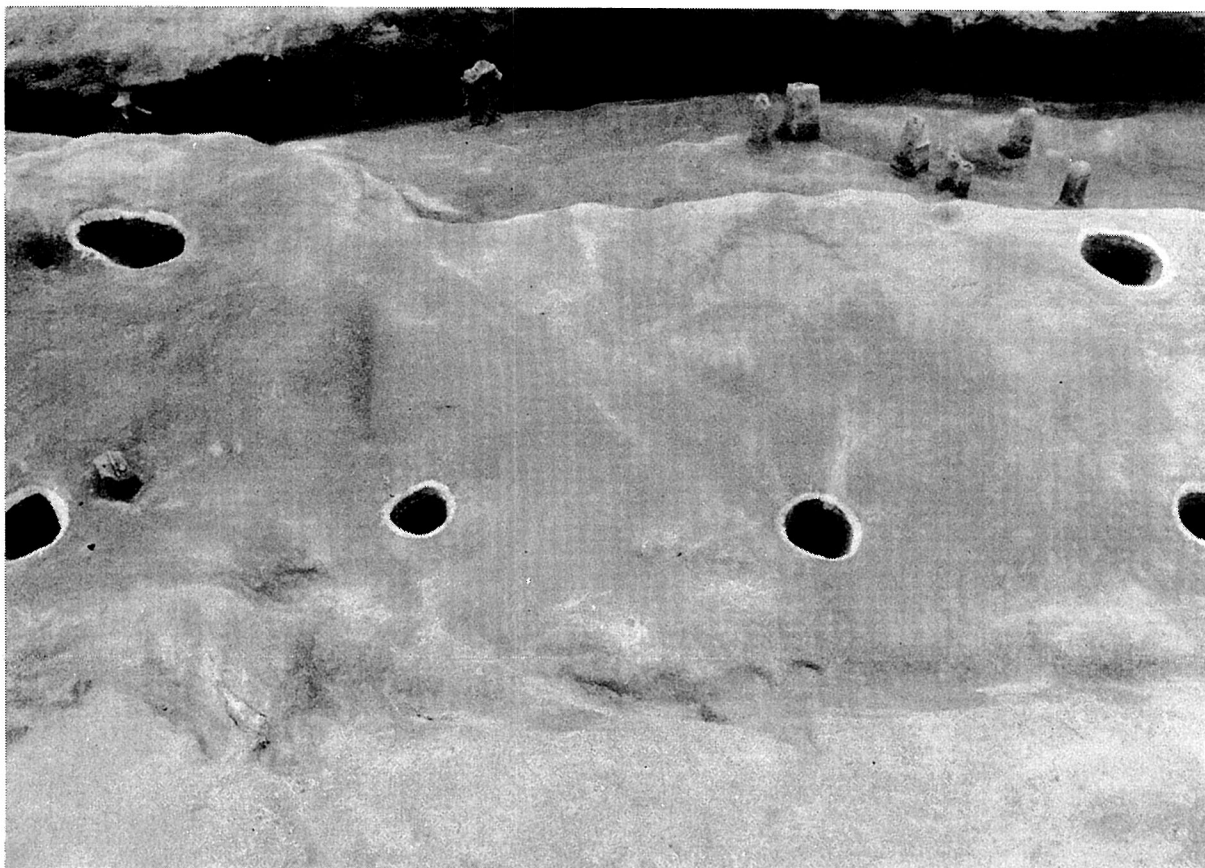
b. 長う子遺跡掘立柱建物跡B群全景（北西より）



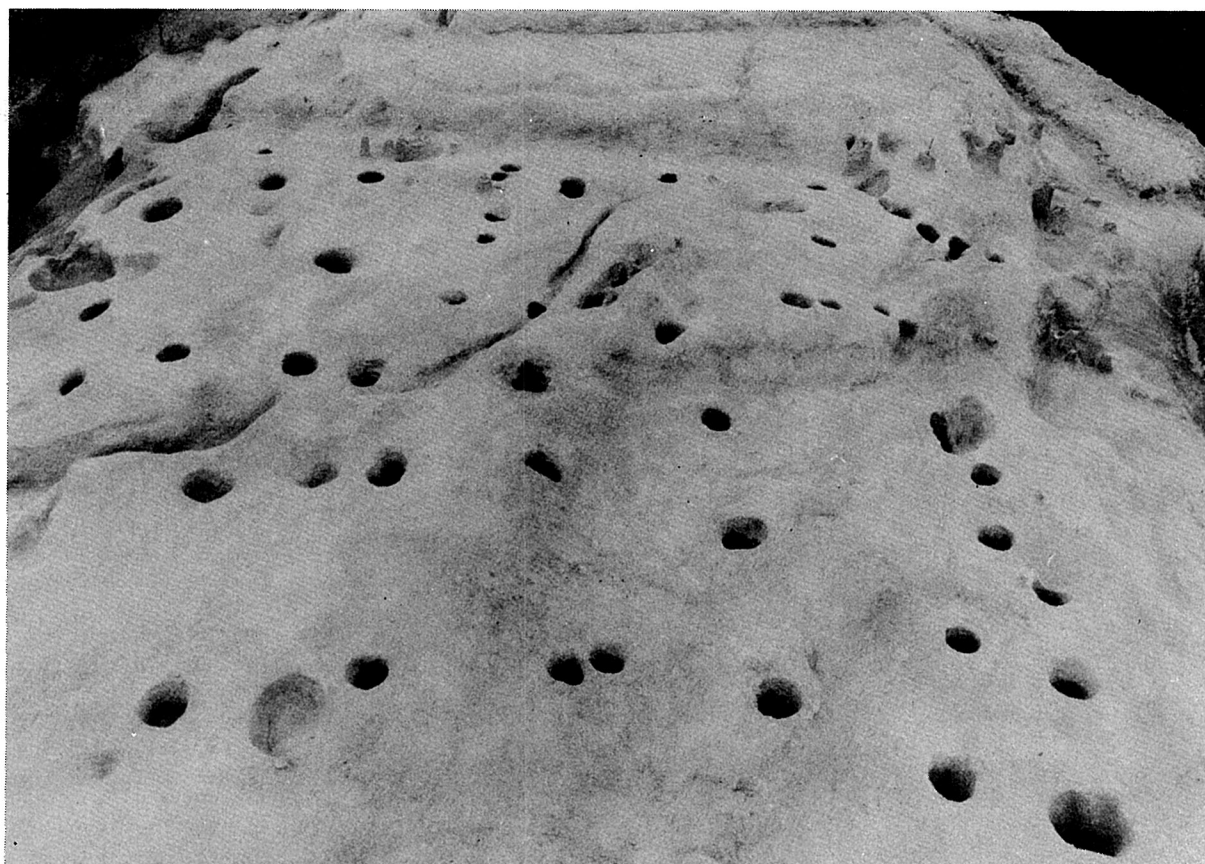
a. 長う子遺跡掘立柱建物跡 B群第 1 号建物跡 (北西より)



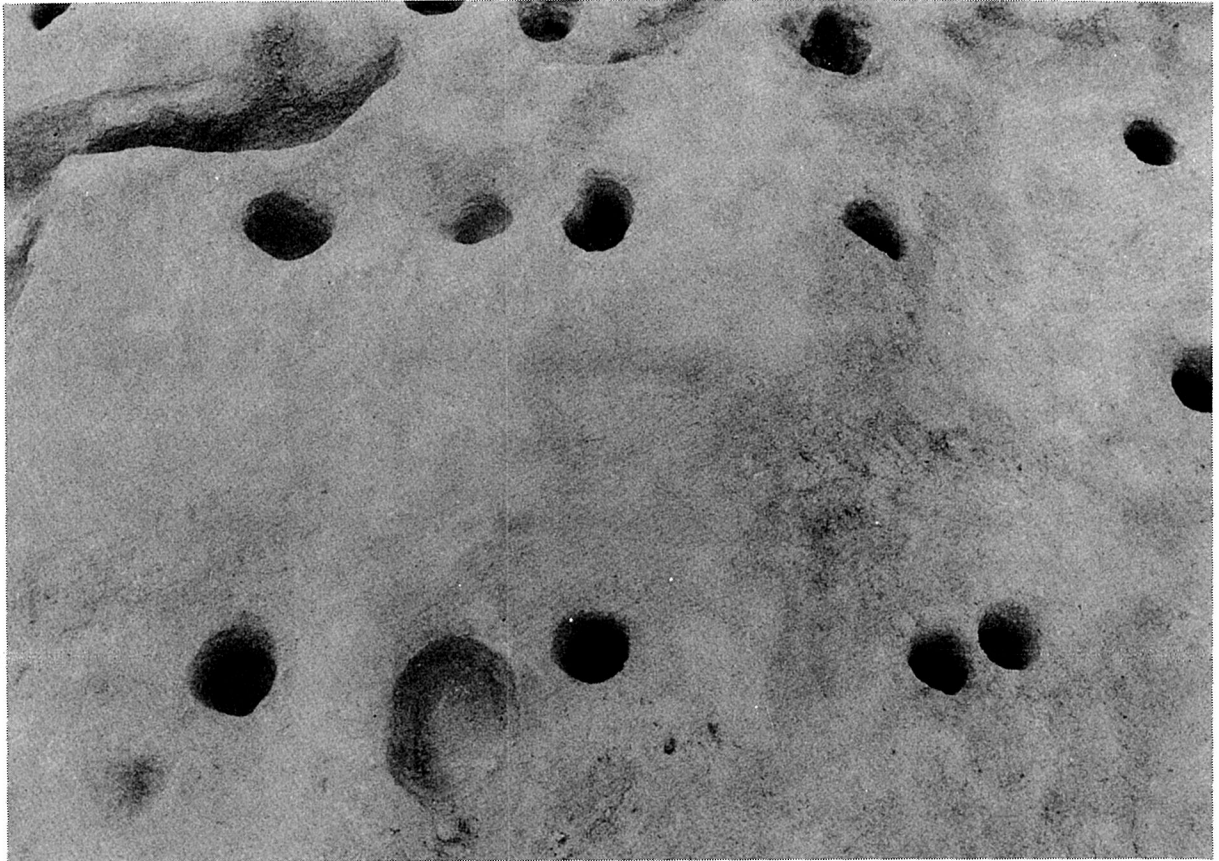
b. 長う子遺跡掘立柱建物跡 B群第 2 号建物跡 (北東より)



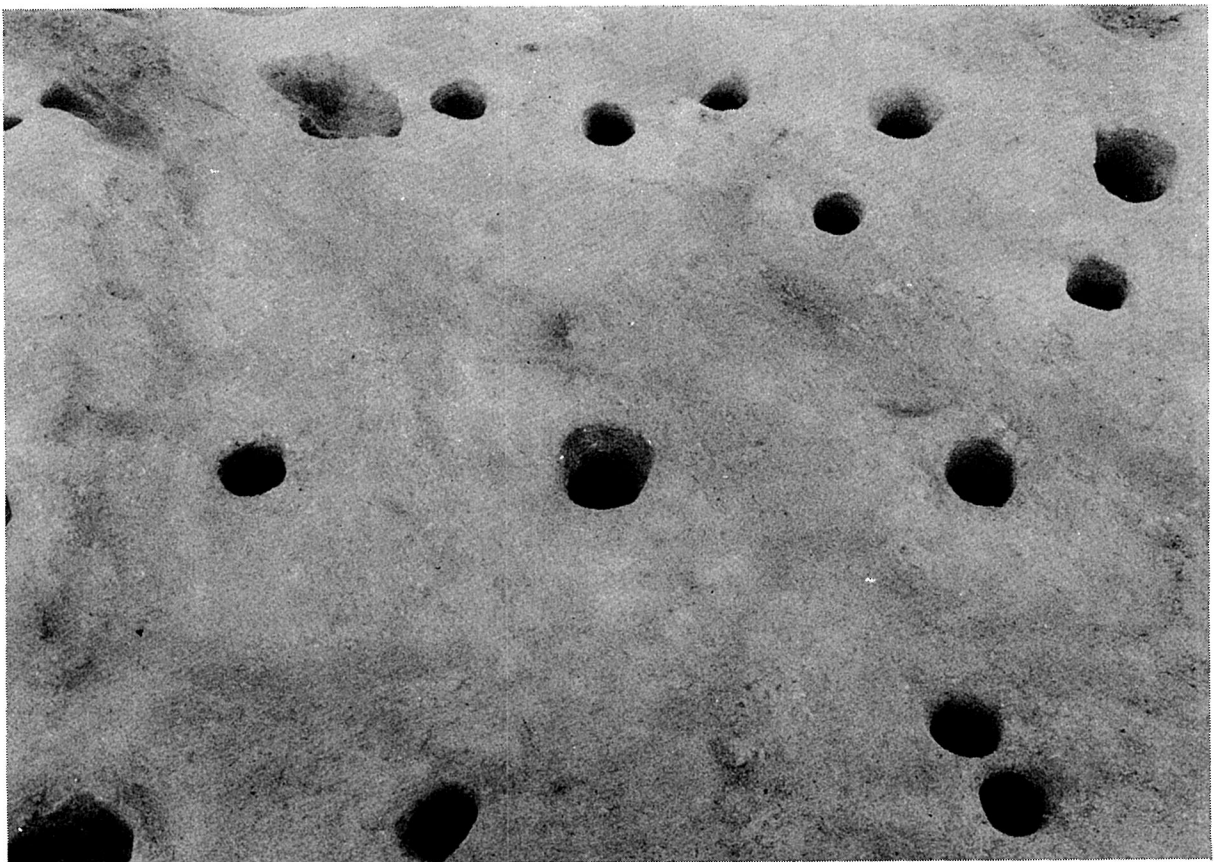
a. 長う子遺跡掘立柱建物跡B群第3号建物跡(北東より)



b. 長う子遺跡掘立柱建物跡C群全景(南東より)



a. 長う子遺跡掘立柱建物跡C群第1号建物跡



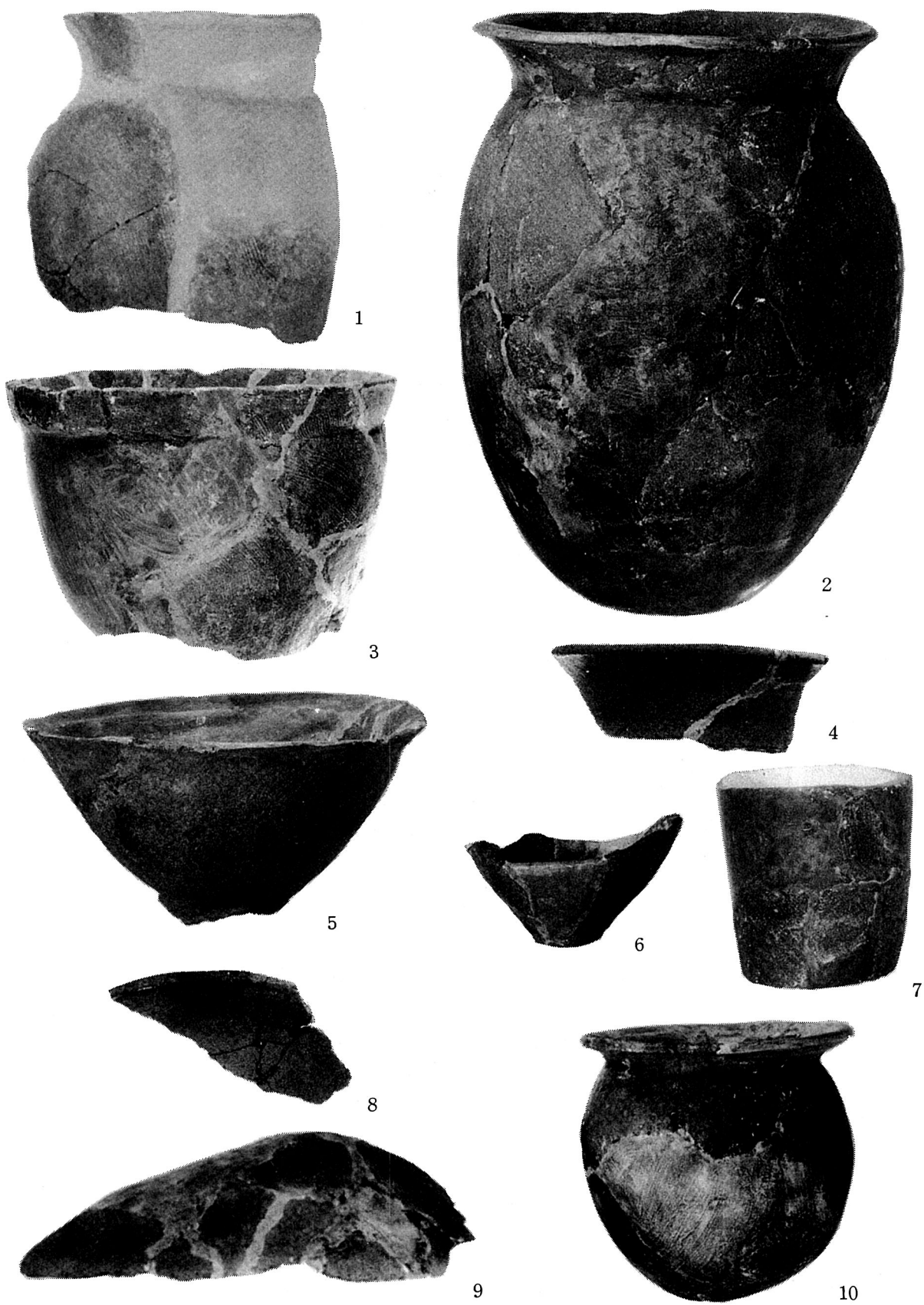
b. 長う子遺跡掘立柱建物跡C群第2号建物跡



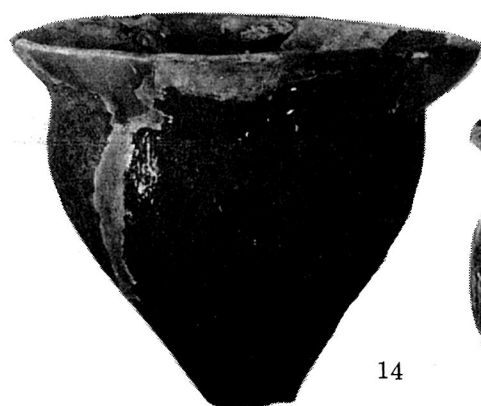
a. 長う子遺跡掘立柱建物跡C群遺物出土状態（南東より）



b. 長う子遺跡掘立柱建物跡C群遺物出土状態（北東より）



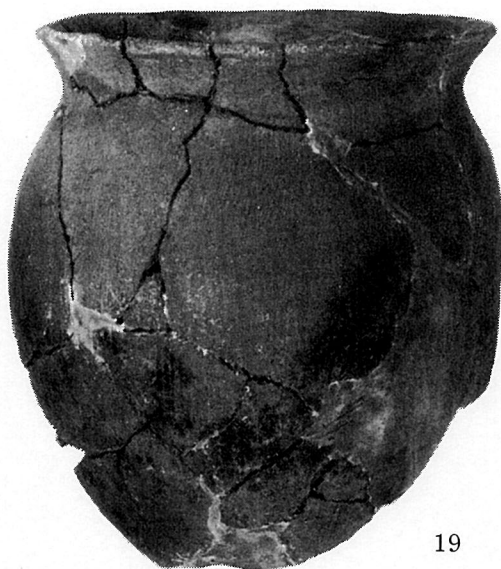
長う子遺跡出土弥生土器(1)



長う子遺跡出土弥生土器(2)



18



19



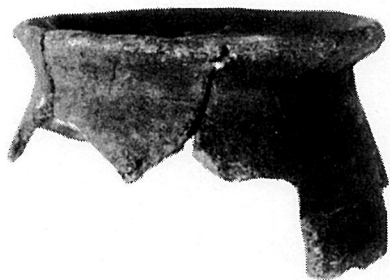
20



21



22



23



24



25



26



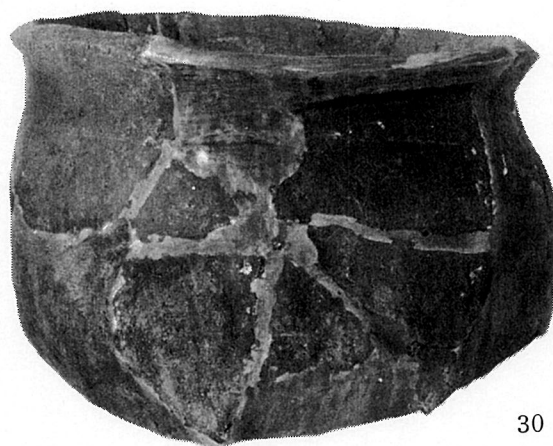
27



28



29



30



31

長う子遺跡出土弥生土器(4)



32



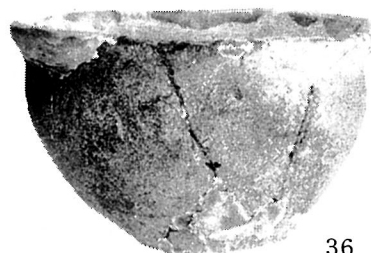
33



34



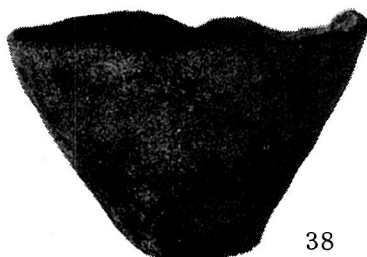
35



36



37



38



39



40



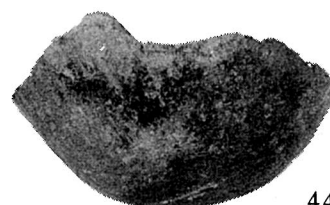
41



42

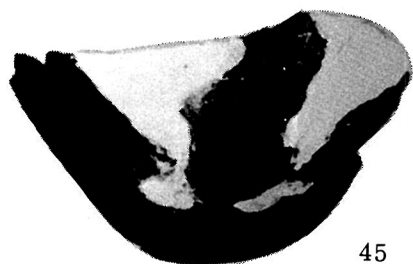


43

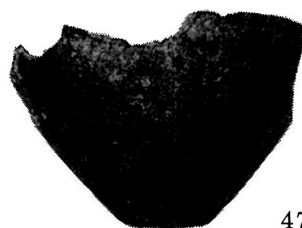


44

長う子遺跡出土弥生土器(5)



45



47



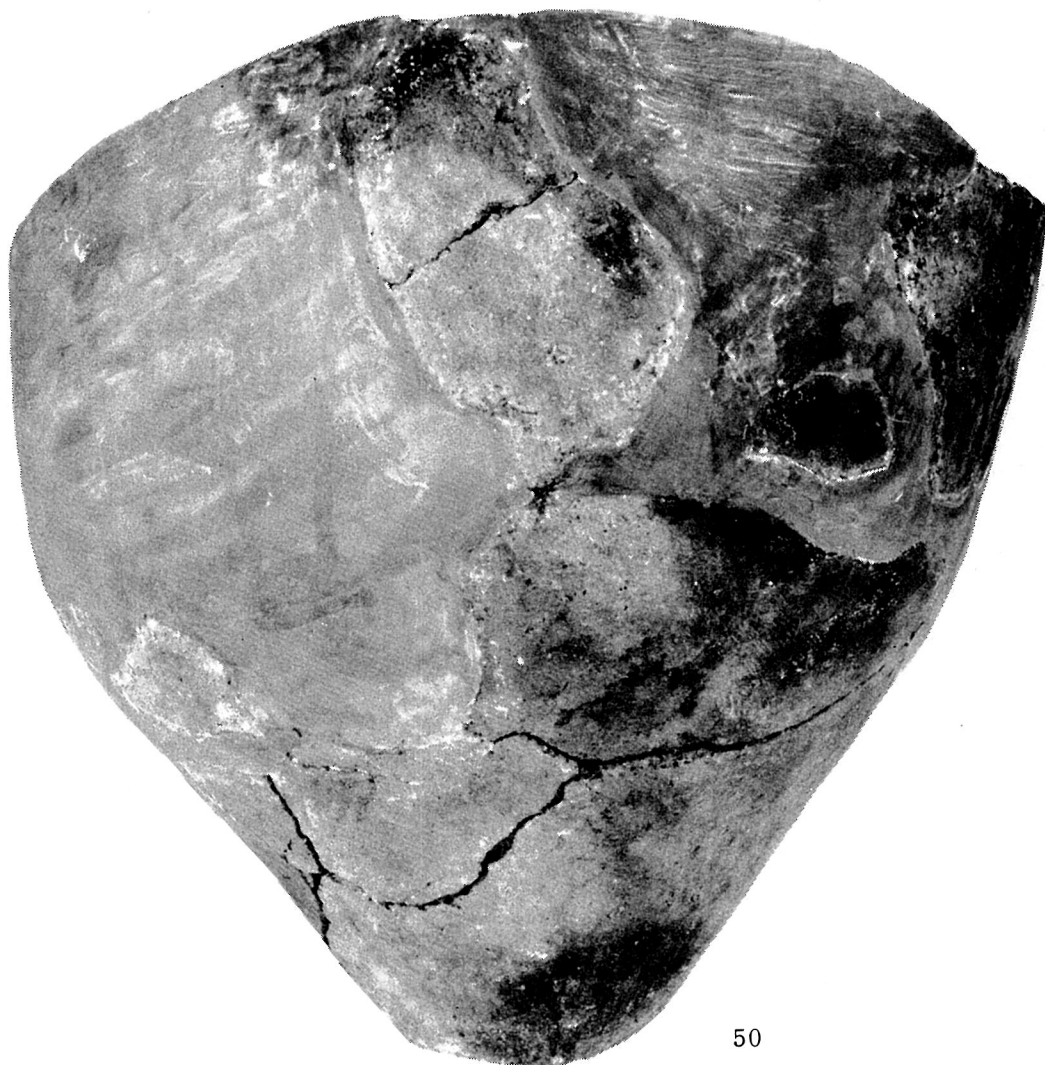
46



48



49



50

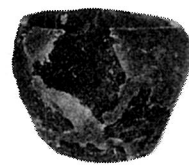
長う子遺跡出土弥生土器(6)



長う子遺跡出土弥生土器(7)



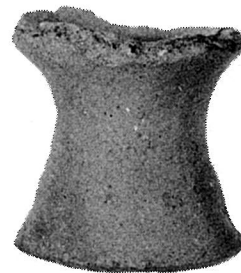
57



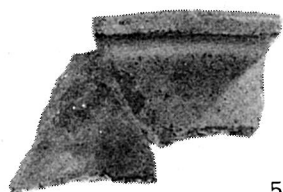
60



58



61



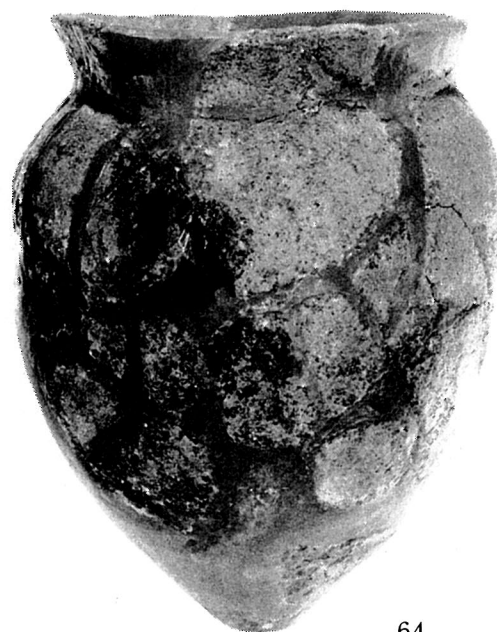
59



62



63



64

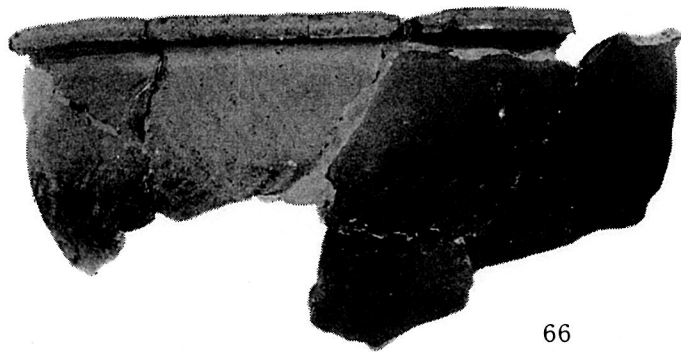
長う子遺跡出土弥生土器(8)



65

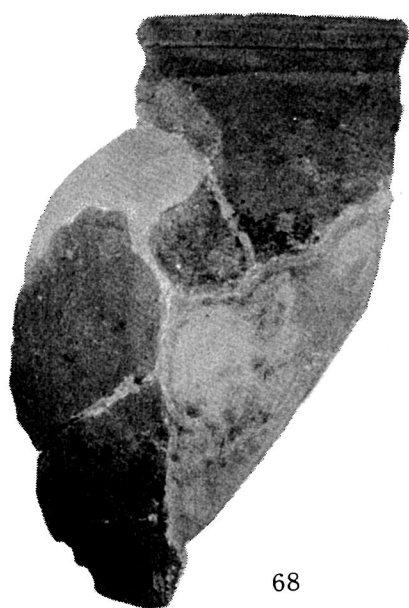


67

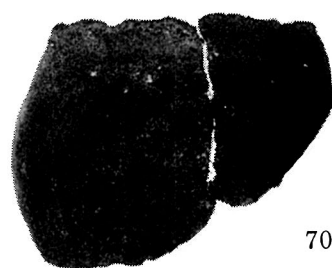


66

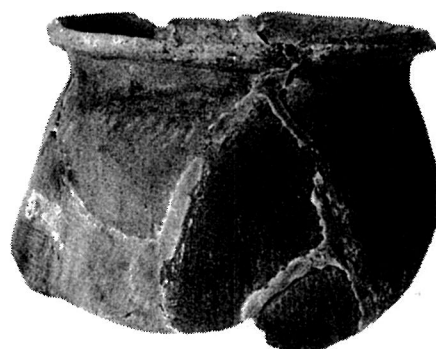
長う子遺跡出土弥生土器(9)



68



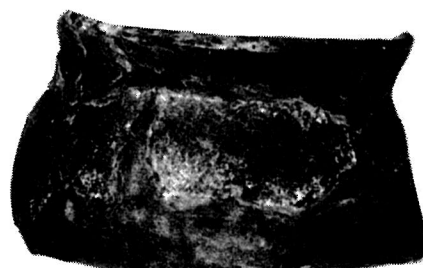
70



71



69



72



73



74



75



76



77



78



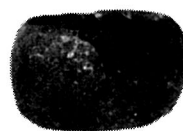
80



79



81



82

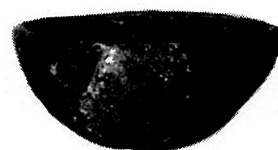
長う子遺跡出土弥生土器(1)



83



84



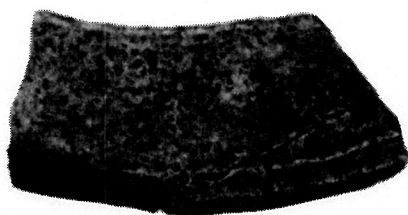
85



86



87



88



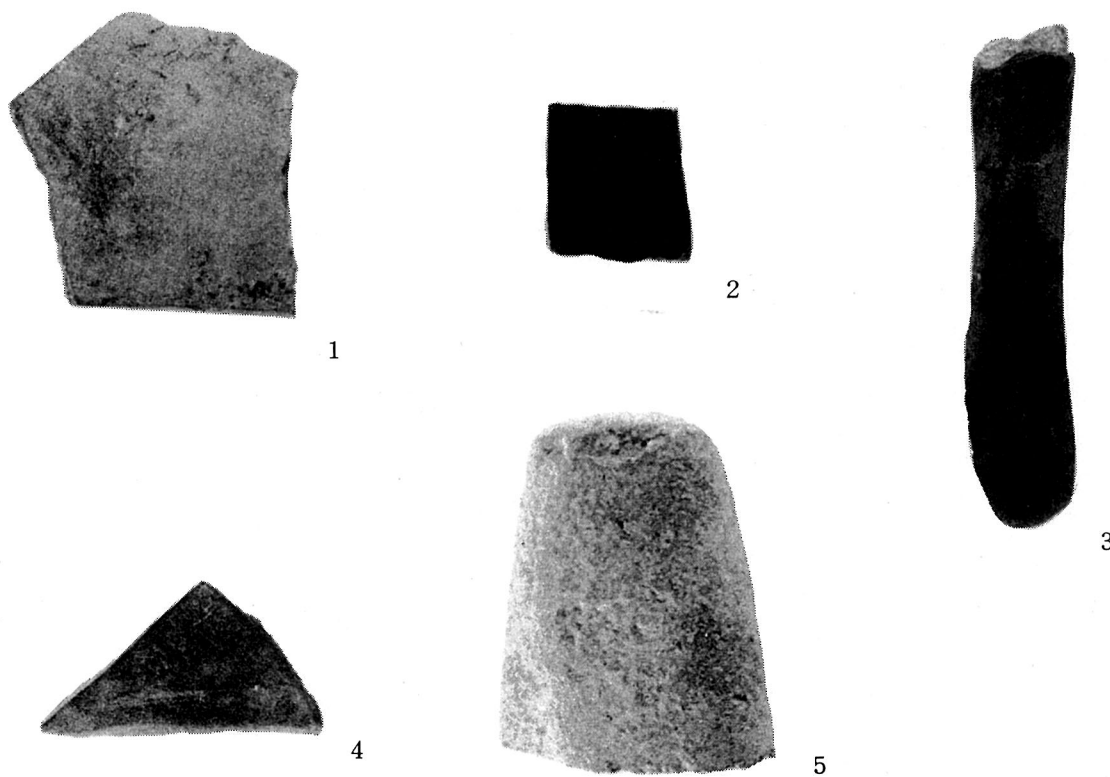
89



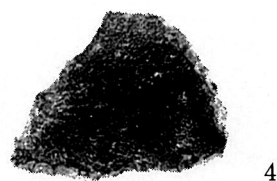
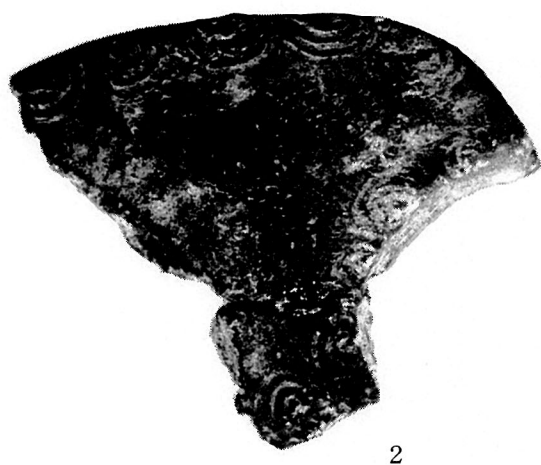
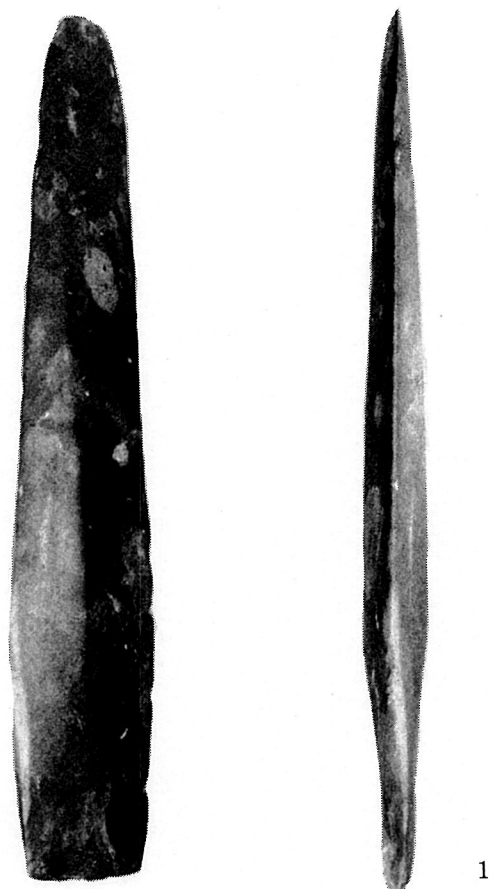
90



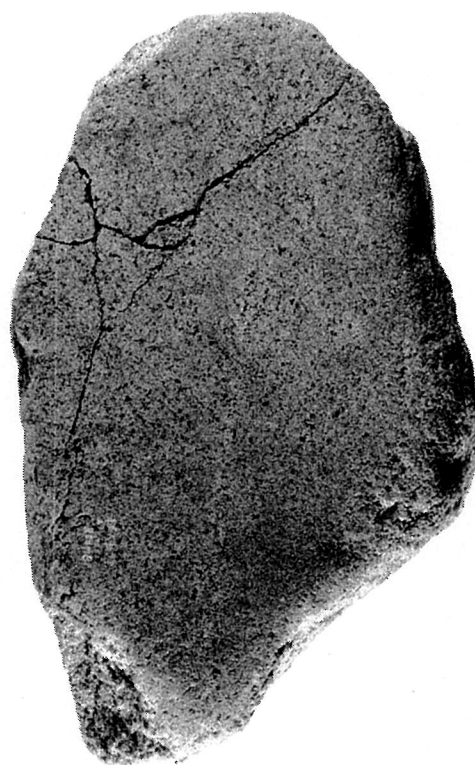
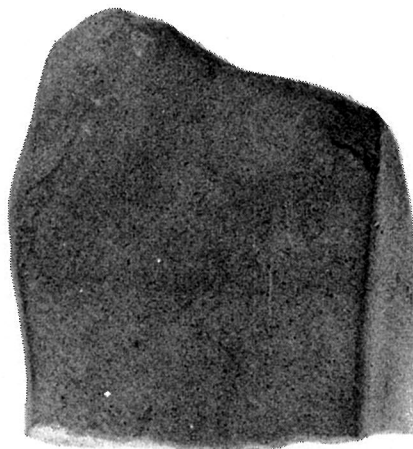
a. 長う子遺跡出土壺棺



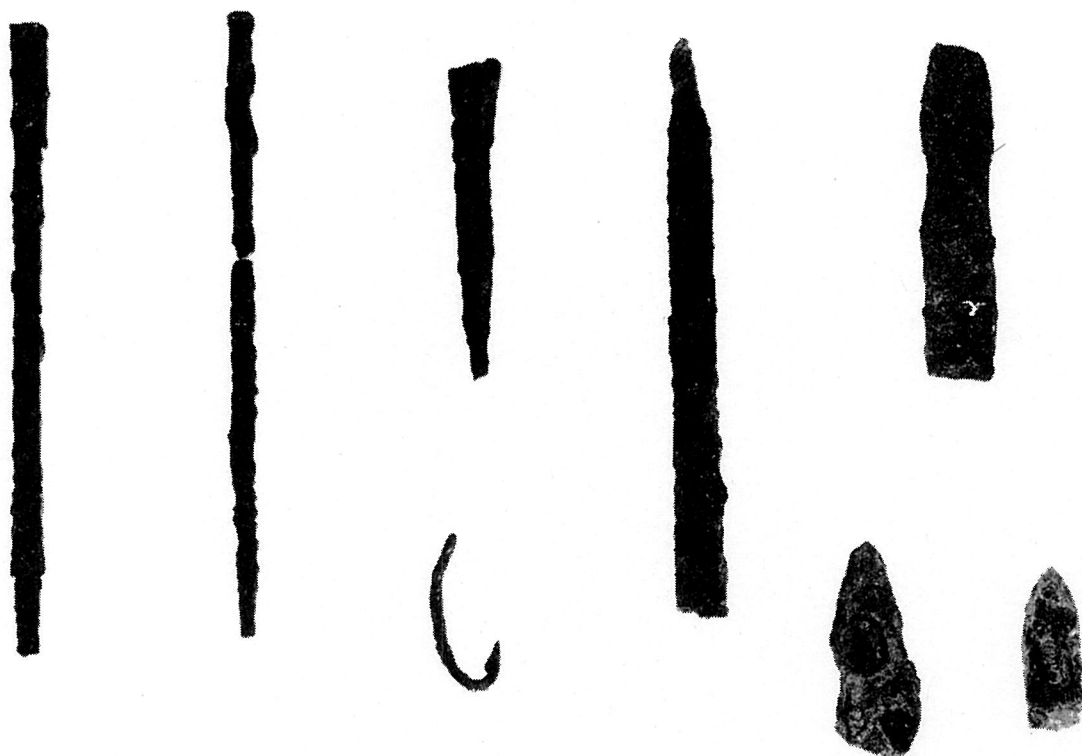
b. 長う子遺跡出土石製品（1～4砥石，5石斧）



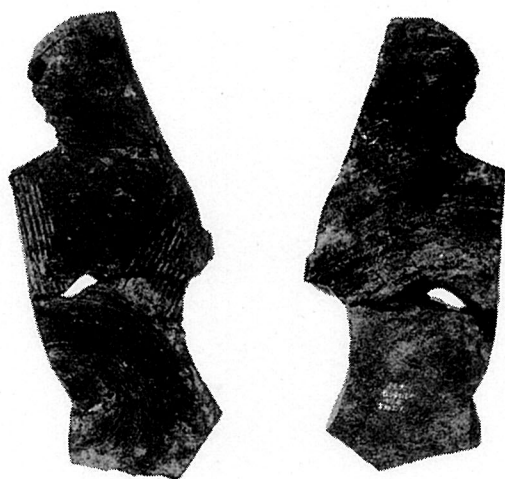
長う子遺跡出土石剣(1), 分銅型土製品(2), 銅鏃(3), 刃器(4)



長う子遺跡出土砥石



a. 長う子遺跡出土鉄製品



b. 長う子遺跡出土陶器類（備前焼）

広島市の文化財 第30集

広島市安佐南区祇園町所在

広島経済大学構内遺跡群発掘調査報告

1984年3月

編 集 行 広島市教育委員会
（社会教育部社会教育課）
広島市中区国泰寺町一丁目4番21号
TEL (082) 245-2111 (代)